

niche

工学院大学建築学科同窓会誌 No.10 1986





がん【龕】①仏像を納める厨子。②棺(ひつぎ)－広辞苑－

ニッチ【niche】(㊣Nische)、がん(龕)とも書かれる。壁体内に掘られ、多く平面半円、半円筒状で、上に1/4半球をいただく凹所、彫像などを置く。－共立・建築辞典－

niche (nich), n. (Fr. niche, from L. nidus.a nest) 1. a recess or hollow in a wall usually intended for a statue, bust, or vase. 2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it — Webster's New Twentieth Century Dictionary —

## ニッチ No.10 目 次

---

* 武藤章先生逝く	2
* あいさつ<金尾武彦>	12
* 建築学科の新展開をめざして<大庭常良>	13
* 私の履歴	
—吉田辰夫名誉教授に聞く—	14
* 前島為司氏に聞く	
—先輩を訪ねて その1—	38
* 如庵について<金尾武彦>	45
* 中国の農村集落整備<東 正則>	53
* 同窓生のニュース	
同窓生関係のコンペ入賞者	62
* 第19年度(1984)決算報告	63
* 第20年度(1985)予算	65
* 同窓会運営委員(案)	66

# 武藤 章 先生 逝く



## ■武藤 章 先生の略歴

- 1931年 東京に生まれる。  
1950年 都立日比谷高校卒業。  
1954年 東京大学工学部建築学科卒業、株式会社 新建創入社。  
1956年 工学院大学建築学科助手（天野太郎研究室）  
1960-61年 フィンランド アルヴァ・アアルトに師事。  
1961-62年 イタリー ジノ・ヴァッレ設計事務所にて設計に従事。  
1963年 武藤 章研究室一級建築士事務所設立。  
1974年 工学院大学教授（1975-77年 建築学科主任教授）

## 社会的活動

- 日本建築学会建築教育委員会大学部会専門委員  
日本建築家協会運営委員  
北欧建築デザイン協会副会長  
中野区社会教育委員会委員

本学建築学科において、29年という永い間、建築学科の教育と研究に一方ならぬ情熱をもって当っていた武藤章教授が、昭和60年10月12日、胃癌により急逝されました。

先生は何よりも工学院大学を愛され、多くの秀でた卒業生を残していくかると同時に、本学が都心型大学として大きく飛躍するための基礎造りとして、八王子校地の整備計画、図書館、3号館、5号館群の建設に多大な貢献をされました。

建築学科では、11月30日に先生の御人柄を偲ぶべく「故武藤章先生追悼会」を催すと共に、先生の業績を評価し、工学院大学建築学科の功労賞を贈りました。また大学からは、名誉教授の称号が贈与されました。

ご冥福をお祈りいたします。

## 設計活動

- タテシナクラブ山荘  
松ヶ丘病院自然食病棟・同自然病院  
南青山シティハウス  
工学院大学八王子図書館  
西狭山病院  
工学院大学八王子校舎三号館（製図棟）  
鷺の宮の家  
寺谷の家（高木東六邸）  
吉祥寺の家  
七里ヶ浜の家（天野太郎邸）

## 著・訳著

- S D選著 アルヴァ・アアルト（鹿島出版会） 1969年  
タビオラ田園都市（共訳・鹿島出版会） 1974年  
近代建築の歴史（鹿島出版会） 1978年  
アルヴァ・アアルト作品集  
(A.D.A EDITA Tokyo) 1979年  
アスブルンドの建築（鹿島出版会） 1982年

## 武藤 章 先生を偲んで

波多江 健郎

八王子の貴君の研究室から眺められる縁は殆んど紅葉してしまった。時折吹き抜ける木枯らしにかさかさと音を立てる樹々の間から、いつもの様にひょっこりと苦虫を潰した顔が現われてくる様に思えてくる。生前から貴君には何か人を驚かす様な暖かいユーモアがあったからだと思う。この様な暖かいユーモアは貴君の設計した作品の中に現われている。例の本学八王子の素晴らしい図書館のリーディングルームの空間は恰も母の胎内をほうふつさせている様に思える。私は貴君がこの世を去って、最も残念に想うことは貴君の手か

から生み出される美しい豊かな空間をこの世で二度と見られないことである。

本学は今や八王子建設も軌道にのり、今後はいよいよ新宿再開発という重大な問題をかかえているが、この様な重大な時期における貴君の死は、単に建築学科のみならず、大学にとっても大きな損失であったと思う。しかし、貴君を失った現在、我々に残された唯一の道は私達が全力をあげて、貴君の期待に沿う様努力することしか考えられない。貴君の冥福を心から祈りつつ筆をおきます。

合掌

(工学院大学教授)

## 武藤さんを偲ぶ

荻原正三

10月12日はお茶の水の明治大学で農村計画学会シンポジウムがあり、昼食を済ませて会場に戻った時に大学から亡くなったという知らせを受けた。すっかり気が動転してしまって、それからのことはよく覚えていない。武藤さんの家に馳けつけて奥様にお悔みを言った後は、ただうろうろしていただけだったようだ。

武藤さんに最後に会ったのは9月23日で、小雨の降る中を波多江先生と二人で病院に見舞った時だった。「体重が48kgに落ちちゃったよ」と少しやつれた顔だったが元気そうに話してくれた。「腸が通るようになったらX線検査で診て貰えるが、少し時間がかかるかも知れないなあ」ということなので、10月中旬までは学校に来られないかと思いながら夕方になって病院を後にした。急に雨足が激しくなって秋が足早やに近づく気配がした。

3月に胃を切って5月に大学で初めて会った時は少し顔色が青白くみえたが、快方に向っている様子がはっきりみて、これで大丈夫だと明るい気持ちになり、一緒に食事をしたりした。「まだ少しずつしか食べられないんだよ」と少々淋しそうな顔でしたが、もうすぐ自慢の腕をふるったス

ペティを沢山食べられるようになるよ、と冗談を言ったりしたことが思い出される。

13日の通夜から14日の密葬、志半ばにしてこの世を去らなければならなかった彼の気持を慰めるかのように、しとしと雨が降った。

大学キャンパスの計画に、研究生の学生の指導、とりわけ大学院生の指導に、八王子設計教室の将来計画に、家庭では二人のお子さんの将来に、さまざまな深い想いを残して旅立たねばならなかつたことを思うと、何と言って彼方の彼を慰めてよいやら、言葉がない。そんな思いは、あれからずっと私の胸の内にある。その中のたつ一つでも、彼に代ってやってあげられることができればと、これは大学以来の仲間の一人として、思いがけなくも同じ30数人の同級生の中で、昭和38年以来同じ職場で働いてきた只一人の人間として、思う。

戦後のまだ食糧難でみんな空腹を抱えて「海草ラーメン」なんかすすっていた頃、寒い製図室で丹下先生の課題やなんかで一緒に徹夜をしたり、藤島亥治郎先生引率の下に京都奈良見学旅行で、知恩院の池のザリガニをつまみに安酒を飲んで騒いだり、など走馬燈のように思い出が眼に浮ぶ。

工学院に来て久しぶりに再見したのは38年の春、

樋口先生が東大に移られてガランとした4階の研究室だった。早速気を遣ってくれて、南迫さんに私の部屋や用具の整備を手伝うよう頼んでくれた。波多江先生をはじめ計画系の先生が集まって歓迎会をしていただいた。以来、学生の指導、カリキュラム、若手の育成、学科の運営、設計に対する姿勢、などさまざまな点で多くのことを教わった。私にとっては良き友であったばかりでなく、良き先輩格でもあった。そんな武藤章を、秋の無情な嵐が、一片の前触れもなく、遠く彼方へ連れ去ってしまった。運命というのは、何と厳しく無情なものか。

冬も近づいた11月30日、珍らしく穏やかな八王子での追悼の日に、奥平耕造君の追悼の辞を聞い

ていて、涙が止まらなかった。やっぱり、武藤章というかけがえのない人を失ってしまったんだなあ、の想いがじいんと胸にしみた。

時は哀しみを和らげてくれる。と言うが、深める場合だってある。

武藤君よ、お前さんは氣むずかし屋で近づきにくい所もあったが、居なくなつてみると、どこかで最後の所であんたに頼っていたんだなあと淋しく思う。

まだまだ工学院も、建築学科も、この俺も、いろいろ大変な場面を迎えることだろう。しっかり見守っていてくれ、たまには声援でもしてくれる助かるんだが。

(工学院大学教授)

## 詩情の建築家、武藤さんを悼む

山下司

武藤さんとの出会いは“Frank Lloyd Wrightと有機的建築”を卒論のテーマと決め、工学院大学の天野研究室を訪れた1957年の初夏であった。正に一期一会である。それ以来陰に陽に常によき先輩として教えられ、よきライバルとして情熱を燃やし続けてきた。武藤さんは常に思慮深く、論理的であった。しかし一方で文学的であり、感性豊かであった。1950年代のモダニズムに失望し、ライトの建築にあこがれ有機的建築をめざしたことが天野さん、工学院大学、アールトとつながって行った。1962年にアトリエ・アールトの事務所に留学され、ヘルシンキの白夜の模様を詩的な文章で知らせてもらったことがあった。いつも短い文章の中に内容豊かで詩情があふれ、輝きがあった。それは武藤さんの建築によく表われている。本当に建築がわかっている建築家が少くなつてい

る今日、武藤さんのような秀れた本物の建築家を失ったことは誠に残念でならない。ましてこれから大いに活躍してもらいたい時期が来たと思っていたのに、あまりにも短い一生であった。建築の設計と教育に捧げられた密度の高い業績は余人の遠く及ばないところであり、それ故に武藤さんを失った痛手は短期に癒すことはできない。本学にとってだけでなく日本の建築界にとっても大きな損失と云わねばならない。時間はかかるであろうが武藤さんの残した業績を生かすべく、後に残された我々の努力こそ武藤さんの冥福に通じるであろう。いつか又かってのように山に登り、海に行き、スキー小屋の中で深夜迄酒を汲み交わすこと願っていたのに……今はそれも夢になってしまった。

(工学院大学教授)

## “武藤先生の曲線”

南迫哲也

「学校に残ったらどう？」と言ってくださったのが武藤先生であった、当時先生はまだ天野先生の助手であったのに、このような人事を口にされ

たのは当時の科内がまだ悠然たる状態であったからであろうか、あるいは、年令のそんなに違わない人から話をした方が負担にならず気軽に返事が

できるであろうとの教室の先生方の配慮であったのかもしれない。卒業を間近かにして、私は就職先をまだ決めずにあった……あった……とは少々キザな言い方に聞こえるかもしれないが、事実、他に二つの所から「よければいらっしゃい」と言われていたが、何とはなしに決めかねていたのであった。

そんなことで昭和34年に工学院に滞ることになった。当時、建築学科の幹事をやっておられた波多江先生の部屋に助手として置かれた、フリー・ハンドで瞬く間に透視図を描かれる波多江先生の所へ、隣の樋口先生の部屋に居られた石渡敦子女子がいつもクッキーなどを持って遊びに来られた、明るくハートナイスな波多江先生はまだ新婚ホヤホヤで毎日ジョークの連続で笑いころげていた。翌年、こんどは樋口先生が幹事になられ、武藤先生と石渡女史が結婚されることになり、私は樋口先生の部屋に移された。そして新婚間もない武藤先生は敦子夫人を残して、アメリカを通って、フィンランドのアアルトの所へ武者修業に行かれた。羽田国際空港でのキヌギヌの別れは涙をさそった。

フィンランドからの便りに“初老の先生方にまかせずに、学内コンペ（武藤先生発案で教員のポケットマネーを集めて賞金とした）を続けてください”とあった。

フィンランドからイタリヤのウディネにあるジノヴァッレの所へ行かれ、少々帰国が遅れた頃、天野・樋口両先生が相ついで工学院から他へ移られてしまった。私も樋口先生の紹介で東工大の篠原一男さんの図学の助手として採用されることになっていたが、天野太郎先生の強い反対で“お前は工学院に残っていなさい”と命令された。“残念ですが”と東工大の清家研究室に謝まりに行つた。

そんなある夏の日、二人のフィンランドの若者

が武藤先生の紹介状を持って訪れた、山下先生がヨットの合宿をしている油壺に案内することになった。鈴木達己さんの運転するワーゲンで行くことになった。一人はロンボロ（天野家用語では“オングボロ”）というチョビヒゲのある敏健そうな人でもうひとりは、マンシッカ（天野家用語では“萬助”）という顔中ヒゲだらけのヴァイキングもかくやと思うばかりの大男であった。北欧人固有の恥ずかしがりやであったが車で2時間も話をしている内にすっかりうちとけて、建築の話をする事になった。二人が言うにはコルプゼの曲線は粘土板を曲げてできる形で、アアルトの曲線は湖の水が湖岸を永い年月かけて洗い流した形で岩のような固い部分と柔らかい土の部分との混在が多様な状況を曲線に示しているといいながら私の手帖に曲線の違いを描いて見せてくれた。その鮮やかな感性に驚いたのを今でも印象強く覚えている。

武藤先生が帰られて直ぐのことであった。石渡家の庭に集合住居を建てる事になり、武藤先生の設計をお手伝いさせていただいたことがあった。その時の手すりに使われていたパイプの曲げ方のイキイキとした形には感激した。当時武藤先生は天野研究室で淡島千景の家の設計を担当しておられたが高台に2層に重なるバルコニーのバラベットはアールトの曲線が使われていて、なんとはなしに気恥かしい気がしたが、このパイプの手すりは異質なものであった。リボン体操のリボンのように躍動感に溢れて生きていた。

そしていま、武藤先生は、いつものような素早さで虚空に孤を描いて彼岸に飛んで行ってしまったが、あの世で好きな建築とスポーツに邁進しているにちがいない……と、思うことにしている今日この頃である。

（昭和34年卒）

## 武藤先生の思い出

深沢俊一

83年の盛夏、先生と北欧の旅をすることができました。勿論アアルトの建築を見学する旅です。先生はロバニエミにある図書館をまだ見ていないと言うことで計画された旅行でした。ある日事務

所（初台）に伺うと、先生から今夏旅行するぞ、一緒に行こうとさせられた訳です。その時、行ってみますかと冗談ともつかぬ返事をした覚えがあります。（百聞一見にしかずです。）それからが

大変でした。機上からマッキンレイの山が白く輝くのを望んではじめて旅行が始まった気が致しました。

旅行中は先生と同室させていただいたことでこのほか思い出深い旅でした。またアンカレッジを飛び立ち、もうひと飛びでヨーロッパという時にある方の紹介で機内コックピットに先生を入れていただき、自動操縦、いま何処を飛んでいるかななど、みせていただき、そのうち朝焼けの雲海の下に、黒々としたヨーロッパを見たことなどがほんの昨日のことのようにおもわれます。まあそれからの毎日は建築、建築、でした。ストックマン百貨店、ケトウタロ住宅区、コルミリンネのアパート、ウェイリン・ゴース印刷工場、シレンの教会、ペントイラの劇場、タピオラ教会、スクラ・コルテボヒヤの住宅区開発、森の墓地、教会、ストックホルムの市庁舎等学生のころの思い出深い建物との出会いも有りました。

ラハティの教会では、その美しさの余り、総身トリ肌をたてている私に、ニヤリとして、「いいだろう美しいね、こんなヨーロッパの端の田舎町でだよ。」と仰しゃった。ヴォクセンニスカの教会では、我々が生化学者のようにあちこち調べま

わっているなかで、先生は午後の日を受けながら堅い教会の椅子に樋口先生と並んで生態学者のように、建物を楽しんでおられる姿が目に浮んできます。その時なんとも羨ましい気持ちにさせられました。

またイマトラのホテル（ヴァリテオン）ではむかし天野先生とご一緒したこと、そのホテルでは日本人がはじめてなので、日の丸の旗を立てたこと、またセイナッアロの前では、ここからだよと、いまだにその時、その折にふれて話してくださった言葉が、建築家、物作りの人の言葉として印象深く思いだされます。

アルトの建築を写した先生の写真と、雑誌やその他の写真を較べて御覧なさい、先生からのメッセージが直に伝わって来るよう思います。旅行の最後を飾ったのは、ブローニュの森の中にあるグランド、カスカード（ギマール風）レストランで大きなフォグラを食したことです。先生との忘れられぬ、二度の食事の一回です。

私達が物作りとして今日あるは、先生のいつもかわらぬ、強いメッセージのおかげです。

（昭和38年卒）

## 武藤先生について 戸沢正法

私が学生のとき、設計製図の課題「中学校」の担当が武藤先生でした。中間提出でのことです。自分の順番がきておねがいしますと云って先生の前にスケッチを差し出しました。1分、2分・・・じっと図面に目を落したまゝ先生はひとつも云葉を発しません。まわりをヤジ馬が囁んでいます。私にとってこの1、2分はまわりのヤジ馬に対してもある程度の自信に満ちた態度でいられる時間でした。それから3分、4分・・・うしろにはまだ何人か待っています。ヤジ馬からは何となく白けた空気が流れはじめました。先生は図面に目を落したまゝです。私の自信があやしくなり何となく不安が拡がりはじめ、これは出なおしだなと思いました。いさぎよく、ありがとうございました、と云いながら図面を先生の前から下げようとした時、先生の右手がすっとのびて私の図面をおさえ

ました。

後年、何かの折に先生からうかぶたのは、学生の課題を見るのにいろいろな見方がある、たとえば、先生が赤エンピツを持って学生のスケッチの上にそれなりにエンピツを動かして、楽しそうに自分の設計をしてしまうとか、先生がその課題についてあるイメージを持っていて手をかえ品をかえして学生の作品をその方向に指導してゆくとかある。しかし武藤先生は学生のスケッチの中に何かよいところを見つけ出して、さらにそれに磨きをかけるのにはどうしたらよいかを考えるのだということでした。

学生のスケッチを見て、欠点を指摘し、それを解決する一つの方法を提案するのは学生を説得しやすいのですが、未熟なスケッチの中に埋れているその学生も気がついていないかも知れない、も

のつくりの芽みたいなものを探し出して、しかもそれをどうしたら全体をまとめる手だてになるかと考えることができるのはよほどの目とひたむきな情熱に裏づけされた手がなければできないことだと思います。

その後、先生の仕事を手伝うようになって、私達スタッフのスケッチに対する先生の対応の仕方は、腕ぐみをしながら、あるいはエンピツを動かしながら、いろいろなかたちの違いはあっても、スタッフのスケッチの上に先生のアイデアが違和

感なくのると、その仕事はキチッとしたものになり、ツヤさえ出てきたかのように感じられたものでした。

先生がおっしゃってた「設計は一次回答ができるでもだめなんだよ。何回も練りあげることによってその仕事にツヤが出てくるんだよ。」という云葉が、仕事の上で実感できたときのよろこび、このよろこびに支えられて設計の仕事は受けがれでゆくのだと思います。〈合掌……〉

（昭和39年卒）

## 武藤先生の思い出

直井俊次

今、机に向って改めて私は武藤研最初の所員だった、と思い出す。

その事に特別意味があるわけではないが、心の隅にかすかなこだわりがある。

63年～72年までの8年間初期の作品にかゝってきた。退所するにあたって私が先生の片腕だと評価してくれていた人達から、何故やめるのか、と不思議がられた。

当時私は世の中は船頭と漕手によって構成されていて、組織における漕手は新陳代謝すべきだと考えていたし、ベテランの漕手は船頭にとって便利であろうが、新しい血が入らなくてはマンネリ化するのではないか、と危機感を持っていた。又自分は船頭になれるのか挑戦してみたかった。30才だった……。

武藤研に入って私は建築に於ても人生に於ても「彼岸から此岸」へ渡る眼を開らかせてもらった。

初めの頃私は図面を書くのが早かった。

1日2～3枚書いていた。

先生の紹介で半年ばかり天野研に行く事になった。その頃のエピソードとして葬儀当日教えてもらった事がある。先生と天野先生は私を通して図面を書くのが早いのも遅いのも結局同じ、どちらも考えていないのだ」人の資質は環境によって創られる。どんな人間も育て方によって伸びる可能性がある。と改めて気付かれたという。当時は図面が遅い者でなければ伸びないと思われていたのだ。

「直井君は良く怒られていたねー」と違う人が

らいわれる。そうかもしれない。しかし今私には特別の記憶がない。気付かずに棄てたのか、吸収してしまったのか

実験補手、製図助手、助手、事務所所員として8年間、その多くは先生と一対一の生活であった……。色々な事が思い出される。

先生は自分を律するに厳しい人だった。自分の信ずるヒエラルキーをかたくなに守った。そして求める世界を一つづつ確かめていった。私はそこに修道僧をみていた。

華かな時代、物のあふれた時代が去った時、自分の時代になると先生は信じていた。

日本では力のある若者が挑戦出来る機会が余りに少ない。先生の力量から推して建築設計の仕事では恵ぐまれたとはいえない。

建築の器の大きさだけが全てではないにしても、かゝわる世界の広さが問題でその意味において先生のもっと多くの解答を知りたかった。

私の側にはいつも先生がいる。

建築や人生について教えられた数多くの事は私のほとんど全てを形成している。

私にとっての道である。

私は武藤研創始期の所員であった事を誇りに思っている。

先生は教育者として一人でも多くの優秀な船頭を世に送りだそうとしていた。私はいまだ船頭としての自信はないけれど、先生の厳しい眼に守られながら道を進みたいと思っている。

（昭和40年卒）

## 武藤さんの顔

山崎健一

事務所の連中とタテシナクラブの山荘で霧ヶ峰高原に入る夕日を見ていた。仕事の帰りがけにひょいと立寄られた武藤さんも一緒だった。

今から10数年も以前のこと、まだ目の前の白樺や樅や松の樹が成長していくなく、山荘から霧ヶ峰まで視界を遮るものは何もなかった。澄みきった蓼科の空を、スパンとダイレクトに抜けてくる文字通り燃えるように赤い夕日に圧倒されて、窓際に並んだ皆は押し黙っていた。皆、顔を赤く染めて。

夕日の最後のひとかけらが高原に消えかからんとする瞬間、突然誰かが沈黙を破った。

“屋根に登ればまだ見える”

皆はじかれたようにテラスに走り、梯子をかけて競うように屋根に登った。

驚いたことに武藤さんも一緒に登ってこられる。棟に立つともう一度消えかけた太陽のかけらが見えた。

“やった！” “まだ見えた！”

うれしそうな声があちこちです。いいものを手に入れた気分に皆ひたっている。ふと武藤さん

はと見ると、やはり満足感いっぱいの顔で霧ヶ峰を見つめておられる。

太陽が完全に高原に入り、空に青紫色が混じりはじめても、そのまま山荘の棟に武藤さんと並んで立っていた。満足感いっぱいの顔そのままで。

印象に残る武藤さんの顔といえば、アルトの作品といっても、ようやくメゾンカレが断片的に紹介されている程度のころ、作品の全貌が知りたくて、帰国されたばかりの武藤さんにお願いして、まだ整理の済んでいないスライドを見せていただいていた。

その中に時々建物を背景にした人物のカットが出てくる。奥様なのだ。その都度、

“あっ、これは”

と脇へ除けられるとき、決って武藤さんはてれくさそうな顔をされる。独特の表情だ。

この二つの武藤さんの顔は、まるできのうの思い出のことのように、ほくの脳裡に新鮮に残っている。

(昭和41年卒)

## 武藤先生の下で学んで

初田亨

いろいろと、話してみたいことがあって武藤先生のところへ出かけて行ったはずであるのに、いざ先生の前にくると、長い時間をかけて話すことは意外に少なかった。相談の内容を二言三言聞いてもらっただけで、なんだか、自分の考えていたことと思っていたことを、全部話してしまったかのような気持ちにさせられるのである。それでいて、武藤先生も私の言いたかったことの大半を理解していた。実際、先生の後の行動にそれが感じとれるのである。不思議なことであった。

先生はどんな話をもっていっても、常に真剣に聞いてくれた。何を言おうとしているのか、いかに考えているのか、出来る限り相手の気持ちにな

って聞こうとするのが、その時の先生の態度だった。このような先生だからこそ、二言三言の話をするだけで、あとは言わないでも足りたのだと、今振り返ってみれば思う。

このような先生が、私にとって大変恐ろしい存在に変ることがあった。しかもそれが、頻繁にやってくるのである。先生の発する「今はどんな事を勉強しているのか」の一言である。

私は先生のこの言葉を一番恐れた。なぜなら、先生から聞かれる度に、現在私が何を行っているか、同じ事を話すわけにはいかないからである。次に聞かれた時に、何を話すべきか必死で考えた。しかも、亡くなられる5・6年位前からは、先生

の興味が私の専門である日本の近代建築史に移ってきたようで、先生自身も新しい問題をもちかけてくるのである。私も一生懸命それに答えようとした。そして出来る限り新しいこと、先生の知らない知識を得ようとしたのである。

「どんな事を勉強しているのか」との先生の言葉の中には、怠けずに精一杯勉強しているか、との意味あいが強く含まれていた。「鉄は熱いうちに叩かなければならぬ」という言葉も、先生からよく聞かされた。その点においては、一生懸命やつていれば、先生とは違った分野に進んだ者であっても、その存在を認めて下さったのである。正しい事は正しい、誤ったことは直すというのが先生の主義だったように思われる。

デザインを専門とする武藤先生のところから出発して、建築歴史の方向に進んでいった私に対しても、最大の理解者の一人は武藤先生だった。そんな先生だから、筑摩書房から最初の私の本を出版した時には、誰よりも喜んでくれた。拙著を読んでくれて、「なかなか面白かったよ」といつてくれたのも、先生が最初だったように思う。亡くなられた後、先生の残された数少ない新聞のファイルの中に、私の本の書評が入っていたと奥様から知らされた時には、先生の暖かいお気持がそのまま伝わってくるように感じられた。このことは先生が私に置いて行かれた、何よりも有り難いお

土産だと思っている。

デザインと建築歴史という違いはあっても、先生には何でもぶつけて行くことができた。私は、公の場をみつけて、なるべく先生に食い下がることを考えていた。「有機的建築の会」の講演の時にも、先生にはよく質問したし、反対の意見も述べさせていただいた。そんな時、講演を終えた後に決まって先生は、「また今日も囁みついたな」と、本当に嬉しそうに、にこにこと話しかけて下さったのである。

大学4年の時に武藤研究室を選んでから、先生の下で18年間学んできたことになる。大学院に進むかどうか迷って相談に行った時のこと、大学に残していただいた時のこと、研究室の合宿の時のこと、結婚をした時のこと、アトリエの人びとと一緒にスキーに行った時のこと、近代建築史の講義を行うようになった時のことなどなど、楽しかったこと、苦しかったこと、一つ一つの思い出が先生と共にあります。そしてそこには、厳しさと同時に、どんな事でも受けとめ、迎え入れてくれた先生の暖かさが常にあったのである。

今、私は改めて、先生を乗り越えるべき最初の目標にして、自分のものにしたいと考えている。

先生、おやすみなさい。

(昭和44年卒)

## 私 想

吉田和久

温かな日ざしの中にある製図板の上のスピーカーから、ロネットの“フロスティ・ザ・スノウマン”が聞えています。思い返してみると、こんなサウンドがモノラルでもてはやされステレオがやっと始めた頃に建築学科に入學し、その年の冬、先輩につれられて最高裁判所のコンペティションの手伝いを通して初めて先生にお会いして以来、卒業設計・大学院・アトリエと足掛け19年間、私がこれまでにコンタクトのあったいろいろな人達の中で一番長い時と一緒に過ごさせていたいた人であった訳です。そんな先生の亡くなった報せを受けてからふた月あまりたった今、何かの拍子に、ごく当たり前に目の前に出てきそうな気がする

時、やっぱりもういないんだと思うような時もあります。

“正しいモノをつくろう”という共通の姿勢をもった人達が私の回りにはたくさんいます。その中で昨年は同級生の東方君が、今年は先生までもが亡くなってしまいました。ワン・ウェイ・ティケットの入院となる前、アトリエでの先生が、瞬間、東方君のイメージとオーバーラップする時がありました。つらいものです。それがいやで遠目の先生はなるべく見ないようにしていたこともありました。

この原稿依頼が“武藤先生の思い出、等”ということなのですが、いろいろなことが文字通りた

くさんあります。が、ある意味では、私にとって、ここで特に取り上げるようなエモーショナルな思い出というのはないのかも知れません。日常の小さな生活の積み重ねでここまで時がたった訳ですから。

建築に限らず、私の身の廻りのたいていのものは先生の思い出を想起させることができます。そんな中で一八月頃だったと思う一あの多忙だった先生が、夜、光の中から浮き出るような御自宅の居間にたった1人で手を見ながら座っていらした姿は、"いちご白書"の最後のスタイル画面のように忘れられません。

学生、そして、アトリエでの作業を通じて先生から"つくる"ということはどういうことなのか、

どういう姿勢であるべきなのか、を始めとして多くのことを学ばせていただいたと思っています。先生の残して下さったものがこれからどのように分解し、発酵し、消化できるかは解りませんが、少なくとも私のマッチを擦ってくれたことは忘れないようにしようと思っています。

最後に、残して下さったものの一つとして"武藤研究室の卒業生"があります。以後、卒業生はもういないことですし、我々で先生のこの遺志をよりどころとして、武藤研究室の同窓会を存続させるにはどうしたらいいのかを思ったりもしています。

(昭和45年卒)

## 武藤先生の迷言集

武内昌巳

"……アルコールの消費量は年々上昇の一途、そのうちアールト先生のようになるかも、……"と書かれた年賀状を今年いただきました、お宅に伺った時に、「先生は、まだこんなことを言われる年ではないでしょう。」と言ったら、先生は笑っていました。

そのうちがまさかほんとうにこんなことになるとは思いもよませんでした。

A・アールトはたしか80才少し前に亡くなられたはずでしたから、アールトに比べたら先生は少なくとも、あと30年は設計活動をしなければならなかつたのに……。

僕が先生に接することができた年月はわずか10数年間でした。その間に教えて頂いたことはたくさんあったのですが、いざ振り返って見るととりとめのないことばかりで、強烈な印象のある思い出というのがなかなか出てきません。

学生時代は、合宿へ、山荘へ、スキーへと楽しく過ごしましたし、卒業後も何かあるとお会いする機会があり、思い出はたくさんあるはずですが、それがあたりまえであって特別ではなかったので、でてこないのかも知れません。

そんな中で、アトリエに夜、遊びに行き、初台の時も、白鷺の時にもあった立席テーブル(収納棚)のまわりで、酒を飲みながら話してたことが

一番、懐かしいことかも知れません。何でも言えて、何を言っても許される場所でした。たとえ、先生が事務所の中で打合せをしている時に行っても、居づらいことがない雰囲気がありました。

いろいろ話をしていました。テニスやスキーの事、大学の事、女性のこと、自分の事、少しほは建築の事、etc、何でも話しました。そんな先生との話しの中で出てきた先生の迷言がありました。たとえば、『建築学科で初めてカラーシャツを着たのは僕だよ。』その当時はまだカラーを着ている人がなかったと思うのですが、先生がそれを着ていた時に、なんとなく出た話です。この真相はわかりませんが。

『このごろ武藤研に女性が多いのは僕の魅力によるところが多いんだよ。』一時期武藤研の学生に女性が少なかった時期がありました。それは当時独身で女性に人気のあった(?)助手の某先生が結婚された為に憧れていた学生がそっぽを向いたからだと言われてました。その後、再び研究室に女性が顔を見せるようになり、そんな時に言われた先生の言葉です。

『今年のゼミ生は今までスポーツをやっていたかどうかで決めるよ。』ソフトボールの常勝武藤研(?)のレベルが下がって勝てなくなつた年のことで、やけぎみな発言でした。

『ラケットはやっぱりデカラケだね。』テニスの話しの時、ラケットの大きさのことになり大きい方が有利だということになったのですが、その後、テニスに行った時にしっかりデカラケを持って来ていました。その時に出た言葉です。すばやい行動でした。

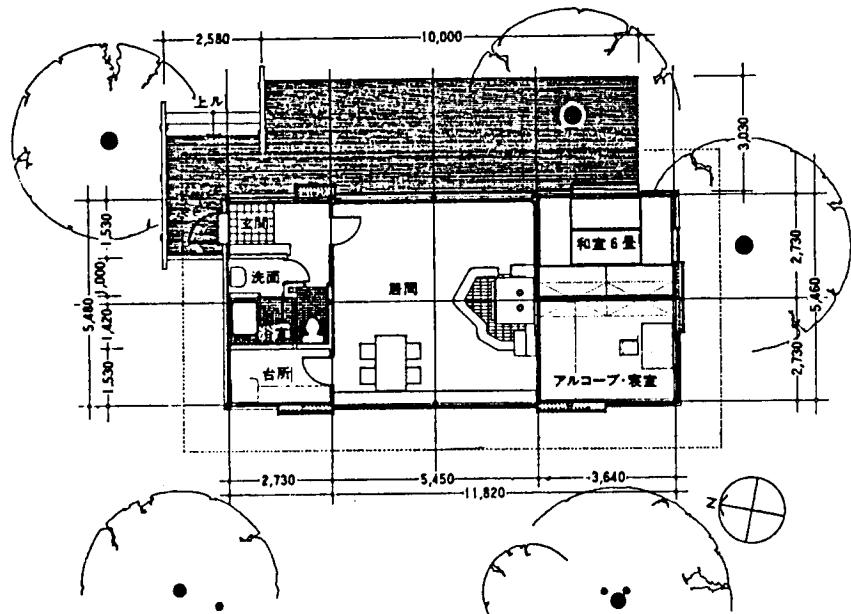
『スペゲッティーを作る時は、麺は細いもの、そして油は使わないこと。』スペゲッティーが得意な料理の一つだということで出た講釈の一部ですが、「おいしいんですか。」と聞きましたら、そ

の後「今日来たらスペゲッティーを食べさせてやるから。」といって食させてもらいました。確かにすばらしい味でした。

まだ、ほつぼつと時間が経てば迷言は思い出せると思いますが、これ以上新らしくは生れません。そしてもう気楽に話してもらえるあの場所も相手も無くなってしまいました。

先生の御冥福を心よりお祈り致します。

(昭和51年卒)



蓼科クラブ山荘平面図

# あ　い　さ　つ

建築学科同窓会会長 金 尾 武 彦

同窓の皆様、昨年御挨拶してよりまたたく間に  
1年がたってしまいました。

会員の皆さんには、益々御健勝で御活躍のこと  
とお慶び申し上げます。

同窓会の活動はこの雑誌の別項にありますよう  
に、行って参りました。

さて、本学の百周年記念日も、明年的昭和62年  
10月に、愈々近づいて参りました。

大学では、その為に様々な委員会（記念事業委  
員会、募金委員会、記念事業実行委員会、百年史  
編纂委員会、行事委員会）が設置されました。

私達同窓会の役員他、それらの関係者は今年も  
来年も急がしい歳となりましょう。

然し、唯単に委員会に参加する事でなく、自己  
の立場をかんがみ、充分に立場を理解しながら意  
見は出来限り発言し、実のある記念事業になるよ  
う協力していくかなければなりません。

会員の皆様には追って、募金委員会より御協力  
方御通知が参ると存じますが、その節は母校百周年  
記念事業の御援助としてよろしく取計方願います。

昭和64年には、新宿校地再開発も完成し、盛大  
なる記念式典が催されることでしょう。

その新宿校地再開発とは、校地2100坪、隣地3  
社の共同で、2700坪に計画されます。

素案では、30階以上の超高層が2棟、RC9階  
がそのわきに1棟そして、多目的ホール、RC造  
6階があります。低層棟は朝日生命、駅側に建ち、  
超高層1棟は校舎の京王プラザ側に第2期工事で  
収益棟（郵便局側）という事になっております。

我々同窓生としても意見は山積です。一言提す  
る義務もありますので、同窓生有志がS R研究会  
(新宿校地再開発研究会・主幹 北沢興一氏昭和  
36年卒他6名)をもち、御本職も多忙の折、レポ  
ートを2回も提案しております。（同窓会総会に  
於て報告済）、尚現在継続し、第3回のレポート  
作成の為の会議は続けられております。

八王子校地整備計画は、今実験室が次から次え  
と(5号館～10号館面積10,000m<sup>2</sup>)工事が進められ  
、今秋に完成の予定です。

八王子校地は一応これで整ったこととされます。  
甚だ残念なのは、この八王子校地整備計画並に  
新宿校地再開発計画に、理事長付専門補佐役として  
、計画指導に大活躍をなさっておられた武  
藤章教授が、昨年10月御逝去になりました。返す  
返す、我々として大変残念でなりません。

武藤先生の御冥福を心から祈りながら新宿校地  
再開発のよりよい発展を願いたいと存じます。

尚、新宿校地再開発事業計画以外に、記念事業  
として何かが建設の計画があり、委員会に於て検  
討が始まられました。亦記念出版も計画されてお  
ります。

同窓の皆様にこれから、様々な事柄に対し御支  
援を賜わらなければならないものが沢山あります。  
その節はよろしく御支援の程願い上げます。

では、皆様の益々の御健勝と御活躍を祈り、御  
挨拶とさせて頂きます。

（昭和14年卒）

# 建築学科の新展開をめざして

建築学科主任教授 大庭 常良

工学院大学は昨年北郷薰新学長をむかえ、学園将来計画のもとに、八王子校舎の拡充整備、新宿校舎の再開発が着々と進行し、他に例をみない都心大学の誕生へ近づきつつありますことは、われわれ教職員、学生、卒業生とともに御同慶の至りであります。

建築学科では、学園将来計画にあわせて科としての将来計画をまとめ、大学の新展開に対して建築学科の学術研究、教育の基本方針と具体的方策について、建築学科の全教員の共通認識のもとに実施の段階に進みつつある現状であります。

具体的動きとしては、八王子校舎に新製図室・講評室と研究室が完成し、新年度から新しい環境のもとに、教授陣の専任増強とあわせて充実した設計教育が開始されることになっております。また新製図教室を中心とする一連のスペースは八王子における建築専門基礎教育の核として全教育面に活用していく所存であります。さらに本年8月から年度末にかけて実験棟（第5号館）群が完成する予定であり、そこには構造系、生産系、環境設備系のより充実した実験実習室ができあがり、学術研究、教育の面での一層の進展と产学協同など学際的研究の場としての第一歩として期待されております。

新宿校舎については、前述のように都心大学として現在その態勢の確立をめざして鋭意検討されておりますが、何分にも都庁の新宿移転がきまりその庁舎の構想コンペも進行中の段階で、新宿駅周辺は業務用、商業用スペースの需要の増大により、土地評価額の上昇とあいまって街区単位の建

替再開発が目白押の状況にあります。本学新宿校舎は西口から副都心にいたる目抜の絶好地にあり、都心大学として願ってもない位置にあります。幸い理事長高山英華先生ほか理事諸氏の御努力により、新宿校地のより効率的利用のために隣接権利者の協力をえて都市計画による特定街区再開発にふみきられたことはまことに当をえたものとして、都市計画の担当学識者の一人として大いに期待をしているものであります。構想では34階乃至36階の高層棟が2棟（大学棟、業務棟）とこれをつなぐ形の低層棟（多目的ホール等）で構成され、地上1階はホールの他ピロティ・広場としてオーブンとなり、既往の大学では考えられない新しい形式になっているとのことで、理事者の都心大学にかける構想の斬新さに期待するとともに、われわれも都心大学にふさわしい内容の充実、構成にむかって努力してゆかなければならぬと考えております。

最後になりましたが、昨年は永年にわたって教育研究にあたられ、八王子図書館、新製図棟の設計、建設を担当された武藤章教授がなくなりました。建築学科としてはかけがいのない先生を失いましたが、われわれは先生の教育研究にのこされた業績をうけつぐとともに、先生の御冥福をお祈りするものであります。また御遺族の御好意により建築学科学生のために武藤奨学基金が設定されました。この先生の御遺徳に心から感謝申し上げるとともに末永く後進の教育に活用させていただく所存であります。



# 私の履歴

## —吉田辰夫名誉教授に聞く—

1985年9月9日～10日

於、工学院大学軽井沢学寮

聞く人 南迫、初田、岩田

吉田 こんなに、よくそろっているものかと、びっくりしちゃう程なんだけど、スペインの歴史ね、おもしろいですよ。

南迫 今、そういうもの調べて、おられるんですか？

吉田 いや、もうなんでも、おもしろそうなそういうものを読んでるんだよね。なかに関連して建築のことまでくる、まあ、文学書ですね。この木村さんのこの話は、おもしろいですね。

南迫 おもしろいですね。

吉田 もう、このくらい幅の広い見方をする人っていうのは、ちょっとないね。だから、もう感心しているんだ、ぼくは。こん中でね、前からどっかになんかないかな、種はないかなと思って、自由ということ、これはもう、ときめんな正解を書いているんだよ。自由って何かと。（笑） これは、まあ聖書にもでてきますよ、自由とは。で、私は、国会図書館の建物の中にギリシャ語で彫ってあるんですが、「真理は我等を、自由にする」と。

岩田 ああ、なんか彫ったのありましたね。

吉田 あれ、ぼくが、書いた字です、ギリシャ語は。で、日本語は、金森さんが書いた。

岩田 貸し出しカウンターの上の方ですね。

吉田 ええ、その自由とは、なかなか解釈できないんですよ。木村さんが、明快にそれね、二つの方面から、説明しているんですよね。そういうわけで、こういう具合にね、この人程、建築家は、やっぱり幅広くなくちゃあかんと。（笑） 建築家は、どうも、その建築ばっかりで…… ちょっと限定されている、局限されているという感じは、しますね。ぼくが、そうだから特に感じるんだと

思いますがね。

だから、建築する人は、建築の勉強と共に、やはりあの教養学部でちょっと文学関係のね、えー文化が、ただ文化と言ったてだめだ、そういう講義を、特に聞いておく必要があると、特に感じているんですよ。たぶん1～2年の時に、そういう科目を必修でやるべきだと、あるいは、高等学校でしっかりやっととか、どっちか知らんけれども、もう、木村さんの話を聞いてびっくりしちゃった。たまたま、私は、6年ばかり前に、フランスのルーアンに行ったんですよね。

初田 フランスへですか。

吉田 ルーアンの大聖堂を実は見るのが目的ですね。ルーアンへ行ったんですが、そうしたら、あそこは、ジャンヌ・ダルクの発祥地というか、場所ですよ。それで、あそこにジャンヌ・ダルクの記念館ができて、それを木村さんが、「私、これ初めて見たんです。」と言って、あの去年だったか、テレビでね、その写真を映したんです。ぼくは、その前に知っていたから、それで、ジャンヌ・ダルクについての、これはもう、歴史の先生ですから、もう詳しいんですよ。説明がね。それから、ものの見方でも根拠ができるから、我々の話し方とは、全然違うんですよね。なかなかテレビでも、あの何講座だか知らんけれども、あれ……

初田 市民大学講座ですか。

吉田 あれ、なかなかいいですね。「私は、写真機はヘタなんで、写真はヘタですけれども……」と言ひながら、（笑） その写真を見せて、映してくれたんです。これは、おもしろいんだ。これ、「ヨーロッパからの発想」というんですけどね。こういう発想の仕方が、あの建築家の発想の仕方と、



工学院大学軽井沢学寮にて

どうも違うんだ。で、建築家も、そういう幅の広い発想から、建築設計を始めるべきだと、こう思うんですね。単にデザインったって、デザインの根拠いったいどこだって、聞かれても、分からんですよね。私は、あの大学時代に、日本美術史と西洋美術史を文学部で講義、聞いていました。だから、それは、非常にやっぱり役に立っていますからね。文学部の中のいろいろな科目を一年生には是非、よく聞いてもらって、設計の根拠が、そういうところから出てくるようにしたらいいなと、こういうことを非常に痛感しているの。で、ぼくは、なるべく今、こういうような式の本を読んでいるんです。どうしても歴史が入るんです。スペインも2度行っていますけど、あの、スペインってね、今では、なんか後進国みたいだけども、ヨーロッパで非常に栄えて、ヨーロッパをリードしていたんですね。それから偉い学者がたくさん出てるんですね。政治的には、イスラムとユダヤとキリスト教とこれを渾然一体にしたような社会政策や政治体系を作って、非常に文化がスムースに、今やよく言うああいう葛藤がなしで、みんなが平和に生活したんですね。一方では、悪いことしているんですよ。南アメリカへ行ってね。だけど、このスペインのしたことは、非常に大きな文化的な遺産を残していますから、そういう意味でスペインっていうのは、やっぱり、我々知らない所だったから、歴史を調べるのに、非常におもしろいんですよ。

それから、設計、頼まれれば、頼まれたで、私、

ちょっと前から関係してました、設計事務所がありますので、あのそこへ応援に行く、応援って言っても今は、何もできませんから、しいて言えば、小言を言うとか、文句を言うとか、そういうこときりできないわけです。ですから、年をとると敬遠されますね。若い人は、若い人なりのやっぱりやり方でやっています。それは、それでいいと思います。ただ、ぬけたところがないかというような観点から見る、そういうことは必要だと思って……

まあ、そんなわけで私は、体の状況がね、あの具合が悪いもんですから、なんかやりたいと思うんだけれども、食事のあとはね、20分、実は寝ちゃうんですよ。

南迫 今日は、寝なかったですね。（笑）

吉田 今日はね、今日は、よく食べたり、いや普通はね、あの半分きり食べないんですよ。朝、けさ早く食べたから、おなか減らしていたから、あるいは、あれだけ入ったのかも知れない。

ゴルフに行きますと、もう、サンドイッチ一点張り。それでお昼をサンドイッチって、それを半分食べて、残りはポケット入れて持って歩く。歩いている間に食べちゃうと。（笑） そういうしきで1日5食、そういうやり方でないと……

南迫 少量づつ。

吉田 ええ、そうでないと体が食べものをまかないきれないんです。

南迫 なる程ね。胃のどの部分を取られたんですか？

吉田 どういうのかね。なんで、ぼくが手術しなきゃならんようになったか分からないんだよ。だからね、5年前に、私ね、パリに1カ月行ってきたのですよ。そうして帰ってきてから、「少し変んだなあ」と思って、そのうちに胃が痛くなっちゃって、胃が痛いのがあのすぐ治るなんらしいんだけど、（笑）なかなか治らないんだよ。そいだから、とうとう、お医者さんがあとで、内科と外科となんか、けんかしたらしいんだよ。とうとう手術する、（笑）で病院から電話かけて、「手術するから」と言って、そういうわけで1週間ぐらいで、それが決まっちゃったんですよ。（笑）それで手術して、手術したおかげで痛みがケロッと治っちゃった。

それで、別にぼくは、目方も減りそうもないと思ってたんだが、半年ばかりの間に、体中あっちこ

「ちちもう故障だらけになっちゃって、まず、第一に歯が抜けちゃって、（笑）今まで、歯がずっとあったのに、出ちゃうんですよ。そういう具合で、もう学会へも出かけなくなっちゃった。それから、旅行するにしてもね、食べものの問題で、もう去年おととしか、去年おととし、ちょっと行ってみようかと思って、たった10日間ですけれども、バンコクまで行って、バンコクの建築知らないうからなんて、行ってきて帰ってきたら、やっぱり食べものでだめだあ。

南迫　ええ

吉田　ええ、もっともタイあたりの食べものは、あんまり、おいしくないから。食べものでさえあれば、ちゃんとできれば、ヨーロッパ旅行もしたいんだ。アメリカへ行ったのが30年も昔だから、今、子どもが行っておりますので、それに、ちょっと行ってみたいなと思うけれども、だめですね。今まで家内がお伴して何かしてくれたけど、この頃、家内の方がへばってきちゃったからな。でも、まだドイツとスカンジナビアへ行かなくちゃあいかんと思っているなんだけれども、ちょっと失敗しちゃったんだ。私の長男が、研究所において、それでスウェーデンに1年間ウクサラの大学へ行っていたんです。

南迫　そうですか。

吉田　だからね、その時に行けばよかったなんだけれども……。

とうとう行かなくて、スカンジナビア知らないんだよ。

初田　そうですか。

吉田　スウェーデンとフィンランド、どうしてもいいからと思って。まあ、これは、ぼくの望みだな。

初田　先生、お生まれは、何年なんですか？

吉田　え、私？　1904年

初田　1904年、そうすると……

吉田　明治37年3月23日。ですから、ちょうど81歳ですね。

初田　そんなお年には、見えないです。

吉田　だからね、としを言われれば、あのこれだけ故障が、きてもしょうがないんだということらしいんですよ。しかし、ぼくは、そういう気分的にも全然そういう感じを持っていないんだよ。小学校の時とお同じような、あるいは、高等学校の時とお同じような感じですからね。

南迫　小学校は、開智小学校ですね。

吉田　ええ、私の郷里、松本です。戸田子爵が松本の藩主ですね。で、私の家の者が、松本藩に勤めていたわけですね。だから、私のおやじは、小さい時には、お小姓ということらしいね。あの短かい刀さしてゆくやつ。安政何年だろう。安政生まれですよ、ぼくのおやじは。

南迫　はあ。

初田　そうすると、先生はお父さんが40歳、もうちょっとの時にお生まれになられて……

吉田　でしょうね。私が8番目ですからね。

だから、一応、私の家は、言わゆる武家ですよ。

初田　ああそうですか。

吉田　ですから、私の家はおやじは弓、槍、みんななんか師範やってましたね。もう年とてから。だから、槍なんてのは、あまり、他じゃあ見られないですよね。ふうでん流という……（笑）

初田　風の伝わる……

吉田　ふうは風ですね。でんは伝えるでしょうね。それから、弓はちくりん流。で、槍はちょっとできないけど、弓は私もね。おやじのを見てますから、相當にひけますよ。

南迫　ちくりんですか。林ですか。

吉田　ええ竹の林です、え、型が違うですよ。こんな具合にして、あげてやらないと、これをぐーっと引いてくるんです。

南迫　下からあげて……

吉田　だから、まあ、そういうところで、私、育っていますから、いわゆる何んだまあ、武士なんというもう時代じゃないんですけど、その伝統があるわけですね。伝統でもあり、しきたりでもあり、まあ、そういう中で私、育っている。

南迫　そうすると幼い頃から、弓をおやりになっていたんですか？

吉田　おやじは、一生懸命になって、みんなに弓を教えてた。スポーツとしてですよ。みんなに教えてました。ほとんど毎日でしょう。ほとんど毎日、矢場って言うんですね。あの射るところ。そこへ弓、持って出かけていました。お弟子さんもいました。今みたいに授業料とってやるっていうんじゃないんだよ。お互いのスポーツとして、お互いにやってるん。まあ、ひき方は、どっかおかしいところとか注意するんでしょ。それからね、弓のつるがあるでしょ。おやじは、自分でやって、お手製ですよ、そうして、いつも持って歩いてい

るんですよ。あの、こういう輪にまいて。そうして教えている時に、つるが切れるでしょ。すぐ、それやるわけですよ。これは、つるの作り方、よくぼくは、知っていますよ。麻をね、細かく櫛でくし削って、とおった1本ずっととおった長い、ちょうど鴨居からつりさげってあったな。それをね、松やにをなにか瀬戸もので煮てね、それを皮に包んで、こすりながら、よってゆくんです。そういうのから、見てますから、つるの作り方、知っているんだ。（笑）

南迫 麻糸ですか？ 最初、絹糸かなんかと思ってたら。

吉田 麻。きれいな麻ですよ。

南迫 そうですか。

吉田 ええ、それは、悪いとこみんなこうやって梳いている間に……

南迫 とれちゃうわけですか？

吉田 切れるようなやつは、だめですね。

南迫 残ったところだけで、よって……

吉田 今、だからナイロンとかなんかあるから、わけないでしょ。

家の母がね、よく「せっかく作ったのにみんなあげてきちまう」（笑） だけど、やっぱりそういう、ことからみんなと一緒にになって楽しめたんでしょうね。

ぼくのおやじは、小学校の先生ですから、あの開智学校ずっと……

初田 開智学校で教えてられてたわけですか？

吉田 ええ、開智学校です。それで、訓導という、小学校の先生、訓導と言ふんですね。ですから、訓導で過ごしたと、いうことです。ただ、信州の小学校教育っていうのは、非常に盛んでして、盛んというか、まことに熱心で、信濃教育界っていうのは、日本でも有名なんですね。それは、なぜかと言うと、やっぱりみんなの発言力が旺盛なんです。教育に対する発言がですね。そして、お互いに講習なんかやって、お互いに切磋琢磨するという、そういう習慣があるわけです。それから、もう一つはね。これは、文部大臣だったあの沢柳正太郎、松本出身の人ですが、こう人の後援が非常に大きかったじゃないかと思いますね。その他に教育者は、たくさん出ているわけで、大臣は出ませんけど、（笑） 大臣が総理大臣は出ませんけれど、教育界では……。

初田 長野県は、よく教育県だというようなお話

は、お伺いしますよね。

吉田 まあ、そういうところからきたのかもしれませんね。とにかく、開智学校なんて、ああいう珍しい建築ができたくらいだから、やっぱり相当にみんな熱を入れていたんでしうね。で、さっきも、ちょっと話したけれど、私が入ったのは、開智学校が男子部であって、その女子部の中に入った。

初田 女子部の方に

吉田 ええ、ぼくが、学校が足りなくって。女子部の方の体操場をたくさんに仕切って教室にして、ぼくは、そこに1年入学したわけですね。ところが、残念なことに終戦後に、女子部の建築が取りこわされてしまった。終戦後に松本の日銀、日本銀行ですね、の支店が、大きくなるんで、それで女子部のところをこわしてそこへ日銀を建てたわけですね。ちょうど、松本城のすぐ横に。いいところですよ、あの学校、残念でしょうね。あれ残しておけば、開智学校と女子部の建物と2つあそこに並べていたら、まあ、みごとだった。

初田 並んで建っていたわけですか？

吉田 いや、離れていました。ええ、開智学校ってのは、ちょっと川の近くですが、女子部はすぐお城の横にあったんです、ええ。

岩田 今日あれば、見学のお客さんも多かったでしょうね。

吉田 いえ、もう、終戦後でもう何んとなく、こう建築状態は、ゴチャゴチャ、ゴタゴタでしたね。だから、日銀が建てるとき、どっか敷地ないか、それから片一方は、小学校の方は誰れもメンテナンスの面倒見る市役所はあんまり面倒を見ないというようなことから、あの時、日銀に譲っちゃったんでしょうね。ええ、松本でも一等地ですよ。松本城の大手門のすぐ前ですから。

南迫 それじゃあ、いいところですね。

初田 先生は、いつ頃まで松本に、おられたわけですか？

吉田 私ね、関東震災の時まで、松本にいました。

初田 そうすると……

吉田 高等学校ですね。

小学校は、今の開智学校の分校になるわけですね。

初田 小学校の名前は？ 開智学校の分校でよろしいわけですか？

吉田 呼び方は、みんな困っちゃってね。松本尋常高等学校というのが正式の名前なんですよ。

それで開智学校というのは、できた当時の呼び方でしたですね。

初田 松本尋常高等小学校の分校ですか？

吉田 ええ。それで、いくつも分校があるわけです。それで、あの男子部というのが開智学校。女子部っていうのはね、あれは、なんて名前って名前がなかったんです。ええ、ただ女子部と言ったんです。

初田 そうですか。

吉田 それは、あのやなぎ町という所にあった。しいて言えばやなぎ町になるでしょう。その他にね、げんじとかたまちとか、ええまあ、あのその地域の名前をつけて、なになに部小学校。たまちならたまち部小学校。ええ、そういう名前でもって。それで一つ一つが独立の小学校ではないわけで、松本尋常高等小学校一校に、だから校長さん一本。そのかわりに各部は、部長、普通の校長にあたるところは部長という名前。ですから、卒業証書でも何んでもみんな、校長の名前1人です。

初田 その後は、どちらの学校へ行ったのですか。  
吉田 松本中学校です。

5年制の昔の中学校ですから、旧制の松本中学です。それで松本中学1本、一つしかないわけなんですよ。だから信州の中の我と思わん者は、みなそこへ来たわけですよ。ええ。

岩田 1つしかなかったんですか？ 長野県に。

吉田 いえ、長野には、ありましたよ。それは、他にもあるんですよ。でも、松本中学というと、ええ、一番有名だったということでしょう。例えば伊那の生徒がくるとか、寄宿舎が完備してましてね、長野県全体から例えば、野沢の人が来るとか、上田の人が来るとか、みんな一緒ですね。

初田 吉田先生は、自宅から通われたのですか。

吉田 私はお城の下に私の家があったわけですね。いわゆる昔の武家屋敷の中ですから、今、大手、いわゆる都市の名前では、今大手という名前になっていますが、そこで生まれていますから。

南迫 大手門の中にあったわけですか？

吉田 大手門のすぐ外だ。（笑） そこから、学校まで、そだなあ、5分もかかるない。（笑） ぼくの生れた家は、焼けちゃったんだけれど、私、中学時代に、あの焼け出された所から、またそのとこへ帰りましたね、中学、高等学校はやっぱりお城の近くに住んでましたから、まことに学校へ通うのは楽なんですよ。松本中学というのは、今は、深志高校になっていますね。そして、

とにかくお城の下にあったもんですからね、松本城天守閣ってのはとても、なんとなく懐しいんですよ。それで松本城のあすこの模型を作ろううちらうわけで、私の兄貴が文献を探して、作ったこともあるんです。今、天守閣の中に置いてあるんじゃないかったかな。

南迫 高等学校は？

吉田 松本高等学校、いわゆる名古屋の次いで、第九高等学校っていうやつですね。九って名前つけなかつたけれど。それを出たのが、大正10年。

初田 大正10年卒業……

吉田 10年じゃない、13年だな、10年に入って13年かな、それで関東震災の翌年ですもんね。それで、大学では建築学科へ入ったと、言うんじゃないですよ。（笑） まだ、その高等学校にいる時には、まだ、震災前から、図書館へ行って、よく本を読んでいました。そん中で私、音楽が好きだったから音楽書をよく見ていましたが、そん中にコーレル音楽という本があるんですね。

これが私の建築というものを見る最初なんですよ。

南迫 誰が書いた本ですか。

吉田 えーと古い本ですからね。そんなに厚くないのよ。どっか国会図書館にでも行って、探せば出るかもしれませんね。

南迫 日本人が書いたんですか。

吉田 いえ、翻訳だったかも知れませんね。

南迫 そうですか。

吉田 とにかく日本語で読んだよ、だから、これは…… 私と建築なんかを結びつけるちょっとした動機だったと思います。

初田 そうですか。

南迫 音楽というのは、どういうものを……

吉田 音楽は、私もう子どもの頃からオルガン弾いていたもんですから。

南迫 そうですか。

吉田 それから、家中はみんな歌いどおしみたいに、なんか歌っているんですね。そうかって音楽家が出たわけじゃないんですよ。（笑）

南迫 キリスト教との関係は、どうなんですか？

吉田 それはねえ、ちょっとあとのことだなあ。それは宗教音楽は、今、ある演奏会があれば、必ず聞きに行くんです。私、大学に入ってからだな。

南迫 音楽とは、関係ないですか？讃美歌との関係なんていふるのは？

吉田 それは、私の場合の音楽というのはね、一番のあれは、私の高等学校です。別の先生がドイツ人でね、バウエルって有名な当時、日本に来ている人が演奏会なんか開いた。まだあの当時若かったんですがね、バウエルっていう、ええ、教室でもって、もう、すぐシューベルトの歌を歌い出したりしてね。ちょうどNHKのドイツ語講座であれなんだかな？あれなんていう人だったかな？あの講師。歌のうまい人。

ええ、ゲーテの詩を歌ったですよ。それでバウエルのことを思い出してね、ああ、やっぱ昔の高等学校の先生ああだったんだよって思い出したんだよ。ああいう教育を受けたから、あの教室で歌い出すんだから、そういう具合で、ドイツ人から受けたドイツ語を通しての音楽、非常に盛んになつたんですよ。他の人はどうだったか知らんけど、ぼくなんか特にそうですね。それから、まあ一応小学校の頃から、私は歌っていたんだ。

南迫 そうですか。

吉田 えー、バウエル先生のおかげで私は、ドイツ語の歌をみんな覚えちゃうし、(笑)っていうことがあったですねえ。その先生は、東京に出てきまして、もう亡くなつて10年くらい、たつなあ。

そこに1人だけ奥さんがいなかつたですね。小さなお嬢さんがいて、とても可愛らしかつたんですがね。ドイツ人の住宅っていうのは、別にちゃんとできてきてまして、学校の中へ敷地にね。そこへみんな遊びに行くんだよ。そういう環境っていうのは、今の学校にはないんですね。

初田 そうすると大学に入られたのは、いつ…？  
吉田 大正13年の4月ですね。大正13年4月、東京に出てきまして、東大に行ってみたところが、建物はまあ、すっかりこわれている、本当にバラックが建っていたなあ。それで私たちは、バラックに入ったわけです。まことに、お粗末なんだよ。平家建の。それで入るといつても、今の学生は、自分の席を持っていないんだけども、昔みんなは自分の席があったわけですね。教室、それは製図室。で大判の製図版ののる机が自分の席なんだ。ですから、そこには大判の製図版が5～6枚1人おいてあるんですよ。それに引き出しがあるから、全部そこに荷物を入れちゃって。暇ありゃあ、鉛筆でこう何か、書いているの、ええ。そういう点もちょっとめぐまれていましたねえ。

南迫 何人ぐらい、いたんですか？

吉田 建築学科ねえ。ぼくの時は24人です。

南迫 入った時からわかつてんですか？ 建築学科っていうのは。

吉田 24人というのは、ぼくらのクラスになってふえたんです。それは、関東大震災で。以前は15人です。建築学科15人。それから、機械や電気が多くて、その倍の30人だったんですねえ。でね、その大学の先生たるや、たいした人達がそろっていたんだよ。まず、伊東忠太先生ですね。それから、あのもう、教授でなくて、停年制でかな。中村達太郎先生はもう退官していた。

初田 中村先生もおられたんですか？

退職したかたちになつていたかな。今でいう名誉教授ですね。

吉田 ええ、ぼくは、講義、聞いたんですよ。

南迫 そうですか。

吉田 伊東忠太、関野貞、塙本靖の先生方です。

初田 塙本先生はせいと言われるのが正式なんですか、それともやすしですか？

吉田 いや、どっちかなあ。ぼくらはせいって言っていたから。それから、あとは、佐野利器りは利益の利、きは器、それから、内田祥造、それが、教授です。たつたそれだけですよ。

初田 5名ですか。

吉田 そのあと助教授ね、えーぼくらの入つた時は、塙本先生が、主任教授だったかな。関野さんから、両方だな。関野さん、塙本さん、それから卒業する時は、佐野先生だったな。主任教授ね。それから、助教授陣としてはね、岸田日出刀先生、それからね、それと同期だった長谷川輝雄先生ってね、新建築の講義をきいたな、長谷川さんに、惜しい人だったんですけど、結核で亡くなっちゃつたんです。それから材料では、田中(後の江国)正義先生、この先生は横浜大学に行かれたんですが、助教授はその3人ですね。あとから、堀越先生が入られました。

南迫 そうですか。

吉田 しかし、講義はしなかつたんだよね。製図の講義をやった(笑) それからあと講師としては、有名な大江さん。

初田 新太郎先生、大江新太郎さん。

吉田 ええ、新太郎さん。とっても紳士的な先生だったなあ。

それともう1人ね、あの山下、あの山下寿郎先生ってね、寿郎ね、これ山下設計事務所の社長。

南迫 講師ですか？

吉田 ええ、講師。それから、ちょっと番外になりますけれど、やっぱり講師としていいでしょう。

絵画、絵だ。水彩画。石井柏亭先生。

南迫 ははあ。

吉田 石井柏亭、彫塑が、たくへい、たく下だったかな、しんかいさん、しんかいさんか。たく…しんかい五郎先生か。

南迫 しんは、どんな字ですか？

吉田 新しい、新。

南迫 かいは、海ですか？

吉田 海だったかなあ、しんかい、いや忘れましてね、アトリエがあって、ぼくは、そのアトリエに行って、モデル使って、彫塑やったんですよ。

(笑)

初田 伊東先生は、当時、何を教えられたんですか？

吉田 伊東先生は、歴史ですから、東洋史を二つにわけてね、伊東先生はインド。

初田 インド史ですか。

吉田 それから関野先生が、支那ですね。支那・朝鮮。それから西洋史が、伊東さん。日本建築も伊東さんか。だから、伊東さんが、何んでもかんでもやっちまうというかたちで……

初田 日本建築も伊東先生ですか？

吉田 ええ。

インドと日本と西洋と。それで、関野先生が単に支那と朝鮮でしょ。少しひがんだらしい。(笑)それで、伊東先生が頑張っちゃって、関野先生がどうしても教授になれなかった。だからずいぶん長く、助教授でいられたですね。

初田 塚本先生は？

吉田 塚本先生は、計画。

初田 計画ですか。佐野先生は？

吉田 佐野先生はおもしろいんだよ。黒板にどんどん絵を書くんですよ。室内のパースを例えば劇場ならば、人間を書くんですよ。室内に人間がいる状況まで。黒板にスケッチを書きながら、絵がまとまって、それからお話を聞くんです。(笑)とにかくその3人はいわゆる明治の大御所です。

南迫 そうですね。

吉田 辰野さんと同時代の人ですね。辰野先生はもう早くやめられていたから、ぼくは全然習って

いないんです。

初田 学校にも、ほとんどおみえにならなかったのですか？

吉田 それはね、自分で設計事務所、ひらいちゃったんです。

ただ、辰野先生の作った工学部の有名なゴシック風の建物など、設計されたものは学校にいっぱいありましたね。煉瓦造でね、しかしあうこわれちゃって、危なくて入れない状態だったんですよ。今にも上からレンガが落ちてくるっていうような。それで、こっそり入って行くと叱られたんだよ。それは、そうだろう。

初田 佐野先生は、当時そういう活発に活躍されていたと思うんですが。

吉田 そう佐野先生は、私卒業する時、非常にお世話になったわけです。卒業して大蔵省へ入ったのも佐野先生のご厄介になったわけですよ。佐野先生は、卒業が明治36年で。

初田 大蔵省におられた大熊喜邦さんと同期でした。

南迫 佐野さんは、何を教えていられたんですか？

吉田 佐野さんは、鉄筋コンクリート、耐震構造論で有名な先生です。日本で鉄筋コンクリートの講義を初めてやったのは、佐野先生です。

初田 内田先生もその時もう教授になられてましたか？

吉田 内田先生も確かもう、教授だったと思いますよ。

南迫 当時の鉄筋コンクリートの構造なんてのは、どういう講義だったんですか？

吉田 鉄筋コンクリートの講義は、今とほとんどかわりないです。それでは、内田先生は建築の一般構造、構造計算から、いわゆる、なんちゅうんですか？ 木造から煉瓦造、鉄筋、鉄骨にいたるまでの一般構造ですね。その講義です。今で言うとなんだ？

南迫 建築構法です。

吉田 構法か、だから、内田先生が全般的なことやって、佐野先生は、その中の鉄筋、鉄骨を細かくやったと、それから耐震構造ですね。そう言つていいでしょう。それで、教授陣はだいたい終ったですね。

初田 佐野先生は、どういう感じの先生でしたか？

吉田 佐野先生っていうのは、今から考えると若いんだなあ。

初田 若くして教授になられましたよね？ 確か。吉田 明治36年というと、1900……ぼくの生まれる前の年に先生は卒業している（笑） そんな気があるもんだから……。まだ30代ですね。ですから、まだ若いんだよ。だから、まだ主任教授との間は、ずいぶんあったわけです。でも、ぼくの卒業する時は、もう、今度は、初めて主任教授になったんだよ。佐野先生の第一のお弟子さんが、あの構造の武藤先生ですね。

初田 相当、厳しい方なんですか？

吉田 そうね、2人私のクラスに左翼的な人がおりまして、先生の家へおしかけて、大部議論やったんだ。それでもう「面倒みないよ」と言われたとか言って。（笑） 若いから若氣のいたりとうこともあるね、お互いに。やわらかくないわけだ。佐野先生は、実は、私の結婚のお仲人なんだ。（笑） で、佐野先生のちになってね、家へ遊びに行った時、この軽井沢で思い出したんだけれど、あの先生、「自転車乗りを覚えた」って言うんだよ。「軽井沢へ行って、自転車乗りやったら、愉快だねえ」って話したことあるんだよ。

初田 そうですか。軽井沢で覚えられたんですか？

吉田 内田先生は、顔のとおり厳格な人でね。黒板にきれいな字をていねいに、書いてゆくんですよ。几帳面な方ですね。だから、まちがったことは、絶対だめだ。先生の書いた階段を何か営繕課の人が直したんだ。叱られてクビになっちゃった。（笑） 階段を1段まちがえたんだ。まちがえたか無理にやったなんか、知らんけどもね。そのくらい厳格。そのかわりにきれいな図面でしたね。

初田 そうですか。

吉田 ぼくは、あとトレースしたから、ずっときれいになっていると思いますがね。東大の現在ある茶色のタイル貼った建物。

初田 内田先生がほとんど、担当されたんですね……

吉田 全部、ご自分の設計です。

南迫 安田講堂から……

吉田 人にもう手をつけさせない。その中にかわったものがあれば、岸田さんが、やったやつ。これは、すぐわかります。

初田 そうですか。

吉田 丹念に、やられたんで、先生たるもの、どうしてあんなに実際的な図面が書けるかと思って感心したのね。それから、人の図面見るのもそうですよ。しっかりしますよ。実際、東京駅の前の昔の海上火災保険。あれも設計されたんだよ。初田 工学院の旧館も内田先生がかかわっておられたということを聞いたことがあります。

吉田 それ、ぼくわからないんだ。

初田 そうですか。

吉田 ただ内田先生のいろいろの教えを受けた人達がたくさんおると思います。具体的に誰れっていうとわからないんだけど。

あんな厳格な顔をしててもね、お宅へ訪ねて行くととても親切ですね。やっぱり見ただけじゃあわからんですねえ。お宅へ行ってみるとね、「誰かがこれを送ってくれた」とかってね、大事にしてますね。完備した図書館を持っておられてね、自宅に。もう、資料がちゃんと整理してでてくるんですよ。どっかの新築建物の竣工式に招待された時に出すようなパンフレットね、ちゃんと先生の所へ行くとあって出てくる。（笑） 東大の図書館も設計されたしね。あといろんなものやってますよ。東大の中だけでなくてね。

初田 そうですね。

吉田 やっぱり、いわゆる設計者ですね。

初田 よく、スクラッチタイルを使われますね。あれは、何か理由があるんですか？

吉田 ええ、あれはね。あの当時、関東地震後でしょ。煉瓦を使えないんです。だから、外装としては、もうタイルっきりないわけですよ。塗り物なんてのは、とてもだめ。タイル屋がいろいろなものを、もっとかっこいいものはないかとかいうことから、いろんな試作をしたんですね。その中に、スクラッチがあったわけだな。名古屋の日本陶業か。あれが、あそこのタイルを納めたんですがね。いわゆるスクラッチですね。スクラッチ、ちょうどあれを使いだしたのが、昭和の初め。大正の終りから昭和の初めにかけて非常にはやった。ですから、我々、設計するとみんなスクラッチみたいな、ああいうものになっちゃったんですね。

初田 タイルのスクラッチは、クギか何かを木にうちつけたもので、ひっかくわけですか？

吉田 あれはね、そうだと思います。なんの刃かな。クギみたいなもの。

初田 あと、塙本先生なんかが、一番ご高齢だっ

たと思うんですけども、当時。どんな感じの先生ですか？ 塚本先生は。

吉田 塚本先生は、本当に人間的な人だね。みんなに比べたらね。まことに円満、それで、「文部省の規定によりますと、卒業日は、3月31日になっておりますから、3月31日に卒業式を致しました」と、ぼくの卒業式の時そういう挨拶だったよ。3月31日に卒業式をやった学校なんか、どこにもなかった。(笑)

岩田 遠くに就職する人は、困ったんじゃないですか？

吉田 そんなに困まらなかったな。

岩田 急がなかったんですか？ 昔は。

吉田 そんな、ぼくらは、いつから就職先へ行つたらいいか通知も何もありやあせんもんね。どうするんだろうと思ってね。時々、ぼくは大蔵省へ「いつからですか？」と聞きに行つたら、「いや、まだわからんよ」とか言つてました。(笑) 発令時期がわからない。それ程、世の中急がしくなったわけですよ。3月15日に、4月15日に入れれば15日からの俸給になるかというと、そうじゃない。ひと月分は、くれる。ケチケチなんか、してませんでした。

初田 伊東先生は、どんなお方でしたか？

吉田 伊東忠太先生は、私個人的には、覚えがないな。伊藤先生のお宅へ…… 行ったとすれば、マンガがあるでしょ。マンガの批評を行つてくれいかな。(笑)

初田 絵が相当じょうすだったようですね。

吉田 ええ、お得意なんだ。鬼を書くんだよ。でもね、伊東先生の話は、なかなかおもしろいんですよ。外国旅行ずい分やってますからね。アフリカへ行った時かな？ エジプトへ行ったんでしょうね。で、夜中に写真を現像しているんですよ。昔の現像。現像といったって、今と違つてこんな乾板ですよ。(笑) そうしたらね、せっかく撮つたんだけど、みんなニカワがとれて、流れちゃて、(笑) 「これには、困ったなあ」とか言つてた。それで、大きな写真機を持って旅行する。大変だったらしいですよ。それで、昔のかたちがわかるわけですよ。

初田 そうですよ。

吉田 中国の石窟なんかの古い写真を学会で出版したのがあったですね…… 今とずい分違うんですね。今は仏像がちゃんとある。あるんですよ。

(笑)

初田 今も、建築学会に、伊東先生が残されたものがあったように思いましたけれどね。

吉田 ぼくは、いずれ家に持つてもしょうがないから、工学院に寄付しようかと思っているんだけれども、あの学会で出した中国のやつ、図書館にあるかどうか？

初田 確かうちの図書館には、ないですね。

吉田 ないか。ちゃんと完全に揃つてますから。

初田 そうですか。それは大したものですね。

吉田 そういう具合でね、昔の写真、関野先生のもそうです、伊東先生のも、昔のかたちが残つてゐる。他にももちろんあるかと思うけども、いい資料として充分使えると思います。

初田 関野先生なんかは、どんな感じの方でしたか……。

吉田 関野先生は、まあ直立不動でぼくらと話をしたですね。そして雄弁のとつ弁と言つんですかね。顔のかたちは、関野克さん、息子さんとすっかりお同じです。関野先生は非常にお気の毒だった。お気の毒だったっていう意味は、伊東先生が少し頑張りすぎてたと(笑) いうことですけれど。確か、ぼくが入つた時は助教授で、その後ですよ、教授になつたのは。それからいろいろな事をよく知つてますねえ。そうしてね、講義の時に、天龍山の石窟ですか？ 発見したのは。

そこの時にはね、先生にはめずらしく声を張りあげて、非常にその喜びを出して講義されたのを覚えていますよ。

初田 そうですか。

吉田 はあ、もう感激を持って話されたね。関野先生は本当にいい先生ですよ。親切ですよ。ちょっととつときは悪いんですけど。関野先生は、人格者だな。一番の人格者でしょう。伊東先生は少し山氣があつたなあ。

初田 (笑) はあ。

吉田 塚本先生は如才がない。どこの社会に出しても通用する。話題のある人。なんでも知つてる。そういう先生でしたね。

初田 岸田先生なんかは、当時どうでしたか……

吉田 岸田先生はね、実はね私何も講義聞いていないんですよ。

それで岸田先生は、ぼくら、あんまり知らないんです。ぼくらのクラス会にも岸田先生を呼びませんでした。むしろ、長谷川先生、これは、新建築

を教えてくれた。ぼくらと一番密接な関係にありました。製図のいわゆるその建築芸術というような面から、一番親しかった。年は若いですからね。先生は、まだ20代だったんじゃないかな、建築の新建築の話は古い先生からは、一言も出てこないわけです。みんな長谷川さんを通して、私たち習ったわけです。ですから、明治30年代のヨーロッパにおこった新建築の話をよく聞きました。それを思い出して、私ウィーンに行った時にね、あそこの養老院だったかな？ なんだか感化院かな。

初田 シュタンホフの教会ですか？

吉田 見に行ったんだよ、昔のかたちのものがちゃんと残っていてね。あー 思い出した。懐しかったなあ。

初田 芸術家村という。

吉田 ええ、あそこのアールヌーボーのああいう建物を見て、やっぱり長谷川さんを思い出して懐しかったですねえ。

初田 当時日本では、そういう新しい新建築に対する動きというのはあったのですか？

吉田 それは、もうたくさんありましたよ。佐野先輩たち。東大では、有名な大正9年組というのがあるわけですね。

ちょうど私が入った頃は、そういう連中が大学を出て行ったあとですね。やはり新建築に対する情熱は、非常に盛んなものでしたよ。東大には、木葉会っていうのがあるんですよ。木葉会の例会っていうか、毎月じゃあなかったんですけどね、先輩が集まるんですよ、大学の食堂へね。我々もそこへ学生出席してね。先輩がいろいろなこと言うんだよ。我々は拝聴していたんだ。山田守とかの意見を。それで、卒業設計見てびっくりしちゃったんだ。これが建築かと、（笑） それでは、我

我は、じゃあ卒業設計にどんなのがあるかと思って、みんな引っぱり出して展覧会やったんだ。

初田 その結果、ぼくが前に先生から写させて頂いたあの作品集が出来たんですか？

吉田 そうそう。あれ記念に残っていますよね。あん中に下元先生のも出てきた。

南迫 はあ。

吉田 それから、内田先生がどんな設計したとかねえ、佐野先生や内田先生はどんな設計してたんだろうと思って……（笑） 残念ながら、我々の年代から出でていないんだ。（笑）

初田 自分たちが作られたからですか？

吉田 だから、大正年代まで… そうそうあん時わりあいに盛んにそういう先輩との話し合いをしたんですね。熱心な先輩がいたんだよ。

南迫 どういう場所で話をしたんですか？

吉田 ええとね、大学の食堂だったと思いますねえ、あの三四郎池の端に山上御殿と我々言っていたんだけど、そこへ集まつたんじゃないかな。

南迫 そうですか。

吉田 だから、やっぱり大学の中にはそういうクラブ的な所があるといいですね。今だとどういう所に集まるのかな？

初田 学校のゼミ室を使ったり……

吉田 ゼミ室ね。

南迫 東大にはなにか会館みたいのがありますね。学士会館……

吉田 そこは、食事も出ますしね。

南迫 あそこ、いい所ですねえ。

吉田 うん。

初田 そういうところに、堀口捨己さんとか、山田守さんがきて、学生に話をしたんですか？

吉田 いろいろ話をしました。

初田 で、先生は卒業されてすぐ大蔵省に入られた訳ですね。

吉田 ええ、入りました。大蔵省には、明治時代の方がおるわけですよ。矢橋賢吉さん、それから大熊喜邦、大熊さん課長だったな。矢橋さんが部長でね、それでぼくが入ったのが昭和2年。昭和2年というのは、ちょうど昭和になった時で、昭和3年に天皇陛下の即位式をおこなうというわけで、それに対する準備を全部、大蔵省でやったわけですね。ですから、総理官邸がまず、第一ですよ。もう、忙しかったね。昭和2年に設計して、昭和3年秋にそれを使うんですから、ぼくが入っ



た時は、もう、そうねえ、ある程度ディテール書いていましたねえ。

初田 総理官邸は、下元先生が担当されたという話もちょっとお伺いしたんですけど……

吉田 ええ、そうです。ちょうど私が入ったその第二建築係っていうんですが、第二建築係でやっていたわけです。第一建築係というのは、議院建築を行っていました。

初田 第二建築係の方で、あの官邸をやっていたわけですか？

吉田 ええ、議事堂関係以外は、ほとんどがこの第二建築係の担当です。ですから外務省もありますし、大蔵省、内務省、関係ですね。内閣とかそういう関係全部です。内閣関係の建物がみんな地震でなくなっちゃったわけですね。それで作らなきゃあいかんというんでつくりました。だから、内閣の官舎というのは、いくつも、たくさんあるわけですよ。総理官邸のすぐ脇に内閣書記官長官舎というのがあるんですね。それが第二の大きさを持っているんですが。それから、いろいろな書記官クラスから、官舎をずっと作ったんです。その時官舎設計の為にね、ぼくらと一緒に働いていた、ちょうど蔵前出のね、ちょうど上海から帰ってきた奥村っていう人が嘱託でいました。彼はなかなか達者でね、あの書記官長官舎とか、その他の官舎の設計をやりましたねえ。

初田 先生は、第二建築係で何を担当されたのですか。

吉田 ぼくは。警視庁、今新しくなっちゃいましたけど、昔の三角形の建物を担当しました。でも基本設計はもうできてましたよ。

初田 そうですか。

吉田 ええ、模型もできて、りっぱな模型ができてましたね。

初田 そうすると首相官邸なんかは、ほとんど下元先生が御自分でほとんど行ったのですか。

吉田 ええ、自分でエスキース書いて、始めたんですよ。

初田 非常に変わったかたちをしていますよね。当時の建築の中では。

吉田 これはね、その段階において、だんだん変わっていったと思いますけれど、基本的には変わってないと思いますよ。

初田 そうですか。

吉田 色はかわっていますけれどね。全体的な構

想は、かわっていないと思いますが。あれだけ、まとめるのには相当に時間をかけていると思います。だから、昭和2年に全部設計したわけじゃなくて、大正の終りから。

初田 構想をねって……

吉田 ええ、もうやっていたですね。それを本当に面倒みたのが、やっぱり大熊さんと矢橋さん。矢橋さんがちょうど昭和2年に亡くなっちゃったんですよね。だから、大熊さんになるんだけど、大熊さんもそれ程のことは、やってないと思うんですよ。結局、下元先生がやったと言っていいと思います。

南迫 先ほどの奥村さんていう人は、何を行ったのですか。

吉田 奥村さんはね、総理官邸、その隣りの内閣書記官長官舎とかを行っていました。

南迫 官長官舎ですか？

吉田 ええ、内閣官舎、なん棟かありますが、それまとめてやりました。でも戦災でみんな、それ焼けちゃったの。総理官邸だけ残ったわけですよ。

南迫 下元先生に以前お聞きした時は、「あれは、私じゃない」と言った…(笑)

吉田 下元先生の関係は、ぼくは、いろいろお世話をなったから、もう下元先生からいろいろなことを聞いているけど、下元先生というのはまあ、建築学会でも有名な人でしてね。下元先生のまたお友達というのが、またおもしろいんだよね。一番おもしろかったのは、あの芸大の森井先生。あれは愉快な人ですよ。2人とも建築学会の副会長やっていると思いますけれど。それでもう、たて続けに話をする。で私のところもよくはがきでお便りを下さったんですね、こんな先生ないですよ。それでね、ぼくがまだ大学出たみたいな時に、工学院の夜学にね。建築一般講座を、ちょうど内田先生と同じような講義をしたわけですね。

初田 いつ頃からですか？

吉田 昭和3年ですね。確か。それで夜学でしたけど、熱心なんですよ。それから、よく知っていることは、先生以上です。(笑) それに講義するんだから、ああ、困っちゃったんだけど、構造関係だったら、ぼくは得意だから始めたのです。

初田 他にはどんな先生が工学院におられたんですか……?

吉田 うーん それね、もう名簿、というものを持ってないもんだからね、森井先生と下元先

生と大沢さんと、それから宮内庁の白石っていってたなあ。東大におられた平山、平山崇先生ね、あれがやはり講師でこられて、一般講座やって、そのあと、ぼくが引き継いだんだ。平山さんは東大に行ってしまったんだよ。

初田 その吉田先生が工学院の夜学にこられたきっかけというのは、下元先生か、何かのご紹介だったん……

吉田 いえいえ、直接には平山さんです。

初田 平山先生ですか。

吉田 平山さんが、なぜぼくを紹介したか、それは、ちょっとわからんけれども平山さんよりも少し一年あとだからということではな。下元先生とも話をしたかもしらんけど、ちょっとわからんなあ。それから、平山先生のすぐ脇に、斎藤亀之助、これ大正9年組です。それがおられたです。これは、議事堂の建築の非常な貢献者です。

初田 そうですか。

吉田 鉄骨構造は、斎藤さんの計算です。

南迫 はあ。

吉田 当時の鉄骨構造のオーソリティーです。斎藤さんってのは。

岩田 東大の先生なんですか？

吉田 いや、大蔵省です。

で、斎藤さんはね、実は、病気でね、亡くなっちゃったんですよ。亡くなったのは、いつだったかなあ。建築家っていうのはね、建築のことばっかり細かいところまで図面書くけれどねえ、建物全体をまとめるっていうことがなかなかできないんですね。だからいろいろな各部への打ち合せは全部、斎藤さんがやっていたんですよ。ちょうどコンピューターで、いろいろ整理するような、斎藤さんの頭の中はコンピューターだったよ。それで、もう、どこに、どういう配管があるとかね、どういう電線がきてるとかね、そういう設備関係と建築との調整、それは斎藤さんが全部やったんだ。

初田 議事堂の建築ですか？

吉田 ええ、もう、その為には特別な図面がいりますねえ。ちょうど今の設備図とか、ああいういろいろな関係図あるでしょ。あれと同じようなものを作っていたのよ。偉いですよ。そのおかげで、今でも役立ってますよ。いつか議事堂で冷房やろうと思ったらねえ、新しく冷房やるから、ダクトをどうするんだ言っていたら、何も手を加えないで、できちゃったんですよ。

初田 そうなんですか。

吉田 ちゃんとね、口ができとて、そこにただ接続しただけですよ。

初田 あ、そうですか。

吉田 ええ、もともと換気ということは昔からやってましたからね、その換気にね使っていい換気の口がちゃんとできてたんです。営繕課の人びっくりしちゃったんだ。

初田 議事堂建築っていうのは、例えば、全国の建築材料を調べたりなんかまでされて相当力を入れて作られましたねえ。当然、技術者も相当多くいたと思うんですけども……

吉田 うーん、技術者の数、たくさんいる、ようするに直営ができるんですから。

初田 はあ。

吉田 それから、あそこの材料見本室、たいしたものでしたよね。日本全国の材料見本がちゃんとあるんですから。残念ながら、戦災でだめになっちゃってますね。

初田 記録というか印刷になっているのを見たことがありますけど。

吉田 あれは、まあ焼けたというよりむしろ大蔵省が進駐軍に占領されちゃったわけですよ。それで散逸したと言った方が、正しいかもしれませんね。

初田 そうですか。

吉田 もうあれだけのものは、ほかになかったと思いますね。大学の見本室なんてとてもおいつかないないです。

南迫 それは、いろんな材料の石だとか……

吉田 ええ、みんな名前がついて……

南迫 いろんな木だとか……

吉田 ええ、もう、木から石から、砂から、なんでもあるんですよ。

南迫 日本中の……

吉田 ええ、ベンキまで。

南迫 そうですか。

吉田 実際に、その現場まで行って、ちゃんと状況まで調べてくるんですね。

大学の材料関係の先生が調査しても、それは部分的ですね。徹底的にやっているんですねえ。それは、まあ政府の仕事ということで、まあ、ある程度号令をすれば集まつたかもしれませんね。けれど、新しいもの掘り出してましたからね、大理石なんかもう輸入するよりも、国産、国産という

方針でした。

南迫 挖り出したわけですか？

吉田 ええ、掘り出してますね。もちろんそこに学者も関与しています。その名前はだれかわからぬなあ。

南迫 そういうのは

吉田 当時の人と言えば、やっぱり石なんか、岩石学の先生だと思いますね。建築の先生なんかだめですよ。木材ならば樹木。そっちの先生ですね。専門の先生がやっていたと思います。

岩田 先の齊藤亀之助さんも工学院にきて教えて、いらしたのですか。

吉田 ああ、ちょっとそこのところよくわかんないなあ。工学院とどういう風に関係があったか。ただ大蔵省の職員が、とくに建築の職員が相當に関係したと思いますが、築地の工手学校時代から、お教えにきてますね。

初田 大蔵省にはかなり、工手学校を卒業された人達が入ってたわけですか？

吉田 そういうことは、わからないなあ。とにかく、工手学校出の人は、大蔵省にいっぱいいたわけです。つまり、工事の現場監督の主任は、全部工学院大学の前身である工手学校出の人。それと、そのうち神田に工科学校ができましたからね。

初田 そうですか。

吉田 大蔵省は、大手町にありましたから、みな近いもんですからね、行ったんだ。ぼくは、新宿まで市電で通って、中村屋でライスカレーなんか食べて…（笑）

そう、我々の時代にはね、もう一つ、日大がありましたね、日大が専門学校まで…あれ何んていう名前だったかなあ。高等工学校かな。その卒業生がわりときいてましたね。

それで、昭和6年か7年からですね、門司へ転勤になったんですよ。満州事変が始まりましてね。

門司税關の税關設備をやらなきゃいけないと。ちょうどぼくが、大学出てから5年だから、高等官にしようという時期だったんで、そういうわけで、ぼくを門司へ追いやって、一応…（笑）

初田 高等官になられた訳ですね…

吉田 ええ、高等官にやっとしたと、こういうことじゃないですかね。門司税關、あそこ何にも設備がなくって、船が毎日4艘か5艘も入ってくるんですよ。それを措置しなければならない。まず

税關の上屋がいるんですよ。ものを収容する……。

初田 収納しておく場所ですね。

吉田 桟橋の上に、さっそく上屋をつくらなければいけないということで、その設計とか、まあ現地だから施工までですね。工事監督まで。それから鉄道の引込み線を引かなきゃあいけない。それから道路を作らなきゃあいけない。しまいには浮き桟橋を鉄筋コンクリートで作り直したわけです。鉄筋コンクリートで船作るなんて、一体どういうふうにつくればいいのだろうと思いました。

（笑） けっこう今でも、ちゃんと浮いているらしいですよ。（笑）

初田 そうですか。

吉田 あそこへ行って、主として土木の仕事をぼく覚えてきました。それは全部直営でした。初めてやったなあ。

初田 いつ頃まで門司におられたのですか。

吉田 私は、門司には、もう1年きりいない。

初田 ちょうど昭和7年だけですか？

吉田 ええ、昭和7年から、4月から、昭和8年の3月までね。

吉田 1年間にまあ、でもいろいろやったなあ。相談する人もいないんだよ。土木の仕事だもん。だから、土木の勉強したよ。船の設計まで…。案外できるもんだね。（笑）

初田 そのあとは、どちらへ行かれたんですか？

吉田 大蔵省の本庁の建築をつくるためにもどってきた。

初田 そうですか。

吉田 前に警視庁やってますねえ。昭和2年から。それから、昭和3年から、今度は内務省の設計始めたんですよ。

初田 ええ。

吉田 それで、工事が始まって、すぐに支那事変が始まって、そして、ぼくは門司へ行っちゃった。だから東京には中央本庁としては警視庁と内務省の設計だけなんです。文部省も同じ頃やっていてこれはぼくはやらなかった。

初田 そうですか。昭和8年から東京に戻られてまたずっと東京におられたなんですか？

吉田 東京へ戻ってあとはね、今度は遞信省関係。それから、海上保安庁とかね、一番大きかったのは、遞信省だなあ。遞信省関係、行くとおもしろいんだ。吉田鉄郎さんがおるし。ぼくは、遞信省庁舎の設計を担当した。本庁舎をね。そして柱割

りを作つて持つていいたら、吉田さんがそれを見て、「ああ、これ柱間が違つてゐるのは、どういふわけですか?」って逆襲されちゃつて。(笑)「柱は均等配置にするもんだよ」と教えをこうむつて「なるほど」と思つたんだ。ええ。

吉田 吉田さんは、大阪の中央郵便局の設計をね。あれはなかなかいい……。本当にあまりに理づめつていう感じはするんだけどね。あの我々の新しい目には、やっぱり。私も簡易保険局とか、例えば仙台の簡易保険局、それから福岡の簡易保険局とかね。それはみんなほくが……。

初田 やられたんですか?

吉田 関係してます。局舎は原則として逓信省で設計を行つんですね。

初田 そうですか。東京の中央郵便局なんかもその頃ですね。

吉田 ええ、中央郵便局もそうですねえ。中央郵便局のあんなもの作つて、こんなバカでかい天上の高さであつてね、これどっから出てきたんだと。これは山田守だよ、あれは。

初田 そうなんですか。

吉田 ああいふことを平氣でやる。(笑)

初田 東京の中央郵便局は、吉田鉄郎さんの設計とおうかがいしてたんですけど、山田守さんが担当されていたんですか。

吉田 まあ、あれが一番先輩だからね。なんでもかんでも彼が設計しちまつたりするわけだね。

初田 はあ。実際はどうだったんですか?

吉田 山田守と吉田鉄郎さんとはね、いきかたが大分違うからね。

初田 つい最近は、飯田橋の所の逓信病院が改築されましたね。以前のは山田守でしたね?

吉田 山田守がお得意になつたんだよ。

初田 そうなんですか。

吉田 あれでもって「おれは病院の専門家である」というんだよ。(笑)

初田 先生は、その当時他にはどういう建物を担当されたんですか?

吉田 えーと、逓信省にはやっぱりちょっと先輩だけれど、山田守よりか、ちょっと先輩であるけど、張管雄さんがぼくの関係する逓信省の建物の担当者でした。それで簡易保険局というのは、みんなその張さんのところへ相談に行って、プランまでむこうで「いい」って言うまで、こっちでちゃんと作つて。今も、仙台に残つてゐるでしょう。



清泉寮にて

あの大きな建物ですよ。

初田 そうなんですか。

吉田 ええ、戦災受けいませんからね。福岡にも残っていますね。あのあすこのなんだ、池のある公園。

岩田 大濠公園。

吉田 あの脇に。あれは、ちょうど門司にぼくがいた時に、責任で工事監督をやつたんです。

満州事変が始まっちゃつたから、あまりに建築設計が出てこなかつたんですね。予算の関係で。

初田 ええ。

吉田 で、逓信省庁舎も途中までやつたけれど、それもおじゃんになつちゃつたわけです。

初田 そうなんですか。

吉田 逓信省庁舎は、ちょうど今の大蔵省のすぐ前の敷地ですね。

初田 その頃もまだ夜間の工学院にこられたんですか?

吉田 来ております。誰れか、かわりがやつてたと思うけれど

初田 そうですか。

吉田 だから、ぼくは昭和6年までですか?

昭和3年から6年までその間工学院に來ていたわ

けですね。

初田 その頃の学生の気質というんでしょうか。  
どうでしたか。

吉田 とにかく熱心ですよ。ええ。実際的なことをやっている連中だから、ぼくが変なことをしゃべると、抗議してきますよ。

初田 なるほどね。

吉田 いやあ、木造の……木造なんてのは大学じゃあ習っていないもんね。

初田 ええ。

吉田 その講義をしなくちゃあいけない。それではね、一番いいのは、仕様書です。仕様書っていうのはね、あのとてもいい教科書なんだよ。特に木造はね。

初田 そうですね。

南迫 私も下元先生から仕様書を買わされて、それをもとに講義されました。

吉田 ええ、だから、ぼくが仕様書に関係ができたのは、工学院で木造の講義をした。それに始まっていると言つていいでしょう。門司から帰ってきてから、ぼくの担当はねえ、そうそう文部省と通信省ですわ。それから学校関係をぼくは大分設計しているんですよ。例えば、お茶大とかね、お茶大は、大塚の方へお茶の水から引起しましてねえ、大学は文部省でやるからとか言ってたんで、あと小学校と高等女学校ですね。あれはぼくらの設計だな。それから、高等商船学校。越中島の。どっかから越中島に引っ越して来たんだよ。

初田 商船大学ですか？ 今の。

吉田 ええ、あすこの建物はすべて大蔵省が担当しました。

初田 ああ、そうですか。

吉田 それで高等商船学校その隣りが水産講習所。水産講習所は文部省関係でないんですよ、あれは。農林省関係だ。それでぼくはタッチしなかった。

南迫 戦後は、あの高等商船っていうのは、清水にしかなかったんですね。

吉田 ええ。清水につくったんです。

戦時中に、船員たくさん養成しなきゃあ、いかんということから大々的に海軍のあと押しがあって清水に羽衣の松原があるところ（笑）あすこへつくれたわけです。

初田 移ったわけですか。

吉田 ええ。

初田 ああ、そうなんですか。

南迫 私の一番上の兄があすこへ行って……

吉田 それでそれ以前のつまりこれはね、やっぱり関東震災の関係で越中島に作ったんですよ。あそこに本館ができ、で明治丸を置いて、教室から構堂から体育館とかいろいろなものを作つたんですよ。それで、なんかいろいろやっているうちに、今度は清水の案が出てきたわけです。

初田 清水の……

吉田 それで清水のあそこへ木造ですね。もう資材ないですからね、それで大々的にあすこへ校舎とか宿舎とかね、作ったわけですよ。

初田 そうですか。

吉田 ええ、それずっと私がやってきました。そしてそのうち私は設計係でなくて、いわゆる企画係という方へ移っちゃったんですよ。

初田 いつ頃移られたんですか。

吉田 いつ頃だったかなあ、昭和18年頃じゃなかったかなあ。あの第2次大戦が始まった時には、もう私企画係にいたんだな。

初田 越中島の商船学校をやられた時に、一緒に担当した人といいますか、どういった人がいたんですか？

吉田 うーん、あれは誰れだったかなあ。

初田 もしくは先生の下でもって働いたりなんかした人は？

吉田 あれは、主として誰れだったかなあ。そうですね、あれはね大体が早稲田出身の人でしたよ。もう、みんななくなっちゃたんじゃないかな。そうそう、前川……前川何て言ったかな。前川君なんて言うのは商船学校を担当してたね。

吉田 早稲田の人が2～3人いたよ。

初田 ああそうですか。

吉田 それから、で、ぼくはまだ、そういう担当はしますけれど、あの役所には係長とか、課長とかいうそういう今式の名前はなかったわけですね。

初田 そうなんですか。

吉田 で、ぼくが門司から帰ってきたところは第3の設計室なんですよ。第3の設計室長は、あの萩さんだった。萩一郎といったかな？ 萩まさかつって、今足利工業大学に行っている、事務所も開いている人のお父さんですね。

初田 そうですか。第3っていうのはどういうことをおもにしていたんですか。

吉田 文部省関係、通信省関係、文書関係。

初田 第3っていうのは昔からあったんですか？

吉田 あつたんですよ。第1があつて第1は、議院係でそれは小島さんってね、小島えいきちといつんだ、明治45年位の卒業生、第2が下元先生、第3がその萩さん。

初田 そうなんですか。

吉田 第4がまだあるわけですね。

初田 第4はどういった仕事……

吉田 商工省、農林も第4か。

初田 いくつ位に別れているんですか？ 第4まであるんですか？

吉田 第4まで。それから仕様書係、仕様書、一括してやるんですよね。

初田 ああ、全部の第1から第4までの仕様書をみんな……

吉田 だから、それで、その他に工事監督をやる監督、施工管理をやるところは、また別にあったわけですね。そこに工手学校出のベテラン達が主としてそこの施工監理のとこにいたわけです。だから、その人たちに我々いろいろ教えてもらつたんです。

初田 戦争の間、先生はずっと東京におられたわけですか？

吉田 そうです。

初田 で、戦後もずっと大蔵省に……

吉田あのね、日本全国のものやってますからね、それはみんな東京から出張するんです。そこへ常駐しないで。そういうシステムだったですね。

初田 そうですか。

吉田 ええ、だから命令一下でどこへでも行くわけですね。今みたいに、その場で常駐してその地方のいろいろな特徴をね、設計にもりこむとか、そういうことは、非常に困難であった。そのかわり、中央指令はもう命令一下。だからわいわゆる營繕統一ということをねらっていたんです。だから、その点では一括して大蔵省の意向は、そのまま伝わるわけですねえ。

初田 標準仕様書みたいのもそうすると当然できてたわけですか？ 標準設計というか標準仕様書というのでしょうか？

吉田 標準設計というのはね、ある程度できてたわけですけどねえ、これは、あんまりやるとね。

(笑) だから、むしろ下元先生の特徴とかね、萩さんの特徴とか、むしろその係長の特徴が設計に出てきたわけですね。

南迫 それは、おもしろい。

初田 ええ、仕様書なんかは、ある程度共通してくれるわけですね。

吉田 ぼくが第3に行った時の萩さんっていうのは、まことに几帳面な人でしてね。やっぱり建築にあらわるわけですよ。プランニングにあらわれますよね。そこへゆくと下元さんの第2の方は、ある程度自由。(笑) 第3の萩さんとかは、どうもおもしろくないものばっかり。(笑) そういう傾向がありましたね。

初田 室長というか、その人がプランを作るわけですか？

吉田 いいえ。

初田 プランは、室長の下の人に任されるわけですか？

吉田 それはやっぱりね、相手官庁へ行って折衝するのは、みんなその若い連中ですからねえ、我が家がやったわけですねえ。

初田 そうですか。で実質的な責任みたいなのはそういう若い人が、まあ、最終的には室長の責任ということになるでしょうが……。

吉田 室長っていうのは総括責任ですね。だからたとえば、下元先生が設計したんですが、もう下にいる若い人が図面を書いたんですよ。それで、その図面たるやもう原寸まで書くんですからねえ。それまとめるのは大変だったと思うんです。大きな図面ですよ。それをチェックするのが大変だった。だから、設計図を書く係はね、だいたいそうだなあ、あの当時だから、まあ40代の古参だなあ。そういうベテランで現場の施工の仕方まで知っているような、そういう若いのを教えてくれるような人が1人ずつみんないたですねえ。こっぴどく批評されたもんだ。

初田 大蔵省ですと、明治までさかのぼれば、妻木頼黄さんがやったわけですねえ。

吉田 ええ。

初田 妻木さんの影響みたいのは、ずっとあつたわけですか？

吉田 それはね、施工管理の方で引き継いでいると思います。設計の方は、わりあい新しいのみんな入ってきてますから。

初田 妻木さんは、職人さんとか、工手学校出た人なんかも相当養成したという話を聞いていますが……。

吉田 下元先生とかね、まだそういう組織になつていなかつ前に一緒にいた人は、直接、あの方の指

導受けて昔のことを知つておると思います。我々の時代になるとねえ、もうそういうことは聞いているだけであつて……だけど、あれですよ。設計者が現場へやっぱり出てゆかないとわからんことがありますからね。あの監督員として派遣されるところはあるわけです。現場行つたらもう夜明けとともにもう現場へ行って、請負人よりも先に必ず現場へ行ってなきゃあならない。工事場が終るまでは、いなきゃあいけない。そういう状況ですかね。そりゃあはげしいですよ。

初田 戦争が終つてやっぱりずっと大蔵省に留まられていたわけですね？

吉田 ええ、大蔵省にずっと私おりました。

初田 戦後はどういうことをされたんですか？

吉田 それはね、ちょっと待つて。さっきちょっとまだちょっと言い残したんだ。私まだあの実は設計いろいろなものやっているんです。例えば、運輸省関係とかね、例えば目白にあります船舶試験場とかね、膨大な水槽がありますよ。試験水槽が。長さ 200 m 水槽って大変ですよ。実験設備ですからね。船の抵抗を計るんですね。模型船を作つて。それから、航空試験場。

南迫 三鷹に……

吉田 えー三鷹の前に、三鷹のやつは、戦争が始まつてからですね。それ以前に支那事変中ですが日吉の慶應のすぐ下に航空試験場があります。接收されちゃつたですね。そこにいろいろな実験設備、風洞までもってね、ちょうど駒馬の東大の航空研究所と同じようなものですから。

初田 そうですか。

吉田 運信省管轄です。で、片方は大学の所属だから勝手なことは、できないわけですね。運信省として、やっぱり機体を検査したり、いろいろありますから。それで 2 万坪の土地にそれを作りましてね。しかし終戦まで、完成しなかつたですね。大部分はできたんですけど。だから、そこにまだぼくの設計した建物がありますよ、確か。ただ、これは戦後接收されちゃつて、どうなつたか、何に今は使われているかどうかわかりませんが……それから、目白の船舶試験場は、あれは、まだあると思いますけど、それで例えば水槽作るってね、僕は、ああいうことを知らなかつたんだけども、実験設備、試験設備っていうのは知らないようなことをやらなきゃあいけない。というために水理学をやらなきゃあいけなくつて、水理学の勉強し

た。（笑） 航空では、空気の……流体力学ですね。流体力学をだいぶ勉強した。それはやっぱり僕が趣味を持ってやつたわけじゃなくて、やらされたのです。（笑）

初田 いろんな分野……門司で土木の方をやりたり……（笑）

吉田 ええ、土をやり、空気をやり、水をやり……それで、まあ建築とは違つた、やはり、やっぱりエンジニアの仕事をせざるを得なかつたわけですね。別に嫌でもなかつたんだから、だから、それで僕は、土木学科に入つてゐるわけですね。

初田 そうなんですか。

吉田 それで、あの、そんなことしている間に戦争が始まつちゃつたんです。戦争があの時ね、12月 8 日ですか。朝大蔵省の屋上に集まれというです。それで我々集まつたら、そこへ開戦決定を大蔵大臣が報告した。朝鮮海峡までも撤退するということを最後はその線まで退くということで宣戦布告したと、そういう報告だった。で、梶さんというのは大臣のうちで一番若いんでね、下元先生と同期でしょ。それで、無理やりに大蔵大臣やらされたんでしょうね。外務大臣、大蔵大臣は、戦争にもみんな反対してた連中ですよね。まあ、最後はそこまでということで……だから軍部はどう思つてたか知らんけど、みんなは、もう負けいくさそこまでという覚悟していたんですね。これは、まあ新聞にものりませんが。

初田 戦争の前は、満洲の方は、もう、まったく組織が別なんですか？

吉田 ああ、あのね、満洲の開発をしなきゃあいかんということですね。各省からみんな満洲国の役人になるために出かけた。それから満鉄へ行きましたね。僕は、ちょうど門司へ行って、あすこの税関におつたんです。

初田 そうですか。

吉田 あすこをみんな通るんですよ。あすこから、船に乗り出すんですよ。それで、そういう連中を送る役目を僕はしてた。で、大蔵省の国民財産課長が、星野、満洲国の総務長官になった。「おまえも こんか」って（笑） 「今、行きましょうか」なんて冗談言ひながら、別れたんですよ。そういう時代でしたね。その時代、昭和 7 年大量に技師が行つたんですね。

初田 そうですか。

吉田 横田先生もその頃行つたんかな……横田先

生は僕より2～3年あとですからね、むこうに行ったの何年か知らんけれど。

初田 ご結婚されたのはいつ頃になるんですか？

吉田 昭和8年です。門司から帰ってきて、じきに一緒になったんですよね。

初田 そうなんですか。

吉田 佐野さんが私の仲人なんだけど、大熊さんに話をしてもうど1年とちょっと短かいけれど門司に行かせようかということを、なんか話をしたんじゃないかなあ。突然ですものね。私、全然知らないんだもの。もう1年位、少なくとも門司にいるのは2年位と思ってましたから（笑）

初田 佐野先生と大熊先生っていうのは、仲がよろしいんですか？

初田 ああ、いいんですよ。やっぱり同級生だから。性格は違いますよ。でも、大熊さんという人は、やっぱり学者風の人でしたからね。だから、大熊さんの家へ行くと書庫があってね、あん中にもう神田の本屋から集めてきた古本がいっぱいあります。幸いにして焼けなくて残ったんですね。

初田 戦争が終ったあと先生は大蔵省でどういうことをなさったのですか？

吉田 大蔵省ではね、企画ですねえ。企画の第一は仕様書の統一です。ええ。それが戦後のJASに引き継がれているわけです。下元先生と一緒に、だから僕は大学入ってから、戦後の学会でJASの制定までですねえ、みんな下元先生のもとで、やったんでJASというのは、学会でやっていると思うかもしませんけど、その前提がもうすでにここにあったんですね。

初田 大蔵省でつくったんですか。

吉田 ええ。まあ……戦後にとにかく、あの建築技術者なんて、どこへ行っちゃったか、いなくなっちゃったんです。みんな散っちゃったんです。食べるのに困っていた時代ですからね、なんとかして生きのびなきゃあ。ですから、技術力なんてゼロですよね。

初田 それでJASを統一しようと……

吉田 それで、これじゃあ、鉄筋コンクリートの設計もできない。施工もできやせん。そういう時代になっていたんですね。ですから、学校がまず技術教育の短大みたいなものを作ったんですね。工学院の短大作ったのいつだったかなあ。正木先生が入られた頃は何年だ？ 終戦直後でしょ？

南迫 28年です。

吉田 とにかく、学校がはじまりましたよ。それから、学会がなんとかしなきゃあいかんというんですね。各大学なんていってそんなあてにしちゃおられないっていうわけで、それで、まず大蔵省は、その大部分が戦災復興院に移ったわけです。初田 はい、大蔵省の技術者が移ったんですか？

吉田 ええ、そうです。下元先生以下みんな移っちゃったんです。大蔵省に残ったのは、官房、營繕課だけが残ったんですね。ほとんど全員移ったんですね。学会もなんかしなきゃあいかんということで、まあ相談している間に、なんとかしようという中の一つとして、建築工事のもとになる施工、監理に関するものを整備しなければいかんと。大蔵省ばかりじゃないよ、逓信省あり、文部省もあり、そういう営繕課があるでしょ。そういうとこの基準はもちろん別にある。鉄道の場合もありますしね、そういうものの全部見て、それでそれに、基準的なものを与えようと。大蔵省では、すでに印刷できていましたからね、それは、毎年改定してたんです。そういうのをもとにしまして、まず、仕様書を作ろうということになったわけですね。

初田 そうですか。

吉田 昭和23年頃でしょうか？ 学会の歴史をみてもらうといいし、あれにも下元先生の遺稿集、あれにみんな書いてあったと思うんですね。学会は、すべての面で、いっぺん再検討するというわけで、いろんな委員会をはじめたわけですね。そん中の一つとして材料、施工委員会を作ったわけです。で、材料・施工委員会で何をするかというと、その第一が下元先生の提案で、標準仕様書を制定しようと、こうなったわけですね。それできちんと僕があの大蔵省の企画でもって仕様書の統一をやってましたんで、ええーそれが引き続きみたいなことで、私は、ずっとそれやったわけです。

初田 大蔵省の企画でもって、仕様書の統一をやって、その後、戦災復興院へ勤めておられたわけですか？ 仕様書を作ったのは大蔵省の時代ですか……

吉田 大蔵省に仕様書係があったわけですね。

初田 そこでやられて、戦後やられて……

吉田 ええ、仕様書係ぐらいでやってたんじゃあ、だめだということですね。それで、うん、大蔵省にはあの研究室があったわけなんですね。実験設備

全部持つてましたがね。だから、そういう連中も加わって、例えば、コンクリート調合なんて言うとね、大蔵省は、率先してやってたんです。

初田 それは、もう戦前から、やっておられたんですか？

吉田 ええ、そうです。浜田先生が、だからコンクリートの色、制定されたのは、昭和のはじめでしょう。

初田 そうですか。で、戦争がおきて、戦後は、あの復興院へ勤められたわけですね。戦後まもなく。で、そこでも、また、標準仕様書というのをつくられるわけですね。

吉田 そうです。戦後の仕様書のいき方は、戦前と違いますね。文書見ましてね、仕様書の。そして、わからん所は、全て、実験によって、その結果をあらわしていることで、一つ一つが、文書を細かく解説します。例えば、面が、「平ら」って言うと、平らって何んだと、平らを説明しなきゃあ意味ないじゃないか。そういうのが、みんな大学研究所の研究テーマになっていたわけです。ですから、仕様書を作るっていうことは、そういうみんなに、研究テーマを与えた……

初田 大変な作業だったんですね。

吉田 そういうことなんです。えー「カンナかけ」なんたって、平らになめらかなこと、そんな記述はだめだって。それから一つ一つ文章を細かく考えて、だから、最近の仕様書は、「なんだ、これじゃあ、教科書みたいじゃないか」って言われるわけです。そうなんだよ。もともとがそういうところから出発してたんだから。

初田 そうなんですか。

吉田 それは、終戦直後、なんにも知らない連中を相手にしなきゃあいかんからということですね。

初田 戦災復興院には、いつ頃まで、勤められてたんですか？

吉田 戦災復興院はね、自動的に建設省に変わっていました。

初田 そうですか。

吉田 ええ、戦災復興院は、内閣直属です。それでは。経済復興院と一体なんだが、目的がちょっとはっきりわからないんでね。何をするか、それで、一つには、やっぱり役所を作ろうと。戦後の役所を。ところがねえ、役所となるとね、これはエンジニア達の工科出身の連中じゃあ、できないと。なかなか、うるさいんですよね。一つはね、

戦時中から、もう、ちょっと、うーん下元先生なんかが先頭にたって、技術者運動っていうのをやったわけですよ。それは、学士会館でね、堂々たる盛大な発会式までやった。そういう運動があつたっていうのは、戦時中、技術者は、あれですねえ、無視されたっていうか、ことに軍隊なんかそうですね、そういうわけで、一つは、みんな反感を持っていた。

初田 いつ頃、大会をおこなったんですか……

吉田 いつだったかなあ？ これはね、調べればちゃんとわかりますよ。そうですねえ、堂々たる財界人が後押ししてくれましたね。

初田 先生が工学院に入られたのは、いつ頃なんですか？

吉田 もう、工学院は、役所を辞めてっからですから、昭和38年頃じゃなかった？

初田 役所はちょうど停年で辞められたわけですか？

吉田 そうじゃあないんですよ。私は、建設省におりまして、戦後の復興の建築をずっとやったわけですね。それから、途中、戦後と言ってもね、米軍がきて、米軍の施設をこれは、膨大な予算ですよね。やらなきゃあならなかった。だから、日本の国でやる建築なんていうのは、それ程予算とれなかつたんですよね。それやっている間に、まあ国会を整備しなきゃあいかんということですね。議事堂幸いにして戦災受けなかった。ところが、その他のは、みんな焼けちゃって、あの建物一つしかない。それで新しい議員法もできるし、議事堂の周辺がもう焼け野原になってましたからそこへバラックをずい分たくさん作ったんです。議員会館も作る、議員宿舎も作る。

南迫 中央官庁街の計画をされたというような話を先程お昼話されましたけど……

吉田 あの、国会というのはね、国の予算からいうと、国、政府とは違うわけですね。国会予算は、別。全然別なんです。最高裁判所と国会とそれから政府と……やっぱり

南迫 三権分立……

吉田 ええ、行政とこの三本立てになっている。だから、これは、全然予算は別です。だから、營繕もみんな別れちゃったんです。だけれども最高裁が何を言ったって、技術者いないんだから、最高裁判所の復旧とか、文部省の復旧とか、みんな僕がやっています。

初田 そうですか。建設省で……

吉田 ええ、建設省でやったんです。だから、煉瓦造のせっかく復旧したやつをこんどは、あそこへ持っていったから、しゃくでしょうね。

南迫 今の最高裁の用地は全部、国立劇場の用地だったんでしょう。

吉田 ええ、あそこずっとあいて、僕らあそこで、野球やってたんだよねえ。

初田 そうですか。

吉田 だから……惜しくてしょうがないんだ。で、今の国立劇場があそこにできたらんですね。あそこにはちっとも総合的にそういうものの計画やらなかった。ただ、お芝居だけの建物を考えてしまったから。でも、今の考え方から言うとあれでも面積狭いのかもしらんけど、今度…今度の国立劇場は敷地がどれ位かしら？ あれ、今、一万坪？

南迫 9000坪？ いってましたかね。

吉田 だったら、あそこ、もっと広いですものね。あのいわゆる霞ヶ関地区の整備は私が担当でやったです。それで、現在のかたちは僕が模型作ったそれと同じようにできているわけです。僕の下に本城和彦君ね。逓信省にいたんですよ。本城君と、今の安田事務所にいる、ええ、なんていった安田……臣、安田かたしって言うんだけど。ええ安田臣は早稲田の武先生と同期ですね。昭和13年組って言うのは、わりあいに建築界で活躍している人達ですよ。それで、東大では、丹下でしょ。

初田 ええ。

吉田 ちょうどあの年代にかたまってね、一つのピークが……それは、戦後の建築を行うということで活躍したんです。で、その安田君とそれから本城君、これもなかなかよくやった。そういう連中が私の課長補佐で私の下にいたもんですから、いろんな計画をそこでやったんですよ。戦後の建築は、実施もやったけれど、計画もやったんです。それで、議事堂周辺の地区計画をやった。それは首都整備委員会にとりあげられて、そのまま実行されます。ただ、今は、あすこに高速道路ができちゃったんで、ぶち壊しになった点があるよね。新しい官庁は全部あそこへ集中配置されます。だから、僕が一番ためになった仕事したっていうのは、議事堂周辺の地区計画。で、建設省で、まあ、やってたんですけど、ちょうど国会図書館の懸賞募集ができましてね、それで、あの募集条項の問題で応募者の役所の間に、いろいろな問題

とかがあって、もう懸賞ボイコットしようという案がでたわけですね。実は、我々も応募しようと考えてたんですよ。誰れでもいいんですからね。というのは、政府と国会とは違うんだから、我々も応募できると。だけれどね、どうもへんなトラブルがおこっちゃってね、誰れも、どういうふうにやっていいかわからないんだよね。ちょうど私が学会の委員会の時に、あの学会にみんな集まつたんですねえ。その懸賞募集をどうしようかっていうことで、建築家が。

初田 はい。

吉田 ちょうど私が同席していて、「懸賞募集はやめた方がいいですか？」って聞いたんだ。

(笑) 「いや、やめるのが目的じゃないんだ」と。「ならやれるようにしたらしいじゃないか」ってわけで。「うん、そうだなあ」っていうことで、みんなが思い直して。そんな条件なんかは、そりゃあお互いに話し合って決めりやあいいんですね。ということでそこで、方向転換したんで、とにかく、みんなやるという意志決定をしたわけですよ。問題は中央書庫とか、いろいろな名前をね、あの設計条件の中に書いてあったから、僕は、反対したんだよ。中央書庫式なんて、そんな名前は、建築にはないよ。それで、そんなことをしている間にね、誰れか、図書館の方に人がいるってことになつて、それで、とうとう僕に話があつたんです。その頃は僕も、建設省でもう最古参ですからねえ。まあ、行ってやろうかという、いわゆる出向ですからねえ。出向のかたちで、国会図書館に行きました。だから、すぐもうまた、建設省へ帰るようなかつこうで行っていたんですけど行ってみると建築がわかる人がいないんですよ。建築部っていうのは、技術者5～6人大学でいたのがおりました。では、何していいのか、彼らわからない。まあ、行って、とにかくコンペをちゃんとやっちまわなきゃあいかんってわけで、進めました。それでちゃんと、予定どおり、あのコンペとして、作品がずいぶんたくさん出てね。結果的に、前川が一等当選になったわけですよ。

初田 ええ。

吉田 だから、昭和29年ですよねえ。私が国会図書館へ行ったのは。それで、まあ、やつた以上、これ予算とってちゃんとやらなきゃあいかんという、今度は責任が僕とここに来たわけ。それで、日本に図書館なんたって、まともな図書館なんか

ありやあしませんよね。やっぱり、外国のを見てこなきゃあ、いけないから、大蔵省へ行って、「おい、視察の費用出してくれい」といって、それを第一条件で、それでなきゃあ、図書館にいないと強硬に言ったら、むこうは、実は、困っていたんだ。国会からは、建築費予算要求が、大蔵省へ出てた。それに僕が、これから、調査するのではあわないじゃないかと。結果的に僕がアメリカの図書館調査したのは、国の予算じゃないんですよ。アメリカの。フルブライトと同じようにね。あっちの予算ですよ。

初田 そうなんですか。

吉田 言わゆる国賓待遇ですよ。いわゆるV I Pですね。全部費用むこう持ちで、それから、お伴もまでついて、向う行ったら、国中案内してくれておかげで、あらゆる大学を訪問することができたですねえ。大学まわったのは、主として、大学の図書館を見せてくれて。それから、あとは公共図書館見るだけね。

初田 どの位、アメリカにおられたのですか……  
吉田 3ヶ月です。

初田 アメリカへはいつ頃行かれたんですか？  
吉田 昭和30年です。しかし、3ヶ月間もうまるで休みなくまわりました。

初田 そうですか。

吉田 （笑）ええ、よくサービスしてくれましたね。それで、帰ってきましたし、競技設計を行って基本設計はできたんです。それを今度は、実施設計に移す。そこで問題がおきちゃったんです。前川にね。「これ、本当に実施するつもりか？」（笑）「これ図書館らしくない応募作品なんだけれど、大丈夫か？」って。それでも、毎晩、前川の連中が図書館にきて、しまいには、僕の家まで来て、あれ、鬼頭、鬼頭梓とか、徹夜でもって議論です。

南迫 坂倉さんとともにコンペに入賞してますねえ。  
吉田 とにかく、二等が丹下ですよね。2等はちがうか。2等はちょっとわからない人。3等が丹下よ。

南迫 そうですか。

吉田 岸田さんが審査員で、もう頑張ったねえ。あれを一等にしたかったんだよ。丹下の。プランは、丹下の方が良かったです。

初田 はあ。

吉田 前川なんか、かっこうばっかりで……丹下

の方が近代的図書館のプランだったですね。だから、やっぱり懸賞募集はねえ、懸賞は、やっぱり人を選ぶんだという、そういういい方がありますねえ。作品そのものは、折衝してきめたもんじゃがないんだから。だから懸賞募集は、すんだら、そっから、また実施設計の為の基本設計が始まるんだという。そういう考え方からいえば、それでいいんだよ。ところが、どうしても前にこだわる。しかし、エレベーションはすっかり変わっちゃったでしょ。懸賞募集と。それで、審査委員長は、内田先生ですけどねえ。あの人は怒っちゃったんだよ。で、前川の方は、先生のとこ、まわって「どうもこうなりましたので……」って弁解にまわったんだよねえ。叱られたそうだ。

南迫 変わったってですか？

吉田 （笑）前川は前川自身が、実はやったんじゃなくてその下のあの田中誠君がやったんだ。前川のやったああいう計画、僕はある、ああいうエレベーションは、あのちょうどアメリカへ行った時に、サンフランシスコあたりにあったね。大きなコンクリートのパネル、ね、パネルはいいんだけれどさ、箱型になって、日本でもしゃしたら、いろいろな故障がおこるんですよね。ほこりは多いし、雨は多いし、うーん、ほこりがかかるとも、誰れも掃除しないだろうと。（笑）で、あの、サンフランシスコでそういうデザイン見たんだけど、ちょっとはやりだったんだなあ、あの頃は。アメリカでもきれいじゃなかったですねえ。あれ誰れだったなあ？ ミースじゃなかったかなあ。誰れかの設計だったよね。とうとうそれすっかり変わっちゃって、今のああいうベランダになった。ベランダのああいうことは、僕は、おおいに賛成した。まことにいいですよ。であれば、どろぼうがどっからでも入れて困るっていっていたけど、（笑）あれ避難には、まことにいいしね。あれね、ただ、金が、予算がともなわないもんだからね、もう仕上げがちゃんとできないんですよ。タイル張りにするなんて言ったら、大蔵省、目をむき出して、タイル張りになんかしたら、予算つけないって、そういう時代だったんです。冷房って言ったら、冷房なんてもってのほかだって。それでも僕は、あそこは、アルミサッシを使うのを決めたんです。浜野先生のところへ行って「アルミサッシは防火的にどうですか？」って言って「ああ、弱いけれどまあ大丈夫だろう」と言うこ

とで、国会図書館、官庁として初めて、アルミサッシを使ったのです。

初田 そうなんですか。

吉田 それで、その国会図書館、あの一応第一期工事すみましたから。私ね、もう、役人としては、ずいぶんもう最古参ですからね、36年に竣工しましたから、竣工式済んだあとで、もうあのかなもりさんも、亡くなられたわけですよ。かなもりさんってたいした人だったですね。だから、私も、官庁辞めましょうって、まあ実は、あとの5年、僕より5年下の課長でいた人に部長の席をあけてやろうと思って。部長っていうのは、各省の局長と同じですから、そこのポストをあけてやるというのが一つの目的で、それで、あっさり辞めたんですよ。

初田 はい。

吉田 それから、さあ、何しようかと思って。まあ少し遊びたいなあと思ったんだ。下元先生とは学会の委員会でしゃべり合っているし、そうしたら、安岡君が、工学院にきたわけです。「そうか、そういう手もある。」と考えて、昔、工学院にはちょっと短かい期間だけど、行ったことがあるんだけど、教授とかそういうことでなくていから、講師程度で気軽な時間ができるようなそういういき方ないかと言ったら、下元先生「そういうのは、ダメだよ。ちゃんとしなきゃあ」とか（笑）それで、とにかく「僕は、講師でいいから」と言って。なんか、12月頃か、なんか時期はずれの時に工学院に入ったんだ。

初田 そうですか。

吉田 そして、大学の中って、役所とは全然違うですよね。役所っていうところはね、一人相撲ではないんです。必らず、もし、大学で言えば、必らず助手がついてなんでも細かいことをやってくれるんですね。しかし、大学は全部自分でやらなくちゃあいけないですね。そういう違いがある。こりゃあ、なかなか仕事が大変だなあと思ったよ。本当に1人ですもんねえ。そういうところで育ったのと、僕らみたいにみんなを使って、そして一つのものを作りあげるといういき方が全然違いますからね。

初田 工学院では何を教えられたんですか。

吉田 工学院にきてね、何をいったい専門にしたらいいかって、僕は材料施工をほとんど専門みたいにやってましたから、長年。それで材料施工を

教えました。それに、設計もずっとやっていましたからね。それで 特に僕のところは図書館の設計はずいぶんいろいろ相談がくるし、そんなに困っているんなら何か学校でも図書館とか、そういう施設の計画をちょっと話してやろうかと思って、始めは2～3回、図書館の計画の講義をやったんですよね。だから、初期の人はそれ聞いているわけですよね。そうしたら、波多江先生が、計画の先生と施工の先生とは別々になってもらわなきゃあ困るというようなこと言ってたから、あっさり僕は計画のことはやめたんですよね。当時は施工計画が超高層まで含めて、やっぱり問題だったわけですね。それから、ネットワークとかいうようなものがそこに出でてきているわけです。おそらくネットワークの講義、はじめたの僕が最初じゃないですか？

南迫 そうですか。

吉田 ええ。それでもって、学生の卒業論文みんなネットワーク関係の施工計画にしちまってね。だから本当は難波先生と共同で、材料を含めたものやらなきゃあいけなかつたんだけれど、そりゃあもう、難波先生に任せておいたらいいと、思って、それと、下元先生が、もうやめていかれるんで、下元先生のあと引き受けなきゃあいけなくて、で、下元先生のいわゆる施工計画に関する仕様書関係のそういうもの含めてね、引き継いだわけですねえ。それでずっともう、退職するまでそれをやってたわけです。途中で学長から「図書館長やってくれい。」という話が出てきちゃって、ちょうど、設備コースが建築には、できたわけですよね。

初田 ええ、ありましたね。

吉田 設備コースの方の主任はっていうわけで、僕はそっちの主任になった。図書館長と主任の両方やって「いいんですか？」って言ったら、学長が「いいよ」とかいつっていた。本当はいけないらしいんだよね。

初田 そうなんですか。

吉田 主任と兼ねちゃあいけないんらしいんだけど……

初田 同じ立場になるわけですね。

吉田 各科の主任は、2年間ときまとてるでしょ。ペースがあわないです。途中から、図書館長引き受けちゃったから。でも、図書館にいたもんだから、図書館の中の本をどういう具合に処置する

とか、図書館テクニックは、僕はみんな知っていますから。こんなものわけなくできると思って。

初田 いつまで、工学院におられたんでしたっけ？

吉田 昭和54年までです。

南迫 6年前ですね。

吉田 だから、その間の研究室わりあいに多かった人数はね、みんなどこへ行っても、はねられちゃうような、そういう学生が僕んとこに押し寄せてこられちゃって困っちゃったんだ。

南迫 工学院では、高等学校と化学棟との設計をされたんですね。

吉田 そうそう、工学院のね、高等学校作るんですよ。大学は僕は関係してないんだ。で、まあ、平岡先生やってたかな。

南迫 下元先生も……

吉田 下元先生と平岡先生。ただ高等学校作らなきゃあならなくなつてね、高等学校がつまり八王子に移るということで。だから、高等学校は僕が全部設計です。

初田 そうなんですか。

吉田 ただ、もう請負者が清水組と決まっていますから、基本設計だけで、実施設計は清水に頼んで。だけどね、清水の設計たるやもう「構造計算書持つてこい」とって言ってね。「この梁どうやって計算したんだ?」とか言ってね。で「鉄筋もこれじゃあだめだよ。」って、鉄筋の配置かえたり、ふやしたり、いろいろして、ああいう経営者の設計って、つじつま合わせた設計書を作れば、いいということなんだろうと思うけど、おかしいですね。

南迫 化学棟はどこまでやったんですか。

吉田 化学棟は僕の設計だ。

初田 工学院に入られた頃の学生の印象ですか？ 何かありますでしょうか？

吉田 そうですねえ。ちょっと僕は比較ができないんだよ。我々の大学時代と比べて、工学院では大学へ行って学生はいったいどこにいたらいいのか、いる場所がないというような学校施設の不足ですね。それに対して我々は、製図室で坐って自分でもうちゃんと製図する机を持っていたわけです。

初田 自分の居場所があったわけですね。

吉田 ええ、居場所が。だからいつでも勉強ができた。でも今はですね。

初田 そうですね。

吉田 そういうわけでね。やっぱり施設が足りないということでかわいそ.udと逆に思っていた。で、あの頃は建築の学生で、ゴルフが案外盛んだったんだ。それで僕が引っぱりだされたんだ。それでゴルフ部長をずっと、やめるまで、やってたわけだ。ゴルフ部の部長をやる以上は学生と一緒に歩くと、まあ、幸いにして健康だからそれができるんですよ。一緒にプレーする。だから、合宿には必ず行つた。

初田 そうなんですか。

吉田 もうみんな真面目ですよ、工学院の学生。成績優秀。ゴルフのパートナーを持ってるんだよ。現在もつかっているんですよ。それ、学生が卒業記念に僕に寄贈してくれたんだよね、上等ですよ。

初田 そうなんですか。先生、ゴルフはじめられたのは、いつ頃からですか。

吉田 うん、それはね、国会図書館へ行った時からですね。でも、僕が初めてやったのは、大学出た直後ですよ。やることないんですけどもんね。だから、代々木の練兵場へ行った。今の明治神宮の脇ですね。あそこ原っぱですから。あそこへ行って打ったのが一番最初でしたね。それがもうあたると、よく飛んでゆくんで、まことに痛快。だけれど大蔵省では野球、職員の野球がとても盛んで、特に大学出だけの学士会というのがありましてね、若い連中でもって。それで大蔵省関係の銀行とかああいうとこクラブみんな持っている。グランド持ってる。グランドへ行って、局、大蔵省の局対抗の野球の試合があつたんだ。それで、僕は、建築を代表して出たんですよ。えーだから、野球やらなきゃあいけなかった。野球はね、もう小学校時代からさかんにやっていたんで、大蔵省でやり出したら、もう引っぱりだこになっちゃって、それでずっとやつたんです。日曜なんか野球の練習に行ってたり……、昔とちがってスポンジボールだったんですねえ。僕はスポンジボールでなんかやつたことなかつたんだけど、ちゃんと硬いボールでやつた。

初田 いわゆるソフトボールのことですか？ スポンジボールというのは？

吉田 いや、普通のボールと同じ大きさですよ。

初田 スポンジでできてるんですか。

吉田 うん、スポンジっていうのは……

ゴムだよ。打っちゃあ、よく飛びますよ。

南迫 軟式のテニスボールでしょ。

岩田 今の軟球ボールかな。硬球じゃなくて。

吉田 軟球っていうのか。僕はずーといわゆる硬球でやってきたんだ。それで、野球やってたんだよ。下元先生たちが昭和のはじめにゴルフはじめたんですね。ところがこっちは野球に夢中で。やりたいなと思ったけれど金もかかるしね。ゴルフやらなかつたんですね。だから、ずっとやらなくて、で、下元先生は建築学会の大会ちゅうと、その後ね、ゴルフの講習会やら、懇親会やらあって。岸田先生なんかもゴルフをやりましたね。

初田 そうですか。

吉田 うーん、うまいですかね。それでやらなかつたんだけど、国会図書館に行ったら、赤坂御苑にいたんですからね。あそこ広いですからね。あそこでもって、ああいう石の建築に初めて身近かに接したわけですね。やっぱり明治時代の施工技術ってたいしたもんです。今でも建具が動かかないなんて一つもないですもんね。全部木製で。丈夫ですねえ。ドアのヒンジ、丁番、それから、鍵、できがいいんですね。木材っていうのは、いかにメンテナンスさえよければ、もつかということをね、初めて知ったんですよね。あの窓なんてのはね、今でもスッーと音がなく開くんですね。で、腐ってもいませんね。ただ一つ、悪い点を発見した。

初田 それは、どういったところですか。

吉田 あそこは煉瓦造ですからね。煉瓦造の中に鉄筋がいりてあるんです。

初田 鉄骨と鉄骨が入っているんでしたね。

吉田 うん、鉄骨もあるけど、バラベットに鉄筋が入っている。鉄筋と言っても、今の鉄筋の丸い鉄筋じゃない。平鉄ですよ。それが、煉瓦の中につめこんで、鉄が膨張してね、そしてバラベットをこわしてゆくんです。もう一つはね、これはルネサンスの庭園、あの庭園の中の手すり、あれは全部破壊されたんですね。

初田 そうですか。やっぱり雨なんかがしみ込んで……

吉田 ええ、あれは中に鉄筋が入っているわけです。それでもって、全部こわれちゃったんです。だから、今度の迎賓館の修理で、全部とっぱらっちまった。それから、あそこですね、正門があるでしょ。ちょうどベルサイユの宮殿あたりにあるような、鉄柵。

初田 ええ、ありますねえ。

吉田 あれをちょっと見に行った時に、だいぶいたんでいるんですよ。鉄ですからねえ。ただ普通の鉄と違うから、さびないんですけどね。これはあの正門の扉の上の彫刻なんか、おっこちてくるんで、こりゃ有名物だから、こわしちゃあいけんから、たおれたら、たおれたら大変だ。大蔵省へ行って「あれ、倒れたらどうします? あなたの責任だよ。」って。修理費もらって、大修理ですよ。あのおかげで助かった。あれやつたからね。フランスへ行って、あっちこっち手すりの作り方を調べたですよ。(笑)

初田 どうも、長い間、大変興味深いお話を聞いていただきまして、誠にありがとうございました。大蔵省のお話し、工学院や国会図書館のお話など聞いていて勉強になることばかりでした。これからも工学院大学および建築学科同窓会の為にいろいろ御協力お願い致します。

南迫哲也（昭和34年卒）

初田亨（昭和44年卒）

岩田俊二（昭和46年卒）



## 前島 為司 氏 に聞く

### — 先輩を訪ねて その1 —

聞く人 金尾、初田、岩田

初田 今日お伺いしたい用件と申しますのは、お電話で簡単にお話し申し上げましたように、卒業生からお話しをお伺いし、それを同窓会誌「ニッヂ」に載せることを考えているのです。苦心談とか、どういうふうな道を歩まれてきたかなど、そういうものをできる限り詳しく聞いて、資料として残してゆきたいと考えています。と言いますのは、うちの大学も創立してから100年近くになるわけなんですけれど、具体的な歴史がわからないのです。立派な先輩方がたくさんいる訳なんですが、私達にとって、その先輩達の歩んだ道がほとんど分からないというのが実状ではないかと思うのです。と同時に、「100年間の歴史がある」と僕らが学生に言うと「えっ! そんなに古いの」ということになるんです。歴史が古いといっても、それが現在に生かされることには意味がないと思うのです。そのようなことから、まず第一歩として、どういう先輩がいたのかということを同窓会誌でとりあげようと思ったのです。いろいろな先輩の歩まれた道を知ることはまた、僕らにとっても励みにもなるわけです。そういった意味で、同窓生のわりとご高齢な人からお話しをお伺いして、記録を残していくみたいということを考え、始めたわけです。

前島 まあ、私なんかはあまり活躍もしていないんだけどねえ。

金尾 いや、会長の場合は、活躍なすって、しかも優雅でいらっしゃったですよ。

前島 いやあ。

初田 ちょうど工学院大学の理事長や何かもやらされたことがあるので、一番最初としては、ふさわしいんじゃないかなと、編集委員の方で考えたわけ

なんですけど。

前島 理事長やったって……。理事長やる方がなかったもんですからね。で、よせばいいのに、学校から頼まれて、ほうぼう先輩を頼み歩いてましてね、どこ行ってもことわられちゃって、しまいに、「おまえ、やつたらいいじゃないか!」って誰かが言ったら、今度は、みんな、「そうだ! そうだ! 前島がいいだろう。」って言うことで、とうとう押しつめられちゃって、理事長を仰せつけられた訳です。でも、一期だけですぐお暇頂きましたから。

初田 でも、ちょうど学校が移り変わっている時ですね、重要な時期でしたね。

金尾 理事も長くやれなかつたんですね?

前島 ええ、できれば、2回ね。早くおいとましたいと思っていたもんですからね。今度は仲間も多勢いますからね。でも、目が悪くなってから、いけなくなりましたね。

初田 今は、どういう状態なのでですか?

前島 糖尿病ですからね。目が失明寸前で、目の膜を切って、とっちゃったんですよ。入院して1ヶ月かかりましたけど。目の膜をとっちゃった



もんだから、ボヤーッとして見えません。それを補助するために、こんなあつい眼鏡をかけてしているわけなんですね。こんな眼鏡大変なことですからね。

金尾 同窓会ができる、ちょうど今度20年になるんですね。今度でる同窓会誌の号が10号。来年ですね。なんかごろがいいんじゃないか、少し記念的なことをやらなきゃあいけないとかね、そんな話しもでておりました。ですから、今度の会長のお話しも、非常に良い記念になると思います。

初田 お生まれになったのは、どこだったのですか？

前島 東京です。明治43年6月20日に生まれました。

金尾 そうすると、今おいくつになられるんですか？

前島 それは、おいおい話しさは入ってゆきますが……。このすぐ隣り口の坂町という所で生まれて、赤ん坊の時に抱かれてここへきて、それからずっーとここにいるんですよ。

初田 そうなんですか。

前島 ここで、戦争に行き、ここでこの歳になるまでいたことになります。

初田 小学校なんかは、そうすると当然このあたりの学校になる訳ですね。

前島 四ツ谷第3小学校です。

なんか、生徒が確かに多い学校で、成績は70人中、7番目でしたか。過密学級だったんですね。

初田 1つのクラスが70人ですか？

前島 ええ。私のクラスが70人。あと、1組、2組、3組とあって、2組が男女組、女の組が、3組でね。その中には芸能界に出た人もおりました。入江たか子が同級生です。

初田 小学校には何年間、通われたんですか？

前島 小学校は6年。

初田 それから築地の工手学校に入った訳ですね。

前島 そう、そう。

初田 その当時は、まだ築地にあったわけですか。

前島 築地にありました。ちょっとかよっているうちに、関東大震災にあって、校舎が全部焼けちゃって、それから、学校は、新宿の現在の所に移ったんですね。

初田 築地に学校があった時、四ツ谷からは、どういうふうに通われたわけなんですか？

前島 現在は走っていませんが、都電がはしって

いたんです。

初田 当時は、市電になるんですか？

前島 当時の市電ですね。

築地は、まあちょっとしか行ってなくて、すぐ焼けてしましましたからねえ。

初田 工手学校へ入られたのは、いつですか？

金尾 震災が大正12年ですから……

前島 大正12年に入ったんだけどね。小学校卒業する時が、その震災の年で、小学校卒業する前に、工手学校へ入っちゃってね。

二重学生でいけないって、いう話もあったが、小学校の方ではあと2ヶ月だからおいてくれって言って無理言わされて、二重学生で通した。

金尾 3月に小学校を卒業して、4月に工手学校にお入りになったんじゃなく……

前島 うん、そうです。工手学校は2月に始まってるんです。

初田 そうなんですか。

前島 2月に始まるっていうのは、2月がくると2月に卒業生を出さないと、卒業生の就職に困るという理由から行っていたようです。

初田 当時はそうするとどこの学校でも、2月入学だったのですか。

前島 みんなでは、ないですけど、わが校に関する限りそうでしたね。2月だったです。

初田 ああ、そうですか。なんで工手学校を選ばれたわけなんですか？

前島 私の親がここで商売していたのですが、体が悪くなっちゃったもんで、早く入ろうと思ったわけです。当時、府立の工芸学校というものがあって、最初はそこに入るつもりだったんですけど、工手学校に決めたのです。

初田 お父さんも、建築関係のお仕事だったのですか？

前島 ええ、おやじは、非常に大きな左官屋でしたよ。

金尾 あ、そうですか？

前島 いや、非常に大きな左官屋だったですね。えー、他府県にも行ったんですけど、東京都内の大手の工事やら、他の大手の人と競争で競ってやってましたね。弟子も多勢いて。私の代じゃありません。私の親の代ですからね。

初田 代々左官屋さんだったわけですか？

前島 そうではないです。私のおやじは、そういう左官屋だったけど、その前の人は、農業です

からね。養子でした。

初田 じゃあ、お父さんの代に東京にこられたわけですか。

前島 父親は、金剛砂砥石をこしらえる会社もおこしてやっていたようですが、それは、うまくゆかないで、後におやじが死んだ時にやめました。  
初田 工手学校へ行くことにされた理由は、やっぱり左官の関連ある、いわゆる家の職業を継ぐということで、工手学校に行かれたわけですか？

前島 早く社会に出るために選んだのです。工手学校は短いから、っていうんで入ったんですね。

初田 当時、工手学校には、どんな先生がおられたんですか？

前島 ちょっと、さだかではありませんね。はい。生徒はみんな、齢をとっている人が多いもんですからね。言うこと聞かない人も多いし、酒飲んで授業にくる人とかもいました。そんなことで、生徒監にはひげはやっておっかない人がいましたが、その他は、さだかに覚えておりません。

初田 工手学校ですと、当時は夜学ですね。

前島 予科は昼間だったです。

初田 そうなんですか。

前島 予科は、お昼から始まって、晩までやりました。

初田 予科というのは、1年間ですか……？

前島 1年間です。

初田 そうすると、予科が終って本科に入ると、本科が夜になるわけですか？

前島 そうです。本科があって、さらに高等科というものもありました。

初田 本科の上にですか？ そうすると全部で、予科と本科と高等科の3年間行くわけですか？

前島 いや、3年半だったよ。

金尾 本科はながかったでしょ。

初田 そうですか。

金尾 ええ、私の時には、本科は2年でした。

初田 そうすると、予科だけが昼間で、あとは夜になるわけですか？

前島 そうです。

初田 昔の工手学校の話しなんかを読みますと、昼間よく働いて夜通ったなんて話が出てくるんですけど、前島さんなんかも、昼間どこかで働かれて、それから夜、通われていたんですか？

前島 私の家は、当時としては、財産がありましたから、働く必要なく、家でブラブラしていて、



それから学校へ行っていたんですね。

初田 では、家の仕事を多少、手伝いながら、通ったわけですか。

前島 家の方も半分仕事をして、半分家作で食べているような具合でしたよ。

初田 そうですか。それで、工手学校に入られて、間もなく関東大震災がおきて、学校そのものが焼けて、今度、新宿に移るわけですね。新宿に移っても、まだ、工学院という名前はついていないわけですね。築地の方は、築地工手学校という、築地という名前をつけて言う場合があるようですが、正式には何と言ったのですか？

前島 ただの工手学校です。あの頃には、早稲田工手学校というのもあったですね。

金尾 早稲田にありましたね。

前島 だから、それとの関係で、築地工手学校という通称を使ったんだと思うんです。正しい名前は、工手学校です。

初田 前島さんが築地でもって授業を受けられたのは、予科だけですか？

前島 予科だけです。

初田 予科の途中に、震災がきたわけですか？

前島 ええ。

初田 そうなんですか。

前島 新宿には日本中学があったですよね。日本中学では杉浦じゅうこう先生が校長で、最初は夜だけその校舎を借りたのだと思います。工手学校は夜学ですからね。工手学校が移ってしばらくしたら、とうとう日本中学はなくなっちゃったね。うちの学校が買収して入ったのです。

初田 じゃあ、日本中学に最初は夜の間、同居させて頂いて、その後、うちの学校の所有になったわけですか、日本中学の中に……

前島 そうだったと思いますよ。

初田 それで、うちの学校は新宿に移ってくるこ

とになったわけですね。当時の工手学校は1クラスの学生は、どのくらいいたのですか？

前島 うへん、かなりの学生がいたですねー。

初田 どんな人が普通来るんですか？

前島 建築会社に勤めている人ですとか、大工さんとか。

初田 工手学校出ると役人になるに早道だったという本を読んだことあるんですけど。

前島 役人になった人もいましたね。

金尾 会長が、海軍航空隊にいたという話を聞いたこともあるんですが。

前島 いや、陸軍航空隊です。

それは、もっとあとですね。

初田 それで、工手学校が新宿に移ってきて、やがて卒業されるわけですね。高等科までいかれて卒業されたわけですか？ 卒業されたあとはどうされたのですか、自分のおうち。

前島 卒業してから商売をしました。

初田 そうすると、その時にはもう建設会社を興こした訳ですか？

前島 左官屋をやっていたってしょうがないし、左官屋たって親父のでしょ。それと競合してやったでしょうがありませんから。私もなんか自分でしなくちゃあならないと思っていました。セメントと石をまぜて、流し台なんかを作って売りました。今ではどこにもあるようなやつですね。

それで、自分で人造石屋をやりましてね。前島人造石店という名前です。

初田 そうですか。前島人造石店を開かれたわけですか。

前島 人造石屋なんて、他になかったんです。

私のうちともう一軒、蔵前のぎょくこう堂という店だけでした。ぎょくこう堂はどういう字を書くんだったかな。2軒しか東京になくて、その時は非常に忙しくてね。かたぬきでこしらえたり、いろいろ私なりに考案して、さあ、ぼくの一生の職業とするのは、これでいいんだなあと思って一生懸命やっておりましたけど、そのうちに戦争くさくなってきたんです。

初田 人造石屋は、ずっと長い間やっておられたわけですか？

前島 ええ。3年か4年ぐらいだったか……。

これは、自分の一生かけてもいい商売だと思っているうちに、大東亜戦争が勃発したわけですね。

初田 戦争が始まってから、どうされたわけですか？

か？

前島 戦争が始まってから、今度は軍隊の歴史になるわけです。私は、甲種合格では入ったんですけど、背が低いものですから、ものを運搬する輜重兵の試験を受けて、それで入ったんですね。

金尾 おいくつ位の時ですか？

前島 私が22歳の時だったと思います。

初田 そうすると、前島人造石店っていうのは、3~4年開かれていて、その後……

前島 それをやっておりながら、戦争にぶつかっちゃって、兵隊に行ったわけですね。

初田 軍隊には、相当長くおられたんですか？

前島 それがずっと戦争が終るまで入っていたんです。

最初は渋谷の輜重隊に居たのですが、それから、戦争になったもんですから、今度は、どうせ帰れないからって、あっちこっちの隊をかわったわけですね。

初田 そうですか？

金尾 志願なさって入ったのですか？

前島 本職ですよ。だから。

初田 陸軍になるわけでしょうけども、陸軍の建築関係をやっていたわけじゃないわけですね。ずっと輜重隊の方におられたのですか？

前島 輜重隊の方は、じきにはずれちゃって、今度は、なんていったか、なんに属するのかな？

初田 そうですか。話をちょっとまた戻しちゃって申し訳ないんですけど、工手学校の授業は、教科書みたいなを指定してやるわけですか？ それとも、先生が黒板に書いていったのを中心で筆記したりして進める訳ですか？

前島 筆記したりなんかしましたね。

初田 今でいうと、教科書というものが大体ある場合が多いんですが。

前島 教科書もあったんでしょうけどね。少なかつたように思います。

初田 そうですか。内容というのは、相当むずかしい話しだったのですか？

前島 ええ、むずかしかったですね。だからそれだけでおいつかなくて、ほかの学校で、昼間補習教育を受け、夜に工手学校へいきました。自習学館という、自分で習うことを中心とした学校がありまして、そこへ行って勉強しました。

初田 それは、どんな学校ですか？

前島 どんなことばも教えるんだけど、そこで英

語を習っておりました。

初田 英語を習われてたわけですか？ それは、何年位通われたんですか。

前島 3年行ったんだか4年行ったんだか正確にはおぼえていませんが、みんな子どもが習いにきてるんですからね。そこへ行って、私は年輩者ですから、だんだんそこで偉くなっちゃって、そこで生徒の代表みたいになっちゃいましたね。

前島 工手学校に私が入ったのは、工手学校を出てた方が就職が良かったからですね。

初田 そうですか。当時は、試験とか、そういうのやって進級してゆくわけでしょうか？

前島 ああ、試験がありました。

初田 そうすると落ちる人なんか、相当いたわけですか？

前島 ああ、居りましたよ。祥天きている人がいましたね。

初田 印祥天ですか？ 職人さんとして昼間働いて夜こられたんですね。

前島 そういう人は、実務はよく知っていますからね。だから、木造建築の構造なんかやったりしても強いですよ。ぼくらがわかんないのをよく知ってました。先生より詳しいですからね。

初田 それは、そうですね。講義の内容は主に木造建築が多いわけですか？ それとも鉄筋から、何から全部ですか。

前島 鉄筋でしたね。

初田 鉄筋コンクリートが中心ですか。

それから、工手学校を卒業されて、その後前島人造石店を開かれて、3～4年して、戦争が始まり、陸軍へ入られたわけですね。それで、そのまま終戦を迎えるわけですか。

前島 そうですね。簡単に言えばそうです。

初田 終戦を迎えて、再び四ツ谷に戻られたわけですね？ それで、何を一番最初されたわけですか？

前島 そばに市ガ谷があるから、当時は戦車がガラガラ通ってました。とにかく、なんかやって食べなくちゃあならないからと思って出発したのです。

初田 建築会社の前島組というのを、それで設立されるわけですか？

前島 はい、この場所で前島組を始めたのです。

初田 前島組を設立されたのは、いつ頃ですか？ 戰後間もなくですか？

前島 戦後、まもなくです。終戦から2、3年後です。

初田 そうですか。終戦直後は、建設の仕事をやったって、それ程仕事もないでしょうね。

前島 ええ。やっぱり、2～3年たったんでしょうね。

初田 それまでは、特に建築関係にかぎらず、いろいろな仕事をされたわけですか？

前島 建築関係が多いですね。

初田 そうですか。例えば、どんなことですか。

前島 木造建築を建ててました。みんな住むうちがないんですからね。家を建てて、こっちに帰ってこようとした人が近県におられます。その人が金を持ってきてうちに預けていらっしゃうんです。

初田 家を建てといてくれということですか。

前島 だから、うちは金はあってしょうがない。金ばっか持ってきてしゃって。受け取らないと言っても聞きゃあしない「まあまあ」と言って全部おいてゆく。

初田 そうですか。現在の場所で前島組を設立されたわけですか？

前島 ここです。ええ。登記上明らかに前島組言ってますよ。登記したんですから、ちゃんと。

初田 そうですか。

前島 資本金は、100万円でした。

初田 その時はまだ株式じゃなかったのですか。

前島 株式です。

初田 株式の前島組を設立したわけですね。設立されたあとどんな仕事を主にやられたのですか？

前島 木造建築が多ございました。工場もありましたけど。

初田 木造建築というと住宅ですか？

前島 はい、住宅ですね。

初田 その場所というのは、四ツ谷近辺が多かったわけなんですか？

前島 四ツ谷近辺とは限らなかったんですけどね。

まあ、四ツ谷と麹町一帯が多かったです。

初田 当時は、そのこのあたり一帯焼け野原になって、相当、量があったわけなんですか？

前島 建てた人は、だから金の他に食糧をくれたのね。

初田 ああ、そうですか。

前島 ひどい人は、一斗だる一杯の塩辛をくれたね。塩辛なんてもらつたっておなかの足しになりませんからね。

初田 そうですか。（笑）

前島 魚河岸関係の人ですけど、これ持っていって食べろって、食べろって言ったって塩辛だけ食べられませんからね。

初田 そうですね。食糧くれるわけですか。はあそれは、いわゆる工事費とは別に、お礼というかたちでくれるわけですか？

前島 そうですね。そうそう、うん。

初田 建築材料なんかは、当時は手に入ったんですか？

前島 ちょうど私は、疎かいが奥多摩でしたから、奥多摩の方から木材をもってきたんです。

初田 そうですか。でもこうで角材にしてこっちへ持ってくるわけですか？

前島 はい。

初田 ああ、じゃあ、そういう意味では、運が良かったというか……

前島 ちょうど、疎かい先が木材の産地ですからね。そして東京に入ってくる木炭車で、ずっとガソリンじゃなく木炭車でした。木炭車で材木を運んでくるんです。

初田 奥多摩のどの辺ですか？

前島 御岳の方でしたね。

初田 ああ、そうですか。じゃあ今でいう青梅市あたりですね。

前島 そうですね。

初田 疎かい先といつても前島さん自身は、もう軍隊に入られていますね。

前島 ええ。

初田 ご家族の方がそちらで生活していたのですか？

前島 ええ、そうです。私の家族、だいたい私の本家は、三島なんですね。木材等を奥多摩の方にちょいちょいとりに行っていたから、そういう関係で紹介してもらったんですね。

初田 ああ、そうですか。そうすると、木材をとりに行っていたというのは、戦争の時も仕事をされていましたか？

前島 軍で建築の方をやっていたから、私は。

初田 そうですか。輜重隊のあといつ頃から、軍で建築関係に移ったのですか？

前島 輜重隊からいっぺん解除になって、今度は、工務関係に入ったわけですね。

初田 それはどこですか？

前島 東京です。やっぱり奥多摩に近い方にあっ

たですね。

初田 輢重隊には、そうすると何年位おられたんですか？

前島 これは、わずかしかいなかったです。

初田 それすぐ、もう、工兵って言うんでしょか？ なんて言うんでしょうかね。陸軍の工務関係に入ったわけですね。

前島 ええ、入ったのは、徴用員で入ったです。

金尾 徵用ですか？

前島 建築技術者として、徴用になったんです。

初田 ああ、そうですか。で、それでずっと、戦後、終戦まで。

前島 徵用になって、軍隊にいるうちに徴用員が、今度は、そろそろ徴用じゃなくて本官になるわけですね。志願してなるんでしょう。特務曹長までなりました。

初田 そうですか。

金尾 下士官ですよね。

初田 ジャあ、軍隊生活のほとんどは、建築関係として活躍されたわけですね。

前島 はい、そうでした。

初田 で、軍隊でどんな建物を建てられたわけですか？

前島 そうですね。川崎の近いところで、木造の大きな格納庫みたいなもの作くったりしました。だいたいは営繕関係が多かったんですけどね。

初田 営繕関係ですか。

それで、奥多摩の材木屋さんと知り合って、それで前島さんのご家族をむこうに疎かいさせたわけですか。……

前島 ええ、そうです。

初田 いつ頃ご結婚されたわけですか？

前島 戦争中、結婚したんですね。

初田 おいくつ位の時ですか？ それは。

前島 大東亜戦争がはじまってすぐだったです。

初田 そうすると、昭和16年頃、結婚されたわけですね。

前島 ええ、そうですね。

初田 そうですか。それで軍隊でもって奥多摩の人と知り合って、戦後、奥多摩の人を通して、材木を手に入れて、前島組をおこして工事を始めたわけですね。

前島 そうですねえ。

初田 前島組で工事始められて、最初は、住宅とか、木造関係が多かったというんですけど、住宅

以外に木造関係って他にどんなものがあったのですか。

前島 そうですね。築地市場の関係の隣りに魚を輸送する会社があったんですねえ。その工事をやったことがあります。

初田 前島組を前島建設にしたのは、いつ頃ですか？

前島 えーと 進駐軍がきてから、ビックリして急いで変えたんですから……

初田 じゃあ、前島組おこしてすぐ前島建設に名前を変えられたんですか？

前島 進駐軍がきて、前島組と名っていると、米軍の将校が入ってきて、いわゆるやくざなんかと間違えられちゃうということで変えたわけです。

初田 前島建設が大きくなってゆく過程というの は、いつ頃からですか？

前島 今でも大きくはありませんがね……（笑）

初田 いくつか、ふし目みたいのがあるわけでしょう？

前島 この四ツ谷地区の復興につれて、私のうち が大きくなったんだと思いますね。

このあたりの建物が鉄筋コンクリートになる時に、町の大工さんじゃできないということで、うちで行いました。

初田 木造が鉄筋になり始めるというのは、このあたりでは、いつ頃位からですか？ オリンピックの前でしょうね。もちろん。

前島 オリンピックの少し前あたりでしたね。

だからその頃は軒なみ、前島とこのふだが工事現 場にかかっていましたよね。

初田 大学の理事長になられたいきさつは、さき ほどお伺しましたけれども、校友会の会長をされ たこともありましたよね。

前島 そもそも学校へは、卒業生をほしいと言っ て頼みに行ったのがはじめてですよ。就職担当の ところへ。ところが、窓口でもって「今はなかなか難かしいですよ」と言われたんです。弱ったなと思って考えていたら、そのうち「おまえさん 何しにきたんだ」という言葉から、「いや、次の卒業生をほしいと頼みにきたんだ」と言ったら、「じゃあ、校友会に来なさい。なにかあるかもしれないから」という話になったのです。そんなこ とから、校友会にかかわるようになったのです。金尾 そうすると、大山さんがお元気な頃からですか？

初田 いつ頃ですか？

金尾 そうするとね…… ざっともう30年以上も 前ですよ。

初田 それで校友会でもいろいろ活躍されたわ けですね。

前島 あの頃は、まだ昔の正面玄関、昔の正面玄 関の脇に校友会の事務所があつて、大山さんがね ドカンと坐わってましてね。

初田 昔のというのは、あの浄水場のあの側に あった玄関のことですか？

金尾 そうです。玄関の左に校友会の事務所があ りました。当時は、卒業生の一人が事務局長をや ってましたからね。あの会長は2期おやりになつたわ けですね。

初田 最後に、先輩として学校に期待することと いいますかね。今、ちょうど将来計画を進めてお りますけど、何か、こういうふうな学校になつて 欲しいというようなことはありますでしょうか？

前島 工学院大学は、私達が、考えもしなかった ほど、よく発展したわけですが、どこか、なんとなしに、もとの工手学校の体臭が残っているよう な気がします。これからは、その辺も改めてもら いたいですね。

初田 それでは、どうも今日は本当にいろいろあ りがとうございました。

前島 為司氏（大正14年卒）

株式会社 前島建設工業会長

社団法人 工学院大学校友会理事長

元学校法人 工学院大学理事長

聞き手

金尾 武彦（昭和14年卒）

初田 亨（昭和44年卒）

岩田俊二（昭和46年卒）

昭和60年3月15日 前島建設事務所にて

# 「如庵」について

金尾武彦

お茶室というの、建築の方々が、わりと誤解しておりますので、そのあたりから話させて頂きます。

私がお茶の道に入りましたのは、茶室の設計をよりわかりたかったので入門したのです。

2年程のつもりが、厳しい先生でしたので休むことも出来ず、ずるずると15年を過ぎて今日になってしまったわけです。

お茶室につきましては、堀口捨己先生が、「茶室の美は、茶の湯の目で見なければならない。また茶室の美を建築の形態の美として、茶の湯から離れた普遍的な美を茶の湯の側から見ても……」、まあ、茶室というものは、からっぽの部屋で、本来は美しさも何もないのですが、お茶室は、お茶事を行なって、初めてそこに美しさが出てくるのです。

しかしあの小さな空間は、何んにもなくとも普遍的に美しさをもっていて、茶の湯から見ても建築として見ても美しいものではないかと堀口先生はおっしゃっています。

それで、「お茶」のことですが、「茶の湯」というのが、本来の「お茶」でして、普通皆さんが「お茶」と言われておりますのは、「大寄せ」といって、大勢の人の茶会で、点茶と点心という極く簡単な食事が出来る程度で、そのような茶会が一般に「お茶会」といわれており、それだけの為の茶室を「茶室」といって造っておられる方が大半です。

本来はお茶事をする空間で、それは、露地という外部空間から茶室に入る。この空間がお茶事の前奏曲です。

露地の空間（四季と庭）を充分味ひつつ、茶室に入ります。そこで炉に炭をつぎ、懐石料理が出され、季節、時候、本日の趣向等々で演出され、料理が終りその後一度外（露地）に出て、再度茶室に入りお茶をいたゞく、これでほぼ4時間を楽しく過ごします。これが本来の茶の湯であり、つまり「お茶会」なのです。

利休時代の茶の湯は二刻、（今の4時間）を過ぎないことと千利休がいっておりました。

先づ集合時間に寄付待合で集まり、庭（露地）に出て、腰掛待合で亭主の迎えを待ち、そしてつくばいで手を清め茶室のにじり口より入り、懐石料理を頂きそして又一度外に出て、茶室内の模様替を腰掛待合で待ち、再び、つくばいで手と口を清めて、茶室に入り、濃茶、薄茶を頂く。

懐石料理は本来、招待した人（亭主）が、心をこめた念入な手料理を馳走するものなのですが、今はほとんど料理人の作ったものになってしまっています。

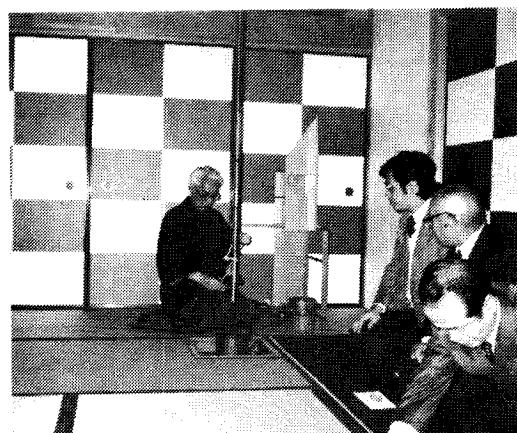
お茶を頂き、馳走のあいさつを終へて外に出るが、時間的に当初より数時間たった今、露地の風景も太陽の光りも変化し、又別の味合ひを味わって、今日一日の茶の世界を余韻をもって、露地より出していくのです。

これが茶の湯の楽しみということになっております。

今回如庵をとりあげましたのは、私が今まで茶室を勉強している範囲では、一番素晴らしい設計をされているものと思ったからです。

利休の茶室の代表、皆さんもご存知の山崎の妙喜庵待庵が2畳の茶室で、国宝になっております。この如庵も今は国宝です。

如庵を作りました織田有楽という武将は、織田信長の弟になります。信長は次男坊ですが、この有楽は11番目の男子です。大勢の兄妹がありました。



19人です。それでこの人は武将ですが、（1600年関ヶ原の戦で3万石の禄を家康から頂いています）優れた茶人でもありました。

この如庵が作られるまでに、10以上の茶室を作り又改造して、この「如庵」が彼の「茶の湯」の空間の集大成された茶室といえませう。

要所要所すべからく誠に良い寸法になっており、美しい豊かなデザインとなっております。

この如庵の概略は、今お手もとの資料にございます。これを説明させて頂きます。

先づ一番上は、有楽苑の鳥瞰図で、愛知県犬山市で明治村の10数軒先にあり、名鉄が管理しております、如庵はこの中にあります。

次の頁が、如庵を中心としたプロットプランの一部で、三枚目のプロットは、如庵とその書院で、大磯時代の配置です。

この時の方が茶事がやりやすい形になっておりました。

それは、茶室とつくばいと腰掛待合の関連性などが無理のないプランになっています。

次の頁がエレベーションですが、一般的の茶室では、にじり口の前は土庇、叩きになっていますが、

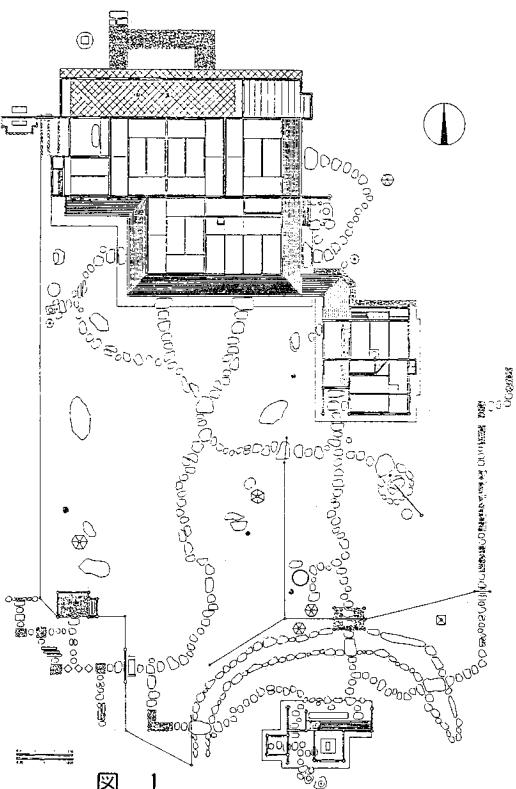


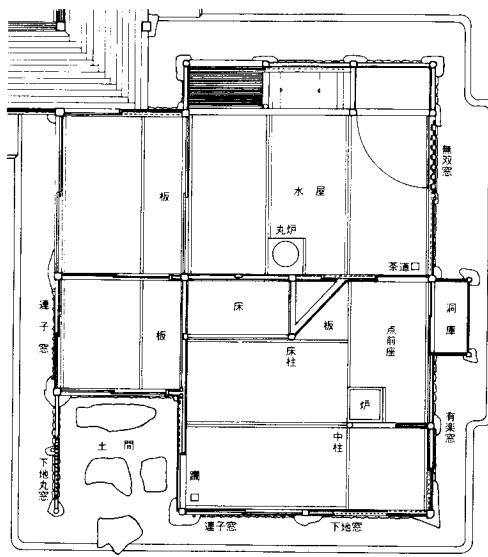
図 1

如庵は土庇ではなく大きく屋根をかけています。入母屋形のエレベーションで大変良いプロポーションをしています。

柱間が3つ、ほど間隔も平均化され、軒高も低くこれ程品のよい茶室はありません。

次は平面詳細図ですが特色は随時のべていきます。次は展開図、この展開図は普通の茶室にないものが大変そろっております。

次は、茶室如庵の後方にある書院の正伝院です。京都建仁寺塔頭正伝寺に先づ書院を建て、（1617年）当時は書斎でしたが、今は広間の茶会に使われております。（如庵茶会、など）



如庵平面図

図 2

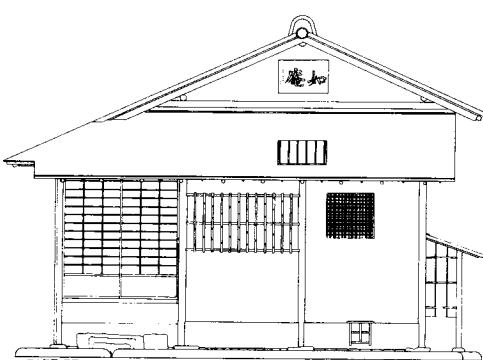


図 3

さて織田有楽という人のお話を致しますと先程述べましたように、織田信長の実弟で本名長益と申し、禅寺に参禪し、得度して、有楽斎と呼び如庵という雅号です「その庵の如し」の庵号で「如庵」を茶室の庵号にしました。今迄いくつかの茶室が「如庵」の扁額をつけて参りました。

織田有楽斎75才没(1621年)、千利休の死後(1591年 70才没)30年余命があり、利休にお茶の手ほどきを受けましたが、彼はやはり町人ではなく武家だったのと利休の求道的な厳しいお茶にやゝ抵抗をもち、武家として、ふくよかなお茶をたしなみたく、今も継承されております有楽流を作ってきました。

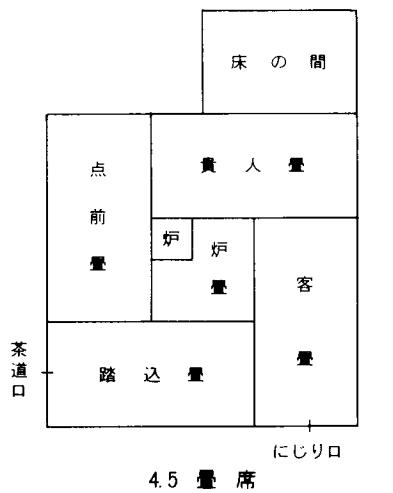
彼は非常に造型の深い人でいろいろなことを試み、そしてこの如庵までには12-3の茶室を作っていました。

この如庵の裏側に「元庵」という茶室が有ります。今から360年前、彼が大阪の天満にいる頃に九窓庵という茶室を作りそのプランを原型として、4~5年前に、前表千家家元即ち中齊宗匠が指導し、復原して、「元庵」と名づけたものです。

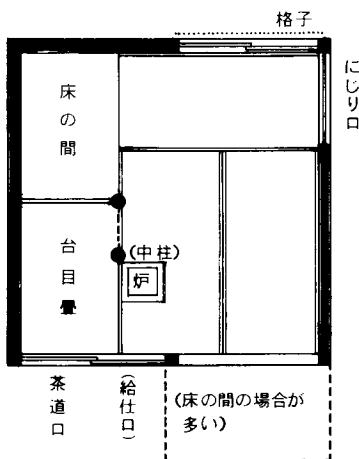
これがその当時「如庵」と呼ばれ扁額をかけたりしたこともあるといわれております。ときには「九昌院」ともいわれ、そのときのプランが、この復元されたものとほど同じになっています。

斯様にして、ほど同じようなプランがいくつか残っており、文献では如庵其の一、其の二、其の三などとなったりしています。

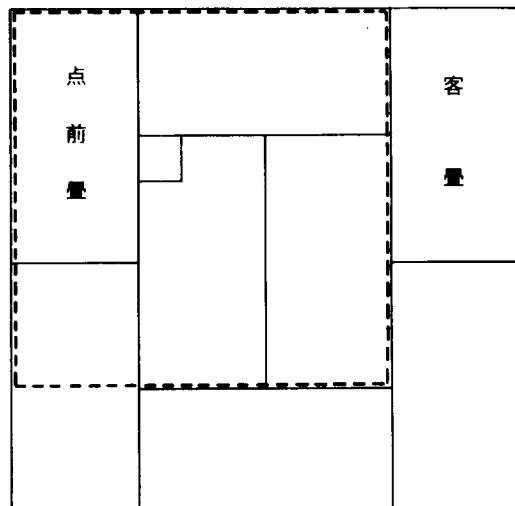
彼の作品でもう一つは、「九窓亭」なる九つの窓をもつ茶室があります。これを原型として、そのまま復原したものが現在横浜三溪園に「春草廬」として、有楽のものでは一番小さい三畳台目席と



4.5 塼席



3畳台目席



点前基本空間

図4 茶室一般平面図

して存続しております。

大正3年に横浜三溪園にもってきて、昭和33年にもう一度建て直したといわれています。

さて如庵が何がよくてさわがれているのか、簡単に書きますと（黒板に書く）

茶室は4.5畳が標準で、これより大きい部屋を「広間」小さなものを「小間」と呼んでいます。

4.5畳の茶室が標準ということは、4.5畳席は、小間のお点前でも広間のお点前でも双方通用する、つまり所作の基本が4.5畳をベースとしておりますから6畳でも、8畳でも又15、20畳でも点前の所作は4.5畳でのものになるのです。

小間の場合は、いうにおよばず佗びた感じの道具となり、広間ではやゝきやびらかな道具建てとなります。（炬縁など漆塗で蒔絵がほどこしたものなどを使います）。

広間はだんだん華やかになっていきます。お茶碗にしても、小間では渋い茶碗のところ広間では、京焼とか絵模様があつたり亦服装にしても、若い婦人のきれいな和服もよいが小間に入るのは、うつりがよくありません。

やはり真、行、草の空間があるということです。

お茶の世界ばかりではなく、日本人のある段階の話として、真、行、草、書道では楷書、行書、草書となるそれぞれの要素があります。

茶室の仕様でも、天井では平天井（真）、落天井のあじろ張り竹押縁（行）、掛込天井の竹（又は小丸太）の樋、竹の小舞、化粧野地仕上（草）になります。

如庵はどれかといえば、平天井ですが材料でやわらかく行の天井で、それに掛込天井の草と組合わさり、有楽独特のデザインではないでせうか。

そして如庵の特色と申しますと、まず普通茶庭（露地）より土庇の下のにじり口にて席に入るのであるが、こゝでは、にじり口に、このような大きな屋根を掛けている。

これは北陸とか雪国によくある手法です。（有楽は北陸に行った様子はない）

にじり口廻りは大半、土庇或は建物の屋根が前へ延びている程度なのです。

刀掛にしても一般はこの土庇の下、にじり口の脇に取り付けられています。

如庵は、露地より本屋根のある土間に入り刀はその奥の板の間に置き、それからにじり口より席に入る。

これは裏千家の又隠等利休の佗びの感じを彼は、武家として、あまり佗びにこだわらず優雅で瀟洒な茶会を催すための空間として、設計されたと思います。

にじり口前に丸窓があります。土間が暗くならないよう、下地窓にして明るさを採っています。

特に茶室における光の採り方、光の調整は、茶室空間のすべてですので、形式（種類）寸法をよほど適格にデザインしなければなりません。四季折々の窓の効用は物語となり、生命でせう。

窓もいろいろな窓の名前があります。これを説明致しますと如庵の場合のにじり口の上に竹がとんとんとなっています。一般の茶室にあるもので、「連子窓」といいます。

にじり口右側、南側壁の窓も「連子窓」です。

その右にある小さな窓、これは壁をほじくったように中の小舞竹のようにみえます。これを「下地窓」といい、室内側に片引か掛障子となります。如庵にはありませんが、点前座の真正面に、「風炉窓」といゝ点前の為に明をとる窓があります。如庵では真正面は火灯型にくりぬいた板とその前が客疊になっています。

点前座左側に普通2段の窓があります、これを色紙2枚にみえますので「色紙窓」といいます。

如庵では、特別の「有楽窓」になっています。

「墨蹟窓」、これも如庵にはありませんが、床の間の袖に、墨蹟（茶掛）に光をあてるための窓です。そして屋根裏の型をしています掛込天井に「突上窓」があります。トップライトで下端に障子を斜め上に滑べらし、木製の蓋板を突き上げて、昼、夜の光と室内の環境を変へる性能をもって、コントロールしています。

各所の名席と言われる茶室の内部は、大体照明を使わざとも、筆字の書物が読める程度のほどよい、こゝちよい明るさになっています。

亦、風の取り入れ方にしても優れています。

ですから、名席だからといって、移動してしまえば、その茶室の設計条件と違った特色は消えてしまします。移動するならば同じ条件下でなければなりません。「環境設計」このあたりが名席といわれるものは名設計じゃないかと思うんです。

茶室は本当にナイスデザインだと思います。

特にこの有楽という人は、「俺は今までの茶室と違ったことをやるのだ」という創造性の意識の高い人でした。その特色が点前疊の真正面に炉が

きってありこれを入炉といいます。普通は点前畳の外に炉があり出炉といいます。

この入炉を向切といつてます。あの山崎の妙喜庵待庵のは左隅にありますので隅炉と言ひます。

如庵では点前畳が丸々一畳に炉が切ってありますので丸台目畠といい普通は台目席では4分之三の畠で炉が外に出ています。これですと二畠の席では狭いので入炉にしたのでせう。

尚狭い二畠を再に広くみせる為、点前座の前に半畠が敷かれています。こゝに正客がくるかどうかわかりませんが、空間の拡大としては、ナイスデザインです。しかも自分の前に火灯口にくりぬいた杉板を前に建て、しかもその板は天井まではとどいていませんので自己の小空間を形成しています。どこにもみられない有楽だけのデザインです。尚、畠が一般の京間(3.5尺×6.15尺)よりやゝ大きくしてあります。

これはおそらく有楽が一人一人ゆっくり坐れるように配慮したのではないかと思います。

正客の席は、原則として前席(懷石料理飲食中)では床の前、後席(点茶の席)では亭主に一番近いところ、こゝ如庵では、点前座の前の真正面の

半畠に正客が坐ったかどうかはわかりません。

おそらく有楽はこの半畠を貴重な空間として、無の空間にして、従来の求道的空間に余裕をもたらしたものではないでせうか。

次に誠に使ひやすくしてありますのは、床の間右の壁を斜壁にしています。直角の壁よりも斜めの壁は、空間的にも拡大とやわらかさをみせています。

給仕口と茶道口を小間の席では両方りますが、こゝでは、茶道口一ヶ所にしてしかも斜め壁と床はそのため三角の場をつくって(鱗板と呼んでいます)それから炉が外に出ておらず点前畠の中なので茶道口の一ヶ所でも充分懷石料理の給仕がしやすく設計されていることが特色附けています。

更に空間を広く、柔らく見せるため腰に、窓台一杯の高さに古い腰を張っています。

腰張は普通点前坐が白の表紙で高さ8寸、客畠部分がねずみ色で高さ1.6尺です。

古腰が腰に張ってありますので、「腰張りの席」ともいわれています。

そして、向切の炉の前に中柱が建っています。普通台目席では炉が点前坐より出ていますので、中柱は炉の左手前にあり、材料は曲ったさるすべ



りなどが一般ですが、有楽は、真すぐの杉丸太ですっきりとやっています。

普通道安囲ひといって、淀看席などにありますのは、点前坐の右サイドで亭主が客にやゝみえる程度の火灯口を切り抜いたものがあります。点前座正面にありますのは如庵だけです。

道安囲とは一説には、利休の長男道安が足が悪かったので、点前の右側に火灯口を切った板を張り全身をみせなかつたといわれています。

村野先生は、如庵が大変ご執心のようです。御自宅には、たしかこの中柱と囲いがついております。ただし炉は入炉ではありません出炉です。

この形は、もう一つ仁和寺遼廓亭にあります。4つの部屋の一つが如庵とそっくりです。「有楽囲」と呼んでいます。

それに今度、村野先生は、新高輪ホテルの小間の茶室に、この如庵デザインで床の間右壁が斜め壁、床は鱗板の三角でなく、三角が幅1尺4寸で中板となって長く延びています。

このように村野先生は如庵がお好のようです。したがって、如庵は続いているといえませう。私もいつか如庵の斯様なシックなデザインをしてみたいと思っています。

それではスライドでご説明します。何しろ20枚たらずのものですから御諒承下さい。

先づ、これは鳥瞰図にございます。有楽苑の入口に入ったところです。

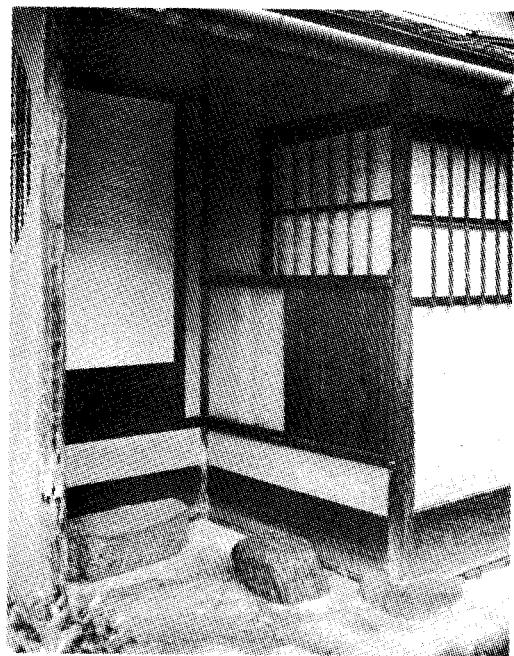
これは今度、こちらの方に如庵がございまして、あの敷地の中の裏の方です。どうぞ、はい、これには鳥瞰図にございますように、こちらが書院になってまして、書院がずっと続いて、これが如庵なんです。これはできるだけ木やなんかも当時180年位前に、如庵の絵がございます、（寛政11年1799、都林泉名勝団会）、又大磯にあった時にも、こゝへきた時も、出来るだけ木の位置など文献通り同じに植えてあるそうです。

そして如庵と露地との関係、アプローチとかそれらも、絵をもとにしているとのことです。

南側、庇がちょっと短いなと思いました。直射が室内に入りすぎていました。

文献では、この南側が、東側だったことかがあったという。土間の丸窓の下地窓からの光線をとって、この土間に、ほどほど明るさを入れた計算はすばらしい。

室内に入ったとき係員が障子開けたり閉めたり



していましたが、障子というものが光を拡散し柔らかくしたりしています。畳に土壁に天井に、ほどよい明るさを与へています。茶室ならではのものではないでせうか。

障子の白の美しさは、桂離宮もさることながら日本の美は、土壁の中の障子の白さと屋根の組合せにあるのでせう。

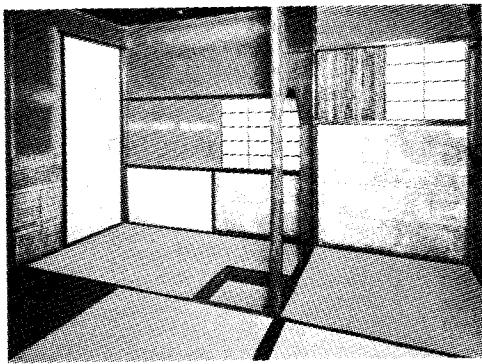
茶室の場合は更に、窓の連子窓、下地窓、竹の格子が一層日本の美を物語ってくれています。

こゝの土間は、玄関と書いた書物もありますし、土間の障子は、当初はなかったもので、こゝが刀の置場であった。今、障子が入っているのでかえって全体的にエレベーションになっています。

それから外部の腰巾木ですが、なんと魅力があるものでせう。普通よりも高さが高い。そして、茶室にあまりない床下換気孔がついている。この形も大変きれいなものだと思っています。

次は内部ですが、特色の一つは先づ腰張りです。そして有楽窓です。普通ですと2枚の障子で色紙窓なのですが、有楽は、竹を全部くっつけて面格子にしているのです。

そうすると節と節のすき間から風が、光がもれてくる、なんとデリケートなデザインでせう。有楽窓と呼んでおり、竹は、今はどこにもない「紫



の竹」と書いて「しちく」という竹で、天井も全部紫竹であったとか。

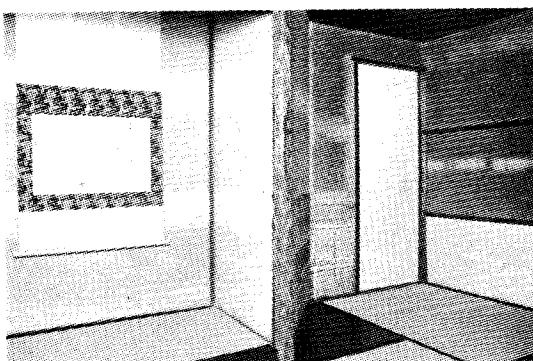
それから、この写真で、炉がこゝにございます。お点前は真正面に向います。（向切点前）

炉が入っていますから、他の畳はすべてお茶事の空間となります。村野先生の自邸のは、炉がこちらに出ていますから、それだけ部屋が狭くなってしまう。

腰張ですが普通ですと一尺六寸で、ねずみ色か紫色の表紙をはりますが、ご覧の通り窓下一杯でしかも古曆を貼っています。この為に土壁より全体的に、すごくやわらかさを感じさせていました。

それと、後で図面を見て頂くとわかるのですが、床の間の床框は、正方形に使う率が多いようですが、あの時分のを見ますと小間のせいもありますが、見付2寸3分とかその辺で、そして見込を薄くみせるのがみられます。特に有楽の場合は、部屋全体が当時の茶室より1割位小さく見せている。

そういう彼の細やかさの美意識がうかがえます。この写真では、斜めの壁が写っていませんが、



茶道口兼絵仕口になっている入口からサービスに入って、床の間の前の正客にサービスするのですが、斜め壁、入炉のため、広々としていますのでサービスがしやすいのです。

床の間は、奥行3尺よりやや浅くなっています。真々2尺3寸というところです。

ほとんどが杉材です。寸法につきましては当初の寸法、後から替へたという文献もあります。

床柱は八角になっている、やはり細くみせるためのものと思われます。

斜めの壁、空間の変化、機能的のよさ、茶室のような小さな場所には優れた考へであり勇気のいったことだと思います。

地板は三角になり、鱗板と呼んでいます。

茶道口の向こうにみえます、小さな「ふすま」これは洞庫という内部は水屋です。

足の悪い人か、ご年輩の人が道具をいちいち片付けなくとも、点前が終ったら、この「ふすま」を開け水をこぼし、使った道具はこの内に片付けます。

若い人は使かわないことになっています。代表的なものが、裏千家又隠にあります、流しはついていません。隣室水屋と通じており、水屋に居る人が片付けることになっています。如庵の洞庫は、水は地面にしみさせたのでせうか、流しの受けがありません（外部よりの観察して）

次に天井ですが、天井は真、行、草3段でなく平天井と掛込天井の2段になっています。

有楽は、2段あまり佗ず優雅なデザインにしたかったのでせう。

次は、東側外観で、これは、どこにも例のない彼独特の有楽窓です。外からみますと窓全部竹が詰めて打ってあります。これは洞庫の外側です。確かに有楽窓はこの写真のような色をしておりました。これは紫の紫竹なのかどうかわかりません。

これはつくばいです。釜山海と書いてあります。この時は加藤清正との関係があったので、あちら高麗からもってきたので、釜山海と書いたのでせう。

これは閑守石といいまして、こゝから先は歩けません。ゴーストッップのサインですので茶庭を歩くときにはこれさえご存知ならばどこの知らない庭でも入っていけるわけです。

これは裏庭に建っている「元庵」という茶室の玄関です。この灯籠は武家茶人の藤村庸軒という人が有楽に送ったものです。



茶庭には、一番かっこよいのは、織部灯籠がしつくり合うのではないかと思います。

これは裏側にあります「元庵」の茶室です。

これが有楽の九昌院、当時「如庵」と言っていたらしいんです。大阪の天満にありましたものを原型として、5～6年前に表千家先代家元即ち中斎宗匠が指導して建てたもので、庵号「元庵」は即ち中斎宗匠の付けたものといわれています。

こゝに珍らしいのは、にじり口の位置です。室のはじでなく真中になっています。

もう一つ珍らしいのは、中柱が竹になっている。それからもっとめずらしいのは、まあこれはあまり、設計して頂くと困るのですが、お点前をする左側が床の間で、「亭主床」と呼んでおります。ベテランでないとお点前がやりにくくなります。

表千家さんには多いと聞いておりますが、亭主のそばに床の間がない方がおちつくでせう。お客様にサービスが悪くなるのではないかと思います。

いづれにしましても、平面、展開、材料と総て有楽の原型通りです。

スライドはこれでお終りです。

まとまらない話でしたけれど、これからは、茶室をよりよく理解して頂きたいと思います。

なぜかといいますと、個人の家の茶室の場合は、注文者が大体お茶をたしなむ人か、又はお茶の先生がついておりますから、要求の内容がそれ程違うことはありません。

それが、文化会館、文化センター等々のパブリックの場合になりますと、設計先生たちが、書籍、図書等文献だけの調査だけで、形として設計してしまうことが大半です。ですから使いにくい茶室をよく見ます。

特に水屋においては、あまり文献がないものですから、使いにくい造りを多くみかけます。

先日もある文化センターに呼ばれて行ったのですが、一流の大手設計事務所のお仕事でしたが、具合の悪いのを見てきました。

（市側にどうアドバイスをしてよいか、大変迷ったわけです。）

パブリックの時の茶室の設計者の方には、特に水屋に関しては、充分お調べ願ひ注意して頂きたいと思います。なにしろ、大変高価な茶道具での準備室ですから、よりよく使ひ方を考へてほしいものです。

私は、今現役からはずれ茶室研究会なんかをやっています。出来るだけ安価で使いよい茶室しかも、新らしいデザインとはどんなものかを探しています。

基本的なものとしては一昨年新築建の1月の数寄屋臨時増刊にのせてあります。

これは住宅会社のモデルハウスの一室で、元、6層と押入、床の間、つまり八畳分の部屋を茶室に改造したものです。

この時、この住宅会社では、普通6層と押入、床の間の部屋を、茶室4.5畳、床の間、4.5尺の物入、そして4.5尺の水屋、6尺の道具戸棚で、変更費のみ110万です。（現在も同じです）。

材料はオール杉材、障子、ふすま、赤松皮付の床柱、杉みがき丸太たいこ床框、です。

とんだこと申し上げました。

今日は、ご静聴本当にありがとうございました。  
（拍手）

（本稿は昭和60年6月23日、建築学科同窓会総会記念講演をもとに作成したものです。）

（昭和14年卒）

# 中国の農村集落整備

東 正 則

## 1. はじめに

昭和59年（山東省）、60年（浙江省）と日中建築技術交流会を通じ、浦良一教授（明治大学）を団長とする農村住宅・集落整備調査団（一部新住宅普及会研究助成による）の一員として、中国の農村集落整備を調査する機会があったので、その成果の一部を紹介することにしたい。

本調査は広い中国のごく一部を限られた時間で調査したもので、まだ多くの調査の積み重ねを必要とするものであるが、とりあえず概述することにし、誤りの部分については御叱正を賜ることにしたい。以下、主に浙江省を例に述べることにする。

## 2. 中国の集落整備の方針

中国では最近集落整備が活発に行われているが、地域の条件が複雑多岐にわたるため、また集落整備の歴史が浅いこともある。現在は整備手法の蓄積段階と考えられる。これに対応するために全国一律の基準の適用を考えずに、個別の集落事情を配慮した整備を行うべく、また徐々に試行錯誤を経て整備手法を確立してゆく手法として集落計画の指導方式をとっている。

この指導方式とは、原則として各集落段階で作成した計画を上位の行政機関が審査指導して集落

整備を進めてゆく方式である。

一律の整備基準を定めないで、個別の集落事情に対応するには、各々の地域に適宜人材を配置する必要があり、集落計画技術者の大量養成が必要となってくる。これに伴い、省及び県段階で目下大いそぎで集落計画技術者を養成中である。

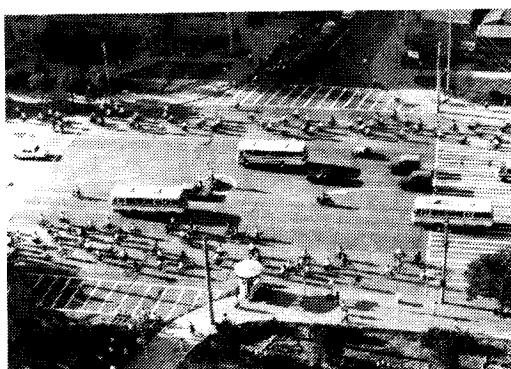
集落の指導方針についてみると、国段階ではおまかなか方針を決め、省や県等にゆくに従って具体的な内容を決めるようになっている。

国段階での方針は、全面的に計画を進め、正しい指導を行い、住民参加による計画を行い、自力での建設をし、地域条件に沿う計画をたて、全面改造でなく着実な整備をする、というおまかなかものである。

そして、農村を単に食糧生産の場と考えるのでなく、積極的に工業・副業・商業を発展させ、農村の生活水準の向上を図ってゆこうとしている。

次に浙江省段階の整備方針をみると、農村は人口が多く耕地が少ないとから、計画をたてるときは耕地ができるだけ保全する、工業区・住宅区等の土地利用や各種施設の合理的配置をする、農村の経済は発展したが住宅環境が不充分なため農村住宅の改善をする、ことを挙げている。

県段階では、例えば鄞県では、計画の地理的適合性、用地の節約、土地利用の合理性であり、紹興県では、計画は遠い将来に対応するものをつく



北京市の朝



北京市の歩道と街路樹

る、建設は一步一步年数をかけて進める、紹興の水郷・田園風景を保存する、のように省の指導のもとで県毎に特色が出ている。

### 3. 集落計画の作成

集落計画は前にも述べた如く、原則として集落段階で作成される。この経緯について、嵊県白泥坎村集落についてみると、計画の発案者は家族数が多く若者が多かったりで住宅環境に不満足な農家であるが、その数が多く、この住宅需要が集落整備に発展してきている。

これに伴い、集落内の居民委員会が、どの住宅を壊すか、どれを残すか、また建て直す住宅はどこに建設したら良いか、また住宅の面積はどの位が良いか、緑地をどの位残すかについて検討した。

次に居民委員会では、住民を全員集めて討論会を開き、約2ヶ月位かけて3回程計画図を描いて練り直しをして、最後に住民の大部分の賛成を得たものを県に提出している。

しかし、県には宅地面積、道路面積、宅地配分を取り決めた文章化したものを出したため、計画図が必要ということで県の承認が得られなかった。

それで郷政府（日本の町村役場に当る）から専門家が派遣され、現況の測量をし計画図を作っている。

このように概ねどの集落でも大衆討議によって計画を作成している。

### 4. 集落計画の指導内容

次に集落段階で、住民の直接参加によって作成

された集落計画に対して、具体的にどのような指導を受けているかをみることにする。

先に述べた白泥坎村集落では、県から次のような指導を受けている。

土地利用については、集落段階での計画では住宅発展用地としたものを工業用地へ変更し、荒地部分を住宅地に利用する。住宅等については、宅地面積を $134\text{ m}^2$ から $145\text{ m}^2$ に拡大すること、設備についても便所や豚のふん尿を利用したメタンガス発生池の設置をすること、住棟間隔を $1.5\text{ m}$ から $4\sim4.5\text{ m}$ にすること、また台門形式と呼ばれる伝統的住宅を保存すること、道路については、道路の格付けを行い拡幅・直線化・新設をすることを指導されている。

別の蕭県紅山農場集落では、将来の農業生産の発展を見込んで散在している集落を集約化して農地を節約すること、公共施設を合理的に配置すること、及び郷と郷を結ぶ道路の整合性について県の指導を受けている。

鄞県姜隴村集落では、この集落が典型的な水郷の集落なので、建築物の内部を改造して外型はむかしのような風情のあるものとすること、水濠に面して家並の配置を考えること、集落の建設資金の面からも、全面的な集落改造ではなく集落の経済条件に合わせて一歩一歩整備をすすめてゆくこと、と県の指導を受けている。

これらの指導は一般的に県の指導が多いが、なかには省の指導を受ける場合もある。

### 5. 集落計画の段階性

浙江省における集落整備の極めて特徴的なもの



鄞県の水田風景



鄞県五郷郷集落と淡水真珠の養殖

として二段階計画の存在をあげることができる。これは、まず最初におおまかな計画（粗線条計画と呼ばれる）をつくり、その後本計画をつくるものである。粗線条計画も本計画同様に県及び郷の指導を受ける。多くの集落計画は粗線条計画を経て本計画に至る。

この二段階計画の存在は、農村の経済発展がめざましく、住宅が古く住宅改善の要求が強いため、将来の計画に備えてとりあえず支障のない集落建設を進めてゆかざるを得ないこと、また計画技術的にも発展段階にあるため、計画を進めつつ計画手法の向上をすすめざるを得ないことから、この粗線条計画を最初に適用して、この現実の運用を通して矛盾を是正し、修正が終ったところでもう一度本計画をたてなおす方式をとったものと考えられる。

これは、無秩序な集落改造が起きないうちに、おおまかな計画をつくることにより、将来の本計画の作成をすみやかにし、これを試行錯誤的に微調整し、合意形成が固ってきたところで本計画に移行させるものであり、計画の遵守の面からも優れた手法といえよう。

粗線条計画は郷及び集落が一諸につくる場合が多いが、本計画が無い場合は、粗線条計画を先に定めないと建物の建設はできない。

この粗線条計画は、大きい集落で1/1000、小さい集落では1/500のスケールでつくられ、その計画内容は集落の範囲、土地の利用、大体の公

共施設や工業施設の配置、道路の位置、3~5年以内の事業計画が盛られている。

本計画は大体において粗線条計画を踏襲するが、内容としては更に具体的な建物の位置や保存すべき建物と取り壊すべき建物の指定等である。

## 6. 集落整備の促進助成

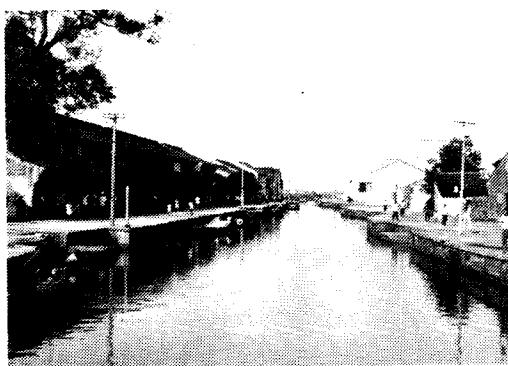
集落整備を進めてゆくためには多額の資金が必要となり、個人の経済条件が熟すのを待っていたのでは整備がおぼつかない場合がでてくるため、集落が古い建物の取り壊しに補助したり、建築材料の入手を助成したり集落毎に工夫を重ねている。

例えば先に述べた姜隴村集落では、省や県の指導のもとに古い木造の伝統的建造物を保存し水郷風景を保全する方針をたてているが、中国では建材となる木材の入手が困難であるため、国が木材を調達し、国からそれを購入する途を開いている。

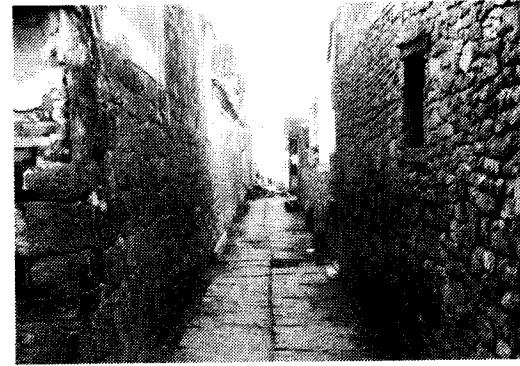
また紅山農場集落では、古い住宅を壊すのに補助を与えており、その金額は古い住宅の質によって異なる。新しい住宅の建設にも補助があり家族数によって額が異なる。

この他に集落によっては取り壊しの補助ではなく、古い住宅の石材や木材等を集落が買い取って、それを再使用する例や、また住宅の取得については、補助を受けて農家が自力で建設する場合と、集落が造ったものを購入する場合とがある。

しかし、全くこのような補助のない集落もあり、



姜隴村集落



姜隴村集落の路地

集落の経済格差や建設方針によって補助額にも差異がある。

また概ね集落では建設隊と呼ばれる建設組織を持っており建物の工事はこの建設隊が行っている。

## 7. 集落計画の担保

集落段階で作成した計画ではあるが、その計画の担保の基本は、上級行政機関による指導に求めることができよう。

しかし、この他にも間接的に担保に資すると思われるものがあるのでこれについて述べたい。

郷政府には建設管理部門があり、集落計画の指導や修正の他に建築物の施工管理、法律や規則の違反処理及び近隣調整の役割がある。

施工管理については、公共建築と私建築では方法が異っている。全ての建築について建築施工規範という基準があり、これによって検査する。公共建築については、施工中に時々検査に行き不良の箇所があればやり直させる。私建築については、特に農家住宅は自分で建てる場合が多く専門知識も乏しいため自分で判断できないことから、申し出で検査を受けることができる。要求が無い場合は検査に行かない。問題が見つかればやり直しや罰金を命ずる。これは主として建築の質的内容についてのものであるが、当然この時に集落計画との適合性をも前提にして判断されるものと思われる。

紛争処理は、親戚や兄弟間の財産権の帰属や遺産の配分争い、また近隣の建物による日照やプライバシー侵害に関するものである。

もうひとつは居民委員会の役割で、集落毎に居民委員会が設けられており、住宅を建設するときは居民委員会に申請し、居民委員会では家族数・敷地面積・建物面積・位置・建設期間等を検討し、



白泥坎村集落の古い住宅の中庭

適当であれば承認する。

これを今度は居民委員会から郷政府に申請し、郷政府の建設管理係が来て、現場で測量し位置を決定して、その後に建設が可能となる。

建設が許可されない土地として、道路用地、工業・副業用地、緑化用地、公共施設用地、農用地があげられる。これは当然集落計画の土地利用区分を前提に判断するものと思われる。

更には郷規民約の存在である。これは郷毎に郷長が全員を集めて生活全般について、自律的に規約を定めたものである。

集落整備にかかわるものとしては、道路及び宅地の利用や緑化について定めたものがあり、鄞県五郷郷集落では、住宅の高さは2階までとすること、道路と建物の高さは1対1とすることと、色は全村の色調に合わせること等を定めている。

これは集落計画を更に補完して内容を定めていると考えることができよう。

最後に農地転用の許可があげられる。中国では住宅需要に比べ耕地が狭いため、集落計画にあたっては農地の保全が重要課題である。このため農地転用はことのほか厳しく、転用面積によって  $1/3$  ha未満は県、 $1/3$  ha以上 $2/3$  ha未満は地区又は市、 $2/3$  ha以上は省の許可である。この転用許可も当然集落計画との整合性を判断してなされるものと思われる。

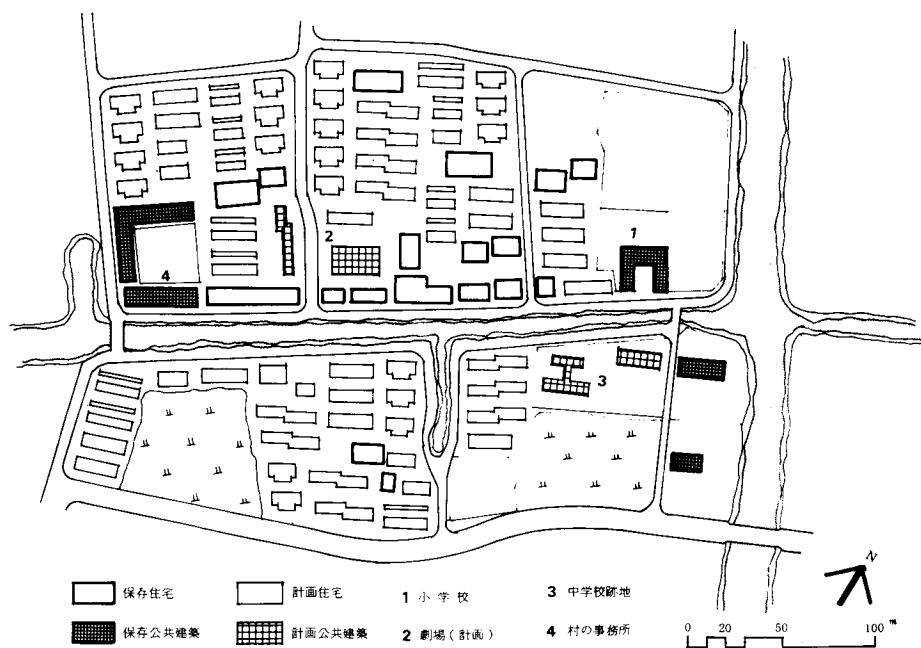
## 8. 山東省と浙江省の比較

ここで簡単に、先に行った山東省烟台地区と今回の浙江省寧紹平原地区の集落計画について比較してみたい。

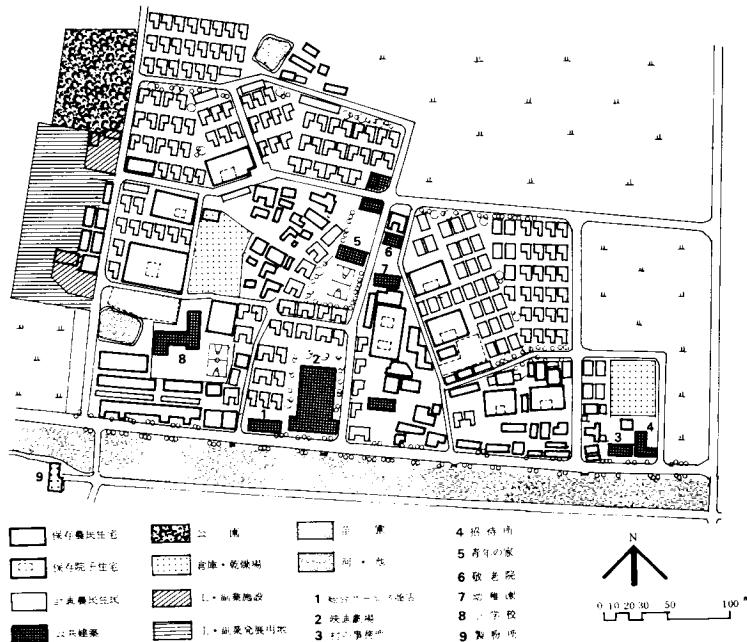
集落整備の契機からみると、ともに農地の保全では共通しているが、山東省では工業・副業の発



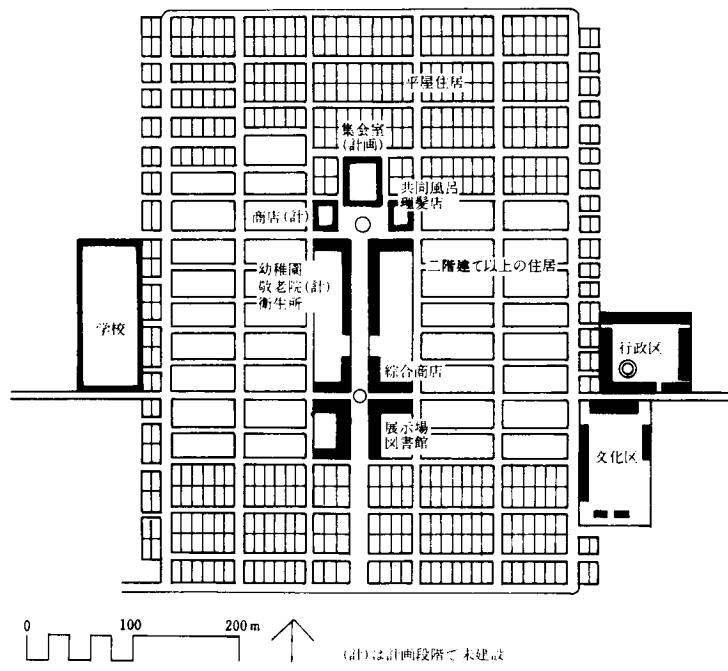
紅山農場集落の農家住宅



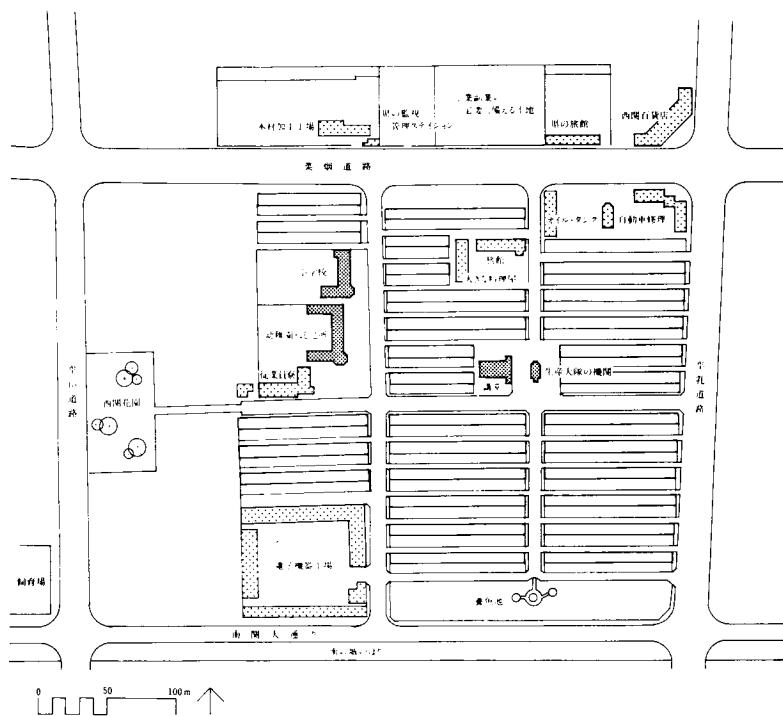
浙江省姜龍村集落計画図



浙江省白泥坎村集落計画図



山東省治基生產大隊集落計画図



山東省西關生產大隊集落計画図

展によるものが大きいと考えられるのに対し、浙江省では住宅の改善要求が大きいように感じられる。山東省では集落内にかなり工業・副業施設が入り込み拡張を続けており、各戸の中でも副業を営んでいる例さえ見られ、これに対応する整備の必要性が強く感ぜられた。

住宅の改善についてみても、山東省では連棟化や2階建化が盛んに進められていたが、浙江省ではどちらかと言えば個別の住宅改善の方向をとっているように感ぜられた。

更に大きな相違は、山東省の場合は集落整備がかなり大規模に行われ、全てを取り壊し全く別の所に集落を移転して整備する例さえ見られたのに対し、浙江省では古い建物をできるだけ利用し、むしろ全面的改造は行わないで部分改造をしながら一步一步整備を進めている点である。

従って、山東省では古い集落の面影も無く碁盤目状の街路を持つ集落計画もみられるが、浙江省では古い集落の形態をかなり残した計画が行われている。

これと関連して、浙江省では伝統的建造物や水郷等の風情を残すことに意を用いていることも特徴であろう。

これらの差異が、地域の特性によるものか、集落整備方針の変化や発展によるものかについては更に検討を続ける必要がある。

## 9. 集落整備の今後の方針

これまで主として浙江省での集落整備の進め方を見てきたが、以下に今後の展開方向を述べてみたい。



沈家坂集落の副業・布地捺染

まず、この集落整備のすすめ方について、評価すべき点としては次のことがあげられよう。

集落計画の指導方針として、中央政府では原則的な内容を定め、省から県へと移るに従って中央政府の原則をもとにしながら次第に具体的な内容となることによって、地域の実情に即した指導が展開できることがあげられる。特に整備課題や整備条件が一様でない広大な国土のしかも農村における整備手法としては適していると思われる。

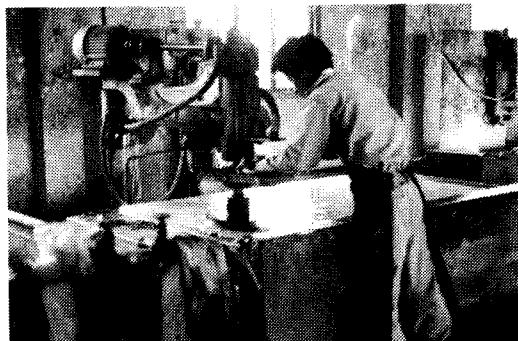
また、集落の整備手法が発展途上にあたり、更に多くの技術的蓄積を要しながら早急に対応せざるを得ない段階としては、地元農村と試行を重ねつつ、上級機関の指導のもとに、具体的集落の事情に照らして整備を進めてゆく手法は、極めて優れていると思われる。

中央政府の統一的・具体的指導基準が無いため、これに拘束されず真に地域農村にとって必要とされる計画事項について、農民と創意工夫を凝らして整備を進めてゆくことが可能になると思われる。集落にとっても、指導を受けるとはいえ、村の自主性も活かされており、自からの計画課題を設定し、自からこれに対する計画を作成できるため、建設意欲も湧き、計画の遵守も行われやすく、計画の担保の面からも評価できよう。

これらの利点は、急速にかつ広大な国土で集落整備を進めてゆこうとする中国の現段階では極めて重要なことと思われる。

しかし、この集落計画の指導方式にも、次のような課題が想定される。

それは、指導が明確な基準によるものではなく、抽象的な原則に基づいて、個別の具体的な事情に対応せざるを得ないため、ともすれば指導内容が



紅山農場集落の副業・人造石研磨

指導者の力量に左右されかねない点である。

個別の集落計画に対して、広域的な視点と長期の将来見通しを持った、単に上級機関の指導方針の受け売りではない、地域特性を考慮した指導を行うのは容易ではない。

現在大急ぎで指導者を養成中ではあるが、広大な国土の無数の集落整備に適格な指導を行えるよう指導者をそろえることは大変なことであろう。

また、計画の実施についても、地域の実情に合わせて逐次自力で整備を図る方針のようであるが、これらに対する実現手法が制度的に用意されていない計画の場合は、最悪の場合は単なる計画図にとどまってしまうことも予想され、計画の持つ指導性と実際の整備の実現性の乖離が生じ、集落計画の指導担当者は非常に難しい場面に直面することも予想される。

更にこの指導方式は、計画手法の改善を積み重ねながら発展させてゆくことがひとつの大所と思われることから、これからは進歩した計画技術を次々と普及させると同時に、指導者の再教育を行ってゆく必要がある。

中国では、農村における工業・副業の発展がめざましく、更に責任生産制も導入されて、農村集落相互間での格差が生じ、また万元戸の出現にみられるように農家間の経済格差もまた非常に大きくなってきており、農村集落整備の諸課題も多様化し、要求水準も高度化してきている。

例えば集落段階でも工業・副業が盛んになるにつれて、工副業用地の拡大の必要が生じ、輸送手段としての自動車化や農業の機械化が進み道路もこれに対応するものが必要となり、経済の発展に伴い居住環境の改善要求も強くなってきており、



紹興酒のラベル貼り

個人段階でも責任生産性による所得格差や、個人毎の副業の導入により、宅地や住宅利用の個別的变化が起り始めている。

中国における今後の農村集落整備は、住宅地におけるアメニティの向上、工・副業の拡大による環境悪化の防止を図りつつ、集落段階及び個人段階での課題の多様化にいかに対応してゆくかを考えることが重要となろう。

## 10. おわりに

ここで、筆者が農村集落整備のひとつの手法として学会等で主張している「集落自治的土地区画整理による土地利用秩序形成」の見地から、この中国の集落整備の方法について一言つけ加えておきたい。

日本においては、農村計画制度ともいべきものは存在しておらず、公的効力を有する集落計画も無く、集落整備のための事業手法も不備である。そして日本においても個々の集落はそれぞれの地域特性を持って存在している。

このような状況のなかで、中国での地方の特性を考慮し、集落の自主性を尊重しつつ、集落の全員の合意をもとに集落計画を作成してゆく方式は極めて注目に値する。

また、計画の担保についても、集落内の居民委員会が住宅の建設管理等のチェックに参加し、また集落で自律的に郷規民約を定めて諸問題を調整している手法もまた注目に値する。

このような、中国の集落整備のすすめ方は、筆者がこれまで主張してきた日本での集落整備の手法と近似している点もあり、興味深い方式であり、



蘇州市内の水路風景

今後更に機会をみて理解を深めたいと思っている。

最後にあたり、本報告は先に述べたような調査団の一員として、筆者がヒアリングした部分を主体に主観的に構成したものであり、内容についての責任は全て筆者が負うべきものであることをおことわりしておきたい。

（調査に参加の機会を与えて下さった浦団長に謝意を表します）

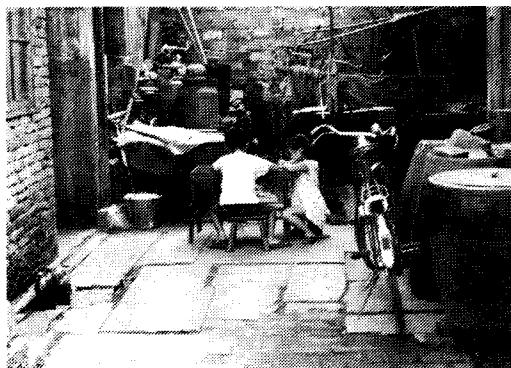
尚、調査団の報告書としては以下があるので参考していただきたい。

「中国農村における住宅建設と集落整備に関する研究」

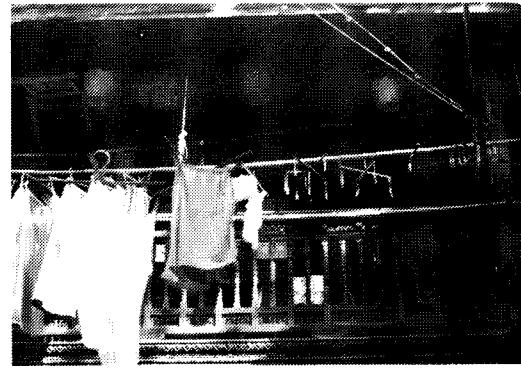
1985年 住宅建築研究所

浦良一、下河辺千穂子、荻原正三、林泰義、山田晴義、東正則、川島雅章、竹下輝和、菊地成朋

（工学院大学助手、昭和41年卒）



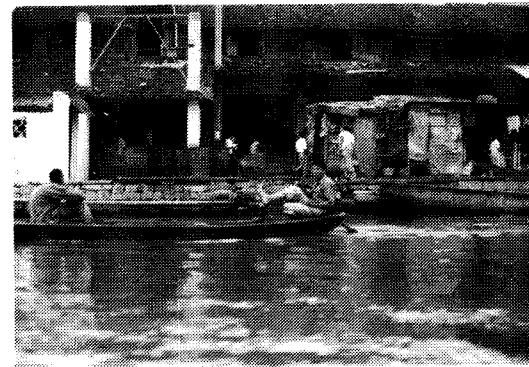
寧波市の古い都市住宅中庭



寧波市の古い都市住宅 2階テラス



寧波市の市場風景



紹興市の足で漕ぐ舟

~~~ 同窓生のニュース ~~

## 同窓生関係のコンペ入賞者

昭和60年1月～12月

- 永 堀 克 則(大学院生) 第20回東京建築士会建築設計競技 銅賞
- 河 崎 泰 了( " ) 昭和59年度まちづくり設計競技入選(主催 住宅生産振興財団 後援建設省)
- 谷口宗彦 講師(1968年度卒) 東京建築士会主催 住宅建築賞 受賞 岡 晴夫邸住宅
- 谷口宗彦 講師 墨田区主催 墨田下町住宅公開設計競技 優秀賞
- 栗 山 克 也(研究 生) " " "
- 平 井 真 夫(1970年度卒) " " "
- 高 橋 考 栄(1975年度卒) " " "
- 浅 羽 昌 之(1977年度卒) " " "
- 坂 井 治 雄(1983年度卒) " " "
- 後 藤 成 身(大学院生) 第一回 三州丸栄主催「屋根と住い」設計競技 2等
- 河 原 利 和( " ) 1985年 ミサワホーム全国学生住宅提案競技 佳作
- 小 榎 祥 司(1977年度卒) 神田下町住宅町並設計競技佳作(主催 千代田区 後援 建設省 東京都)
- 河 崎 泰 了(大学院生)
- 吉 原 辰 治(大学3年生)
- 西 尾 順 文(大学院生) 昭和60年度日本建築学会設計競技 支部入選
- 上 田 力( " )
- 友 野 康 宏( " )
- 新 宅 滋 則( " )
- 小沢 明 教授 日仏新建築設計競技 PAN13J 「バンリューを創る」 入賞
- 大 前 泰 也(大学院生)
- 加 藤 朋 行( " )
- 河 崎 泰 了( " )
- 小 高 浩 義( " )
- 永 堀 克 則( " )
- 成 田 治( " )
- 西 尾 順 文( " )
- 古 河 純 一( " )
- 松 田 邦 弘( " )

**第19期(1984) 一般会計報告**

| 予 算                                 |                                                                                                 | 決 算                                                         |                                                                                                                                                  |
|-------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 収 入                                 | 支 出                                                                                             | 収 入                                                         | 支 出                                                                                                                                              |
| 1) 会 費 2,500,000<br>準会員会費 2,500,000 | 1) 会費発刊費 2,600,000<br>編集費 100,000<br>印刷費 900,000<br>発送費 1,600,000                               | 1) 会 費 2,616,000<br>( 115,000)<br>準会員会員 2,616,000           | 1) 会 誌 50,000<br>発刊費 (2,550,000)<br>編集費仮払い 50,000                                                                                                |
| 2) 雑収入 70,000                       | 2) 各部会費 1,100,000<br>O B会援助費 100,000<br>学園将来計画研究費 1,000,000                                     | 2) 雜収入 106,000<br>(36,000)<br>日経広告代 91,000<br>小冊子売上げ 15,000 | 2) 各部会費 549,200<br>(550,800)<br>O B会援助費 (十和田研) 32,000<br>(吉田研) 7,200<br>(伊藤研) 10,000<br>学園将来計画研究費 500,000                                        |
| 3) 組入金 6,630,000                    | 3) 名簿発刊費 850,000<br>新卒業生名簿費 300,000<br>全体名簿発刊費 550,000                                          | 3) 組入金 2,155,431<br>(-4,474,569)                            | 3) 名 簿 114,800<br>発 刊 (735,200)<br>名簿整理費 114,800                                                                                                 |
|                                     | 4) 本部運営費 350,000<br>会議費 200,000<br>本部主催活動費 150,000                                              |                                                             | 4) 本部費 257,110<br>(92,890)<br>応化会30周年記念 10,000<br>専門学校の会 15,000<br>波多江先生の会 10,000<br>下元先生御盡前 10,000<br>事務諸費 2,450<br>事務費仮払い 9,660<br>会議費 200,000 |
|                                     | 5) 準会員援助費 1,550,000<br>奨学基金 1,000,000<br>卒業生記念品代 300,000<br>前年度卒業生記念品代 150,000<br>学祭援助費 100,000 |                                                             | 5) 準会員 1,156,900<br>援助費 (393,100)<br>奨学基金 1,000,000<br>5・8年度卒業記念品代 156,900                                                                       |
|                                     | 6) 総会費 350,000<br>総会費 200,000<br>パーティ一費 150,000                                                 |                                                             | 6) 総会費 312,930<br>(37,070)<br>総会通知印刷費 104,350<br>発送アルバイト代 167,800<br>懇親会費 40,780                                                                 |
|                                     | 7) 校友会分担金 2,200,000<br>運営分担金 1,262,000<br>会報発送分担金 938,000                                       |                                                             | 7) 校友会 2,029,555<br>分担金 (170,445)<br>運営分担金 1,262,000<br>会報分担金 244,305<br>発送分担金 523,250                                                           |
|                                     | 8) 予備費 200,000                                                                                  |                                                             | 8) 予備費 406,936<br>(-206,936)<br>卒業式祝賀会分担金 400,000<br>借入金利子 6,936                                                                                 |
| 合 計 9,200,000                       | 合 計 9,200,000                                                                                   | 合 計 4,877,431                                               | 合 計 4,877,431                                                                                                                                    |

第19期(1984) 運用財産目録

| 第19期当初      |                 | 第19期末       |                 |
|-------------|-----------------|-------------|-----------------|
| 1 ) 貸付信託元金  | 1 6,4 0 0,0 0 0 | 1 ) 貸付信託元金  | 1 5,4 0 0,0 0 0 |
| 2 ) 貸付信託積立口 | 6 6 8,7 1 7     | 2 ) 貸付信託積立口 | 6 5 4,0 4 4     |
| 3 ) 第一勧銀積立口 | 3 8 9,9 5 6     | 3 ) 第一勧銀積立口 | 2 4 1,4 7 0     |
| 4 ) 郵便振替口座  | 4 2,2 9 0       | 4 ) 郵便振替口座  | 4 2,2 9 0       |
| 計           | 1 7,5 0 0,9 6 3 | 計           | 1 6,3 3 7,8 0 4 |

会計監査報告 昭和60年4月11日

帳簿、領収証監査の結果、記載が正確である事を認めます。

建築学科同窓会監査委員

杉野福三 印

大塚毅 印

## 第20期(1985)一般会計予算

| 収 入      |           | 支 出           |           |
|----------|-----------|---------------|-----------|
| 1) 会 費   | 2,500,000 | 1) 会誌発刊       | 1,250,000 |
| 準会員会費    | 2,500,000 | NICHE №10 印刷費 | 1,000,000 |
|          |           | 編集費           | 250,000   |
| 2) 雑収入   | 126,000   | 2) 各部会費       | 1,100,000 |
| 日経広告代    | 126,000   | O B会援助費       | 100,000   |
|          |           | 学園将来計画研究費     | 1,000,000 |
| 3) 発送援助費 | 595,000   | 3) 名簿発刊費      | 1,500,000 |
|          |           | 1985年名簿印刷費    | 1,400,000 |
|          |           | 1986年名簿編集費    | 100,000   |
| 4) 組入金   | 5,286,500 | 4) 準会員援助費     | 1,537,500 |
|          |           | 下元奨学基金        | 1,000,000 |
|          |           | 59年度卒業記念品代    | 337,500   |
|          |           | 学祭援助費         | 200,000   |
|          |           | 5) 講演会費       | 50,000    |
|          |           | 6) 総会費        | 2,170,000 |
|          |           | 総会通知印刷費       | 120,000   |
|          |           | 懇親会費          | 50,000    |
|          |           | 総会通知発送費       | 2,000,000 |
|          |           | 7) 本部費        | 300,000   |
|          |           | 8) 予備費        | 600,000   |
| 合 計      | 8,507,500 | 合 計           | 8,507,500 |

### 建築学科同窓会会員名簿（限定200部・B5 569頁）

会員販布価：5,000円(送料共)

1986年版・全会員名簿完成

1. 工手学校(明治22年卒～昭和3年卒)
2. 工学院(昭和4年卒～昭和25年卒)
3. 工学院短期大学(昭和29年卒～昭和31年卒)
4. 工学院大学(昭和30年卒～昭和60年卒)
5. 工学院大学専攻科(昭和35年卒～昭和56年卒)
6. 工学院大学大学院(昭和41年卒～昭和57年)

姓名(アイウエオ順)索引、勤務先名称(アイウエオ順)索引があり  
大変便利です。但し会員の迷惑になるような名簿の乱用は厳禁です。

### ■編集後記

皆様ご健勝のことと存じます。一年間が経つのは早いもので、このたびはニッチ第10号をお送りします。編集子としては定期刊行が大変気骨の折れることと痛感しています。

さて、今号からは「先輩を訪ねて」をシリーズとして企画しました。伝統ある工学院といっても我ら後輩としては諸先輩の活躍や業績をあまり知らないのではないかとの反省から生まれたものです。ご期待下さい。

吉田先生のインタビューについては、先生が心よく応じて下さり、大変長時間で充実したものになりました。

また、金尾会長の茶室についての造詣の一端、東氏の中国農村についての研究の一端もそれぞれ披露していただきました。

興味のある記事が次々と出てきて編集子としては嬉しい悲鳴をあげているところですが今後も皆様の一層のご支援、ご協力をお願ひいたします。

(初田・岩田記)

## ニッチ VOL 10 昭和61年3月22日

発 行 工学院大学建築学科同窓会  
東京都新宿区西新宿1-24-2

☎ 160-91 TEL 342-1211内287

編集者 初田 亨 岩田 俊二

印刷所 (株)プリントボイ  
東京都千代田区内神田2-8-3片山ビル  
☎ 101 TEL (03)254-9680